

193. 4-D37㉿



1200500728687



始

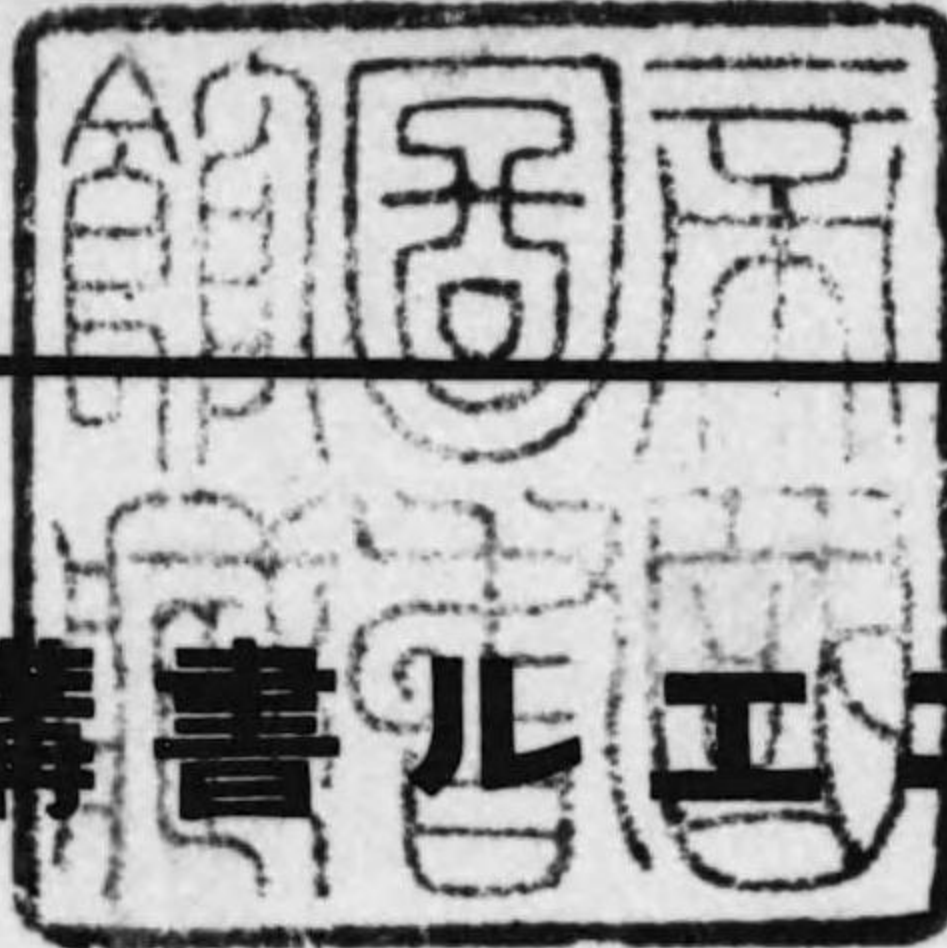


193. 4-D37
1200500728687
34
37

MADRID
An Exposition



193.4
+A-65
D.37



解講書正工ニ夕

— 答應の史歴るす對に聲の言豫 —

著編部輯編社音福之世末



新
城
大
庫

京 東
社 音 福 之 世 末

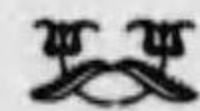


Exposition

of

Daniel

The Response of History
to the Voice of Prophecy

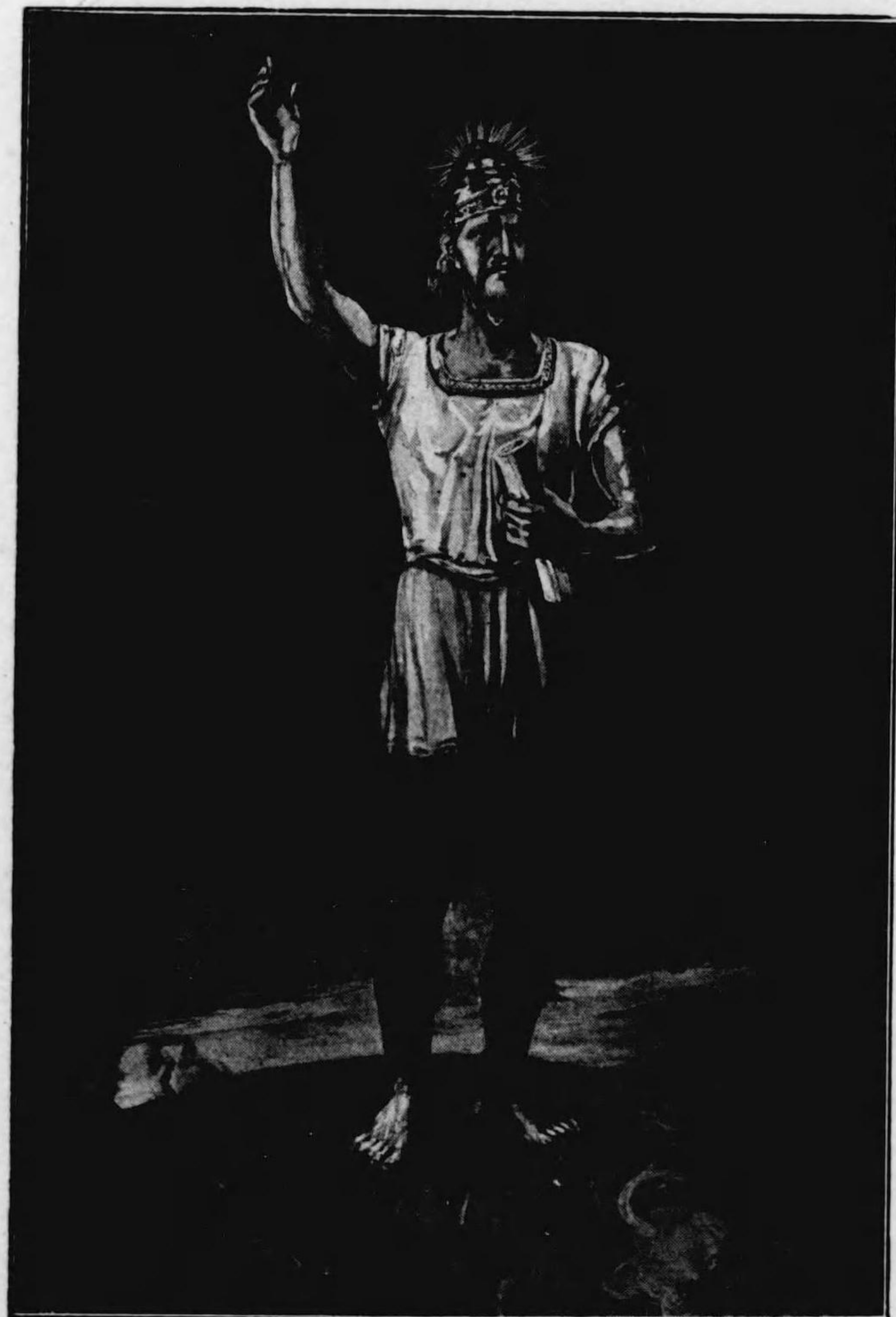


Behold, the former things are come to pass,
and new things do I declare:
before they spring forth
I tell you of them.

Isa. 42:9.



Printed and Published by
S. D. A. MISSION PUBLISHING HOUSE
171 Amanuma, Suginami-machi, Toyotama-gun.
Tokyo, Japan.



序

聖書六十六卷の中、ダニエル書とヨハネ黙示録とは、特に注意して研究を要する二大豫言書である。若しこの兩書を不可解又は難解と速断して研究を怠るならば、それは甚だしい靈的損失と云はねばならない。勿論聖書的基督教の基礎、贖罪の中心問題は十字架である。之の問題に就て明快なる知識と信仰とを所持してゐる事は肝要の事である。けれども神が人類の歴史を支配して居給ふ以上、その歴史を通じて神の救の計畫が、如何に各時代に於て遂行されたか、又將來如何なる過程を経て救済の大業が完結されるかといふ事を、我々各自が熟知して居る事は、是亦必要缺く可からざる事ではないか。それには是非二大豫言書たるダニエル書とヨハネ黙示録とに精通しなくてはならない。世間には、聖書はよく判つた、それは貴い書物である、權威ある書物であるを力説して居ながら、この二大豫言書に就て全然誤つた解釋を下して居る者が尠くないが、奇怪の話である。

現代の基督者のみならず、一般の人々も、豫言に對する態度は概して冷淡である。甚だしきに至つては愚夫愚婦を惑はすものとして、一顧をも與へないといふ態度である。所謂信者や占筮者がするやうな怪しい豫言に對しては、それでも良からう。けれども約二千五百年間に亘る世界人類の歴史が、ダニエル書、ヨハネ黙示録兩書の豫言の如くに成就した事を明證するからには、これだけはさうしても拒否することは出来ないのである。

ダニエル書、ヨハネ黙示録の兩書は決して不可解の書ではない。誰でも熱心に眞理を渴望する精神と祈禱とを持つて研究するならば、理解し得るのである。イエスはダニエル書に就て「讀む者さされ」(太二四ノ一五)と宣給ひ、

引き発見者として有名なアイザック・ニュートンの如きても聖書の豫言研究を大切なものとして力説した。
 ダニエル書は紀元前五六百年頃から世界歴史の終末に至る迄の、神聖なる大ドラマ的脚本である。而してこの脚本の大部分は歴史ミなつて實現した。残る僅かの未來歴史が我々の眼前に展開することは、疑ふ餘地がない。
 聖靈は我々各自に、「豫言を藐視すること勿れ」(撒前五ノ二〇)を警告して居る。又聖書の豫言は「豫言者の確言」(彼後一ノ一九)であつて、暗き處を輝かす「燈火」(詩一九ノ一〇五)である。今や懊惱と悶慮の渦中に陥つて居る人類を救済するものは、區々たる人間的企圖ではない、神の計圖を究めてそれに全的信頼を置く事である。この註解書が唯に基督者に限らず、有ゆる階級の人々に愛讀せられ、尙進んで基督の贖罪を信受し、永遠の幸福を享けられん事は、編者の衷心からの祈願である。
 終りに、本書を編するに當つて、大部分はユライア・スミス氏著「ダニエル書講義」(Thoughts on the Prophecies of Daniel)に負ふものである事、尙エイチ・オー・スワタウト氏著「亞西偉人軼事」(支那譯)、外二三の著書を參考した事を附記し、且それ等の著者に對して深甚の謝意を表する次第である。

大正十五年初夏

目次

緒言	1
捕虜の虐待	2
離散したるユダヤ人	3
領土なき民族	4
第一章 捕虜となりたる貴公子	6
エルサレムの滅亡	6
選拔せられたる四貴公子	9
姓名の変更	10
ダニエルの榮貴主義	11
卒業試験とその結果	14
第二章 豫言と四大帝國の興亡	16
ネブカデネザル王の夢	16

智者學者の召集	一七
王の要求と學者の回答	一八
報賞と刑罰	一八
ダニエル天の神に祈る	二一
ダニエル夢の啓示を受く	二一
ダニエルの参内	二四
ダニエルの上奏	二六
王の見たる夢	二八
夢の解明	三〇
新バビロニア帝國の建設とその終焉	三二
世界統一といふ言葉の意義に就て	三四
壯大無比なりしバビロンの都城	三五
バビロンとヘルシヤの交戦	三七
クロス王のバビロン攻略	三九
豫言と歴史の合致	四〇
榮華の宮もあはれ禽獸の巢窟	四二
第二王國メド・ヘルシヤの國情	四四
第三王國ギリシヤの擡頭	四六
アレキサンダー大王の業績	四八
第四の王國	五〇

羅馬の分裂	五一
分裂後の諸國	五二
歐洲各皇室間の姻戚關係	五五
編述と英國	五六
神の言は永遠にたゞん	五七
第五の王國	五七
ネブカデネザル王の感激	五九
第三章 國家と宗教	六二
金像の建立	六二
金像の除幕式	六三
三青年訴へらる	六四
三青年火爐に投ぜらる	六五
奇蹟的救護	六六
服従の勝利	六九
第四章 ネブカデネザル王の改宗	七二
ネブカデネザル王の詔勅	七二
ネブカデネザル王の第二の夢	七三
王に對する警告の使命	七七

使命の拒否	七九
感謝の歌	八〇

第五章 バビロンの滅亡

滅亡前夜の大酒宴	八三
壁上の文字	八四
豫言者ダニエル召出さる	八五
ダニエル壁上の文字を解明す	八七
マルシャザル王の死	八九

第六章 ダニエル獅子の穴に投ぜらる

忠臣ダニエル	九一
ダリヨス王新しき禁令を出す	九三
ダニエル獅子の穴に投ぜらる	九五
獅子ダニエルを害せず	九六
ダリヨス王の詔勅	九八

第七章 四巨獣と歴史的大豫言

ダニエルの異象	一〇〇
四巨獣海より上り来る	一〇〇

バビロン帝國	一〇二
メド・メルシヤ帝國	一〇四
ギリシヤ帝國	一〇五
ローマ帝國	一〇七
小き角の出現	一〇八
天に於ける審判の光景	一〇九
第四の獣の運命	一一〇
基督の戴冠式	一一二
異象の解明	一一三
再び小き角に就て	一一四
聖徒國を受く	一一五
至高者の聖徒を憐れまさん	一一六
法王権の發達	一一九
至高者に敵して言を出し	一二〇
法王権の迫害	一二一
時と法とを變へんことを望まん	一二三
一時と二時と半時	一二六
日本に於ける天主教會	一二九
天主教の教理	一三〇
聖徒の凱旋	一三一

第八章 牡羊と牡山羊及び小き角

何故の異象ぞ 一三二

新たなる異象 一三三

シユシヤンに於て與へらる 一三四

二つの角ある牡羊 一三五

牡山羊と牡羊との戦 一三八

四つの著明しき角 一四〇

一つの小き角いできたり 一四四

二千三百の朝夕 一五一

異象の解明 一五二

三度顛覆へされん 一五三

メド・メルシヤとギリシヤ 一五四

三度羅瑪について 一五六

ダニエル失神して病む 一五七

第九章 最長期間の豫言

七十年の捕囚 一五七

ダニエルの謙遜 一五八

ダニエルの祈禱 一五九

第十章 大豫言者の晩年

ダニエルに與へられたる最後の異象 一九二

ダニエルの熱烈なる祈禱 一九三

三度天使ガブリエルの來訪 一九四

神人間の愛情 一九六

祈禱の應驗 一九八

神民の將來 二〇〇

天使ダニエルを激勵す 二〇一

第十一章 近東問題と世界の終末

ヘルシヤの諸王	二〇三
アレキサンダー大帝	二〇四
北の王と南の王	二〇五
埃及とシリヤの葛藤	二〇七
セレウクス・カリニカスとトレミー・エウエルゲテス	二〇九
セレウクス・カリニカスの二子	二一一
トレミー・フィロパターとアンチオカス・マゲナス	二一二
ユダヤ人の大虐殺	二一二
埃及の幼君エヒファネス	二二三
七十人譯聖書の翻譯	二二四
羅馬の建國	二二五
シドン城の陥落	二二八
ホンハイ、エルサレムを攻落す	二二九
トレミーとクレオパトラ	二三一
クレオパトラの策略	二二三
シーザー排斥運動	二二四
シーザーの戦捷	二二五
英雄ジュリアス・シーザーの最期	二二六

オーガスタス・シーザー	二二七
タイベリウス・シーザー	二二九
タイベリウスの最期	二三〇
契約の君	二三〇
ユダヤ同盟	二三二
猶太國民と親善及攻守同盟に関する議院の訓令	二三三
羅馬の謀略	二三四
羅馬の三頭政治	二三五
アントニーとクレオパトラ	二三六
クレオパトラの遁走	二三七
アントニーの敗戦	二三八
オーガスタスの妹オクタヴィヤ	二三九
シーザーの凱旋とクレオパトラの自殺	二三九
エルサレムの滅亡	二四〇
羅馬の衰微	二四一
カルタゴの戦	二四二
天主教が最上權を掌握するまで	二四四
コンスタンチノープルの革命	二四七
殘暴可惡物を立てん	二四八
羅馬の包圍	二五〇

善戦したるウォルデンセス	二五二
千二百六十年の暗黒時代	二五二
ルーテルの宗教改革	二五三
終 の 時	二五四
佛蘭西革命	二五五
結婚制度の蹂躪	二五六
ナポレオン皇帝	二六〇
貴族制度の廢止	二六二
佛蘭西と埃及及び土耳其の三角關係	二六三
ナポレオンの埃及遠征	二六六
佛蘭西と土耳其の戰爭	二六六
セント・ジャン・ダーカーの總攻撃	二六八
ナポレオンの敗北	二六九
土耳其軍の追撃	二七二
佛軍の惨敗	二七二
埃及と土耳其に貢を納む	二七四
東洋の病人	二七五
近 東 問 題	二七六
彼つひにその終にいたらん	二七八
日 露 戰 争	二八〇

世界的大戰争	二八四
土耳其の滅亡	二八六
第十二章 現代とダニエルの使命	二八八
土耳其の滅亡と基督の再臨	二八八
大いなる君ミカエル	二八九
大いなる艱難	二九二
特別の復活	二九三
衆の目彼を見ん	二九四
頓悟者は空の星の如くに輝かん	二九五
廣大無邊なる天界	二九六
ダニエル書は封じられたり	三〇〇
驚く可き二十世紀	三〇一
豫言の時は來れり	三〇三
ゴオルテール及ニュートンの豫言觀	三〇五
文化と教化運動	三〇七
十分の一秒大	三〇八
福音宣傳と印刷機	三〇九
法王權と千二百六十年	三一〇
本書は不可解の書に非ず	三一二

附 録

一千二百九十日	三二四
一千三百三十五日	三二五
汝等の目は見汝等の耳は聞くが故に幸福なり	三二六
	三二八

挿 畫 目 次

紀元前六百六年バビロンの軍勢エルサレムを攻略す	六—七
世界史上にあらはれたる四大帝國	二八—二九
バビロンの廢墟より發掘されし刻碑の一部	三〇—三一
往昔に於けるバビロン都城の繁華	三六—三七
二千年間地下に埋没して最近發掘されたバビロン	四二—四三
アレキサンダー大王ダリヨス王の無慘なる末路を目撃して感慨に於ける	四八—四九
羅馬分裂後の十ヶ國	五三—五五
金像の建立と之が禮拜を拒絶したる三青年	六三—六五
火爐の中に投ぜられたる三青年從容自若としてその中を歩む	六八—六九
ネブカデネザル王野に逐はれて野獸と共に起居す	七六—七七
ベルシャザルの大饗宴	八四—八五
ダニエル獅子の穴に投ぜられしも毫も危ぶみ蒙らず	九六—九七
第一の 歌	一〇一—一〇二
第二の 歌	一〇三—一〇四
第三の 歌	一〇五—一〇六
第四の 歌	一〇七—一〇八

小き角	108—109
二つの角ある牡羊	114—115
目の間に著しき一つの角ある牡山羊	116—117
四つの角と小き角	120—121
天使ガブリエルの來訪	124—125
十字架上のイエス	127—128
二千三百年	126—127
曠野の幕屋	126—127
贖罪の日	128—129
アレキサンダー大帝死後の四分裂國	130—131
シーザー羅馬に凱旋す	131—132
タイタスの凱旋門	132—133
佛蘭西革命當時回國民の拜跪したる純理の女神	133—134
オットマン帝國全盛時代の版圖と千九百二十五年の土耳其	134—135
現時のコンスタンチノープル	135—136
驚くべき交通機關の進歩	136—137

ダニエル書講解



ダニエル書講解

— 豫言の聲に對する歴史の應答 —

言

ダニエルの生涯は神武天皇の御即位後約四十年で、支那の孔子がその働を始める約一百年前、又印度の釋迦に先だつこゝ凡そ半世紀であつたことは、實に面白い對照ではないか。

本書に紹介せる歴史の了解に資せんために、先づその當時の世界に於ける主なる國々の概況を述べれば、次の如くである。その當時西方亞細亞に覇をなしてゐた國は、アツシリヤ、バビロン及びペルシヤであつて、ペルシヤはメデヤミ同盟したこゝがある爲に、その國はメド・ペルシヤと呼ばれてゐた事もあつた。又その當時比較的獨立してゐたのは、地中海を國境とし亞細亞の最も西部を領してゐた十二の支派であるイスラエルの國であつたが、そのイスラエルの國は第三代の王の死後二ヶ國に分裂した。即ち十の支派は之まで通りイスラエルの國を稱し、サマリヤを首府として北部を領して居り、今一つはユダミベニヤミンの支派にしてユダの國を稱し、エルサレムを首府としてその地方を領してゐた。

捕 虜 の 處 待

西部亞細亞諸國に於ける間斷なき戰爭は、實に慘憺たるものであつた。殊に他の二三ヶ國を併呑した戰勝國の主權者は、實に傍若無人に振舞つたものである。即ち彼等は戰敗國民をして再び立つ事能はざらしめんがために、屢々男子は之を殺戮し、又は不具者こなし、婦女子は之を奴隸こなして使役したものである。又時としては戰敗國民の大多數を戰勝國の領土内に移住せしめ、而してその新領土に移住する自國民の使役のために、極めて少數の貧しき奴隸のみを其處に居残らしめた事もあつた。又主權者のある者は自國民すら信頼し得ずして捕虜の中から最も賢明なる數名の青年を選び、王に仕へる官吏として養成するやうなこともあつた。蓋し其は捕虜の身なる彼等は同僚も少なく、王に返逆する者に與するやうな事はないであらうといふ考察からであつた。又大君主の下に屬國となつてゐた少君主は常に警戒せられ、萬一謀反を起すやうなことがあれば嚴罰に處せられたものである。

斯の如き環境の裡に、且つ神武天皇御即位紀元より凡そ百年前に、アツシリヤ王はイスラエルの王を攻めてサマリヤを包圍攻撃した。此の時イスラエル人は頑強に抵抗したためサマリヤの陥落は遅延したが、之に立腹したるアツシリヤ王は、終にサマリヤの陥落した時イスラエル民族の大部分を捕虜としてアツシリヤ全地に離散せしめた。而して彼等の後裔は世界各國に残存して居るけれども、再び故國へは還らなかつたのである。故に彼等はその時からイスラエルの失はれたる十の支派にして知られてゐる。而して少數のイスラエル人は故國に留り、其處に移住した粗暴なア

ツシリヤ人ニ雜婚し、所謂サマリヤ人ニ稱する混血人種が出来たのである。

サマリヤの陥落後凡そ百餘年にしてバビロン王ネブカデネザルはアツシリヤを征服し、その勢に乗じてユダを攻めエルサレムを陥れた。是れ即ちダニエル書第一章に録されたる大事件にして、本書の第一章にはその事件が詳論してある。茲にユダヤより莊嚴にして華麗なる偶像教の都バビロンに捕虜となりたる青年ダニエルが紹介せられてゐるのである。母國に於て眞宗教の純清なる教を受け、健全なる環境の裡に成長した、眞摯にして汚されてゐない青年ダニエルには、萬事が實に珍しかつたに相違ない。

離散したるユダヤ人

サマリヤよりアツシリヤに捕虜となつたイスラエル人は、再び故國に還らなかつた。然るにバビロンに捕虜せられたユダヤ人の子孫は、其から七十年後に希望次第エルサレムに還ることを許された。彼等をしてエルサレムに還る自由を與へた最初の詔勅はベルシヤ王クロスのもので、彼がバビロンを征服したのちに發布したのである。最初は極く少數の者がエルサレムに還つたのみであるが、前後三回に亘つて彼等の歸還を奨励する詔勅が出たために、ユダヤ人の大多數はバビロンを去つてエルサレムに歸還した。然し尙多くのユダヤ人はバビロンの生活に慣れ、長途の旅行をして全滅したエルサレムを再建するが如き困難な働をなすよりも、寧ろバビロンに留るをよしとした者もあつた。而してユダヤ人の大多數がエルサレムに歸還した時に、ダニエルも亦彼等と共に歸還することを希望したのであら

うけれども、彼は既にその時殆ど九十歳の高齢であつた。其より凡そ百年後には、ユダヤ人はベルシヤ帝國でも有力にして裕豊かな民族であつた事は、歴史の證明する處である。即ち彼等のある者はベルシヤ帝國の主要なる官吏となりユダヤ人の一婦人の如きは、ベルシヤ皇帝中最も繁榮を極めたるザークセス王の后となつた。

領土なき民族

エルサレムに歸りたるユダヤ人は神殿を都市を再建した。而してユダヤはこの後も大抵強國の下に屬國として殆ど五百年間存続した。キリストの在世當時まではユダヤ人は神の選民であつたが、彼等は肉に從へば同じくユダヤ人であつたキリストを拒否し、彼を十字架につけて以來、眞の宗教即ち眞のキリスト教こそその恩恵より自ら遮断してしまつた。然しユダヤ人にも雖も個人的には、悔改めを基督を信する事により、他の人々が救はれると同じやうに救はれるのである。其後紀元七十年羅馬の權威に叛逆したる爲、再び都市も神殿も亡はされ、且ユダヤ人は或は殺され、或は離散せしめられた。その時の包圍攻撃によつて生命を失つたものは、實に百萬を超えたといふことである。爾來今日に至るまで都市も神殿も共に再建の運びに至らず、且つユダヤ人は、一定の領土を指して之が我國であるといふことの出来ない哀れなる亡國の民となつてしまつたのである。然るに不思議なことに、ユダヤ人は地球上到處に離散してゐるにも關らず、何の國民にも同化するこゝなく、何處に往つてもその特長を發揮してゐる。例へば約二千年前支那に移住したユダヤ人の如きもさうである。その後裔は支那の數地點に離散してゐるけれども、今尙同國人の特

色を備へてゐる。殊に河南省開封のユダヤ人はその著しき一例である。

ユダヤ人の多數は商人であるが、その中には世界的富豪が澤山ある。此外ユダヤ人の中には政府の要路に就いてゐる者もある。同國人中の富豪名士の名高い者の一部を例舉すれば、歐洲の銀行王ロスチャイルド、長年間英國の宰相たりしデイスラエリー、米國の鋼鐵王の一人であるシフ、世界最大の通信販賣會社の重役ローゼンウォールド、米國より諸外國へ派遣せられたる一流の大使モルガンサウ、日本に於ても數回公演したる洋琴の大家ハイフェズ、相對性原理で名高いアインスタイン、佛蘭西の哲學者ベルグソン、ロシヤのトロツキー諸氏等である。この外ユダヤ人中には非常に多數の富豪があるために、ある人々の間では、「ユダヤ人が財力を以て世界を支配する」のではないか心配してゐる者さへある程である。勿論斯る言は取るに足らない杞憂に過ぎないけれども、如何に彼等が各方面に成功してゐるかを證するものである。

以上を以てユダヤ國と國民の鳥瞰的歴史の梗概を終り、之より更に進んで同國人の一人なるダニエルの著したるダニエル書の詳細なる研究に這入ることにしよう。

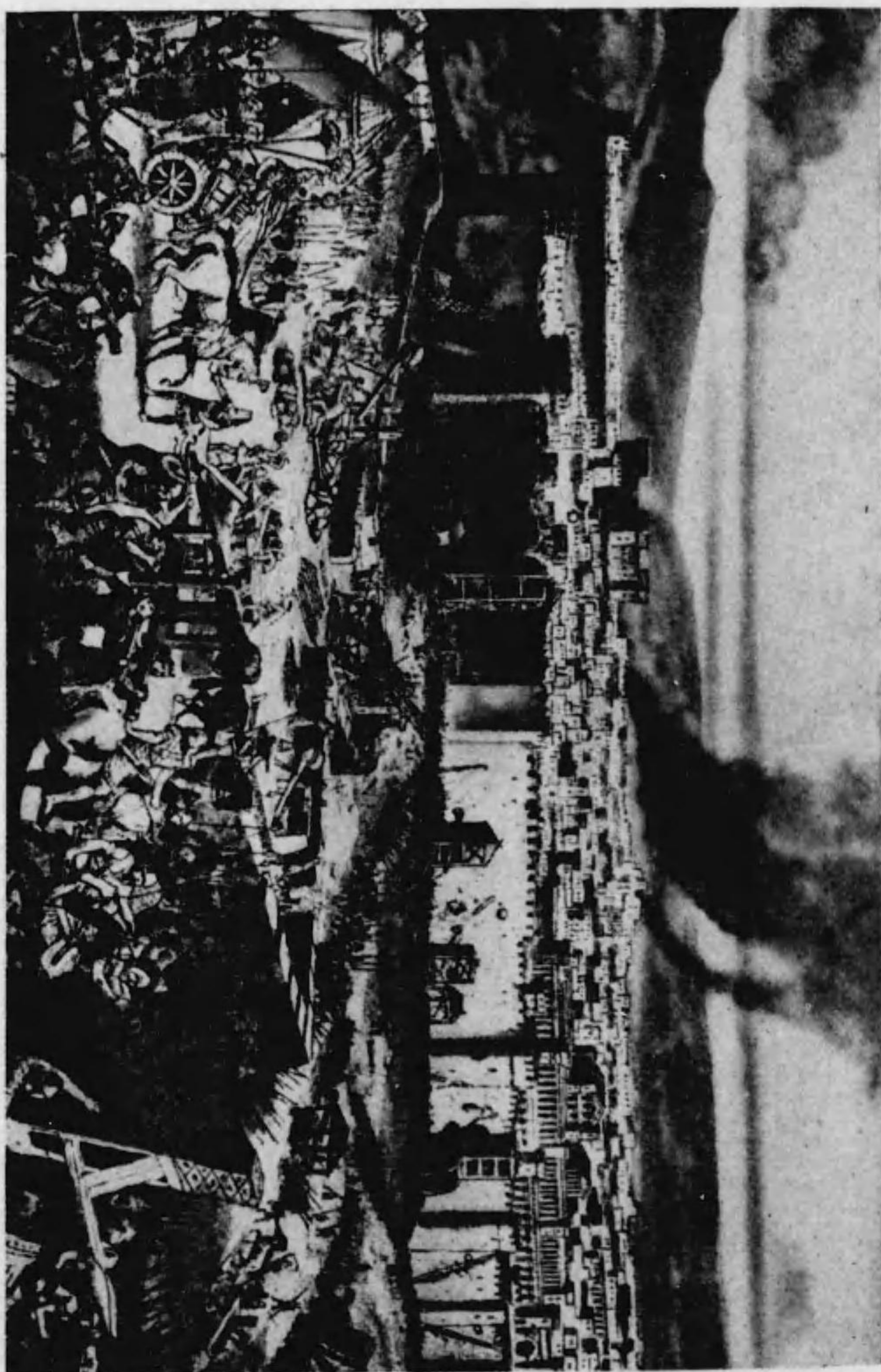
第一章 捕虜となりたる貴公子

エルサレムの滅亡

『ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザル、エルサレムに來りて之を攻圍みしに、主ユダの王エホヤキムと神の家の器具幾何かを彼の手に渡し給ひければ、即ちこれをシナルの地に携へ行きて己の神の家にいたり、その器具を己の神の庫に藏めたり。』

聖書記者の直截的の筆法にもれず、ダニエルは筆をこるや直ちに彼の主題に入つた。抑々このダニエル書は、第一章より豫言的記事の初まる七章までは、第二章の一部分を除いて他の悉くが歴史的事實なるが故に、彼は簡明なる歴史體を以て之を叙述し始めた。即ち彼は世人周知の事實を述べてゐるこの自覺ある者の如く、直ちに種々の事件を陳述してゐるが故に、彼の叙述が正確か否かを吟味する事が出来るのである。

茲に引用したる二節の聖句の中に、ダニエルは如何なる記者も小説的物語に使用しさうもない文體を以て、五つの歴史的事實を述べてゐる。即ち、(一)エホヤキムがユダの王なりし事、(二)ネブカデネザルがバビロンの王なりしこと、(三)後者が前者を攻撃せし事、(四)之はエホヤキムの治世の第三年なりし事、(五)エホヤキムがネブカデネザルの手に渡され、ネブカデネザルは神の家の聖器具の一部分をこりて、シナルの地即ちバビロン(創一〇ノ



ネブカデネザルがエルサレムを攻圍する時

一〇参照)に携へ行き、偶像の殿に屬する寶庫に納めたる事、等である。此の物語の以下の部分も之と同様に歴史的事實を以て充たされてゐる。

此エルサレムの顛覆はエレミヤによつて豫言せられ、間もなく紀元前六五五年に成就した。(耶二五ノ八一―一参照)。エレミヤはこの捕囚をエホヤキムの治世の四年と録し、ダニエルはその三年と録した。故に之は一見矛盾あるもの、如く思はれるが、ネブカデネザルが遠征の途についたのが、エホヤキムの治世の第三年の終末近くであつた事實によつて説明し得るのである。即ちダニエルは、ネブカデネザルが遠征の途についた其時から起算したが、エレミヤはネブカデネザルがエルサレムを征服し終つた時、即ちその翌年の九月から起算したのである。(Pictorial 第一卷九九頁、一〇〇頁参照)。此の征服の時、エホヤキムはバビロンに捕はれ行かれる筈であつたが、ネブカデネザルの寛大なる處置によつて、彼の國はバビロンの屬國となり、彼は支配者としてエルサレムに留る事を許された。是即ちネブカデネザル王によるエルサレムの第一回の陥落である。

この後エルサレムは二回の叛逆を試みたが、その都度同じ王の爲に征服せられた。そして度を重ねる毎に一層手厳しく取扱はれたのであつた。第二回目の叛逆はエホヤキムの子エホヤキンの治世で、紀元前五百九十七年であつたがその時凡ての聖器具は或は奪はれ、或は破壊せられ、剩へ住民の選良は王と共に捕虜せられた。第三回目の叛逆はゼデキヤの治世中で、此時は紀元七十年のローマの大將タイタスによる包圍を除いては、最も恐るべき包圍を蒙つたのである。この包圍の繼續した二ケ年の間、エルサレム市民は極度の飢渴より來るあらゆる恐怖に悩まされ、遂に

守備軍王は市から逃れん企てたが、却つてカルデヤ人の爲に捕虜せられた。而して王子達はゼデキヤ王の面前で虐殺され、王は眼球を剔出されてバビロンに連れ行かれ、數年後其處で逝去した。斯くしてエゼキエルによつて豫言せられた處の、ゼデキヤ王バビロンに携へ行かれ、その地を見ずして死すべしとの言が成就したのである。(結一・二一―二三参照)。此時市に神殿は悉く破壊され、而してエルサレム及びユダヤ全國の住民は、僅の農民を除く全部が紀元前五百八十六年に捕虜してバビロンに連れ行かれた。

抑々エルサレムが、異教の王によつて斯く屢々顛覆せしめられし所以のものは、神の選民の恐るべき不順の罪によるのであつた。又是は實に罪に對し神がその態度を闡明し給うたものであつた。然し其は神がカルデヤ人を特別に愛し給うたからではなく、彼等を利用して己が民を懲しめ給うたのであつた。若しイスラエル人にして神に忠實であり且神の安息日を守りしならば、エルサレムは永遠に存続したであらう。(耶一七ノ二四―二七参照)。然るに彼等は神より離れしにより、神は彼等の罪の結果を負はしめ給うたのである。彼等は始めに偶像に仕へて罪を犯し、神聖なる器具を汚した。故に神は其れを外國の異教寺院に戦利品として携へ行く事を許し給うたのであつた。

「然しイスラエル人が神を離れ、捕虜となつた事により、神はバビロンの人々に、神が最上權を把持し給ふ證據のその要求の神聖なる事及び服従の結果の確實なる事を示し給うた。(The Story of Prophets and Kings 四八〇頁) 斯の如く、恐るべき第二第三のエルサレムの包圍による大艱難の期間中、ダニエル彼の友はバビロンの王宮に養はれ且つ教育せられてゐた。故に假令彼等は異國に俘虜の身となつてゐたは、或る點に於て其は確に故國に居る

よりも、遙かに幸福な境遇にあつたのである。

選拔せられたる四貴公子

「茲に王寺人の長アシベナズに命じて、イスラエルの子孫の中より、王の血統の者貴族たる者幾何を召寄せしむ。即ち身に疵なく容貌美しくして、一切の智慧の道に穎く、知識ありて思慮深く、王の宮に侍るに足る能幹ある少き者を召寄せしめ、これにカルデヤ人の文學言語を學ばせん。是をもて王は命を下して、日々に王の用ゐる饌に王の飲む酒を彼等に與へしめ、三年の間かく彼等を養ひ育てしめん。是の後に彼等をして王の前に立つ事を得せしめんとなり。」

以上の數節は、豫言者イザヤが百年以上も前に、ヒゼキヤ王に警告した處の來らんとする刑罰の成就を示す記録である。即ちヒゼキヤ王が自慢らしくバビロン王の使者に彼の宮にユダヤの寶物及び聖物なごを示した時に、之等の全の善き物は戦利品としてバビロンに携へ行かれ、一物も残らざる事、並に彼の子孫即ち彼の後裔ですら捕へられてバビロン王宮に官吏たるべしとイザヤは豫言したのであつた。(王下二〇ノ一四―一八参照)

茲に是等の捕虜に用ゐられたる「少き者」は青年を意味するのである。而して我等は聖書の記録により、是等の「少き者」は既に一切の智慧の道に熟練し、知識に富み、科學を解し、王の宮に侍るに足る能力を有してゐた事を知ること出来るのである。換言すれば、彼等は既に相當の教育をうけ、肉體も精神も共に充分發達して居つたから、其

道の人は、彼等の能力に就て極めて正確なる評價をなす事が出来たのである。因にこの時彼等は凡そ十八歳乃至二十歳の青年であつたと思はれるのである。

我等は是等ユダヤ人の捕虜が受けた待遇により、隆盛を極めたるネブカデネザル王の賢明なる政策に寛大なる襟度

の一端を窺知し得るのであるが、左はその一例である。
1、ネ王は後世の諸皇帝がなしたる如く、低級にして野卑なる慾望を満足せしめず、寧ろ國政に與るべき有爲の才幹を養成する爲に青年を拔擢した。

2、彼は自分が日用用ふる饌、酒を彼等にも與へた。即ち彼は或人の如く捕虜には粗食で充分だとは云はず、自身用ふる處の王者的食物を與へた。

三年の間、捕虜の青年達はバビロン帝國の與へ得る凡の恩典を享受する事が出来た。彼等は俘虜の身はいへ王族の青年なりし爲、慈悲深きカルデヤの王より身分相當の待遇を受けたのである。

是等の青年が適當なる準備の後、バビロンの國政に參與すべく拔擢された所以を考ふるに、この名譽に責任ある地位を占むるに必要な精神的肉體的の資格を具備する點に於て、カルデヤの青年はイスラエルの青年と競走し得なかつたといふより外、他に理由はあり得ないのである。

姓名の變更

「是等の中にユダの人ダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤありしが、寺人の長彼等に名をあたへて、ダニエルをベルテシヤザルミ名づけ、ハナニヤをシヤデラクミ名づけ、ミシヤエルをメシヤクミ名づけ、アザリヤをアベデネゴミ名づく。」

此の改名は恐らく言葉の意義よりしてなされたものであらう。即ちダニエルはヘブル語にて「神はわが審判なり」、ハナニヤは「エホバの賜物」、ミシヤエルは「神の如き者は誰ぞや」、アザリヤは「エホバはわが助け」とそれぞれ意味を有してゐるのである。是等の名は各々眞の神の禮拜に關する意味を有してゐるが、それが異教の神々とカルデヤ人の禮拜に關する意味をもつ名に變更せられたのである。即ちダニエルに與へられた名ベルテシヤザルは「ベル神」、シヤデラクは「アク神」、メシヤクは「女神シヤカ」、アベデネゴは「ネボ神」といふ意味であつた。

ダニエルの菜食主義

「然るにダニエルは、王の用ふる饌、王の飲む酒をもて己の身を汚すまじと心に思ひだめれば、己の身を汚さざらしめんことを寺人の長に求む。以前よりエホバ、ダニエルをして寺人の長の慈悲に寵愛を蒙らしめたまふ。是において寺人の長ダニエルに言ひけるは、吾主なる王すてに命をくだして、汝等の食物に汝等の飲物とを願たしめたまへば、我かれを畏る。恐くは彼なんちの面のその同輩の少者等と異にして、憂色あるを見ん。然る時は、汝等のために我首王の前に危からん。寺人の長はメルザル官をして、ダニエル、ハナニヤ、ミ

シヤエル及びアザリヤを監督らせ置きたれば、ダニエル之に言ひけるは、請ふ十日の間、僕等を験したまへ。即ち我らには菜蔬を與へて食せ、水を與へて飲せよ。而して我らの面ミ王の饌を食ふ少者等の面ミを較べ見汝の視るころにしたがひて僕等を待ひたまへ。是において彼この事を聴きいれ、十日のあひだ彼等を験しけるが、十日の後にいたりて見るに、王の饌を食へる諸の少者よりも彼らの面は美しく、また肥え、臍きてありければ、メルザル官すなはち彼らの分なる饌ミ、彼らの飲むべき酒ミを撤きさりて、菜蔬をこれに與へたり。

ネブカデネザルはこの記録に驚く程頑迷を脱した王として現はれてゐる。即ち彼は貴族の捕虜に對して、彼等の宗教を強ひて變更せしめやうとはしなかつたらしい。而して彼等が何か宗教を信じてさへ居れば、其が王自身の信する宗教と同じであるか否かは彼の關する處ではなかつた。彼等の名が偶像禮拜に關する意味の名に改められたもの、其は之等の名を與へられたる人々が主義信仰を變更した事を示すのではなく、寧ろカルデヤ人がユダヤ名の使用を避けたに過ぎないやうに思はれる。

平素より肉食主義の實行者であつたダニエルは、王の饌及び酒を以て自らを汚すまいと決心した。ダニエルがこの擧に出でたのは、單に斯る食物が身體組織に及ぼす影響いふよりも、他に理由があつたのである。即ち異教國の皇帝及び皇族は、往々にして自國の宗教の監督なるが故に、王等の食物は先づ偶像に獻けられ、且つその酒は偶像の前に神酒として用ひられたものであつたからである。其のみならず、彼等の用ふる肉の或ものは、ユダヤの法律にて

不潔なものと定められたものであつた。故にダニエルは上記の二理由により、彼の信仰を挫かずしては之等の食物を攝取し得なかつたのである。されば彼が王の饌を食せざりしは他意ありしが故ではなく、其によつて自らを汚すやうな事があつてはならぬといふ良心の懸念からであつた。そこで彼は恭しくその理由を掛の役人に告げたのであつた。寺人の長は王自ら彼等の食物を選定し給うたのであるから、ダニエルのこの要求に應ずるのを恐れた。何故ならば王がこの青年達に個人的興味を有せられた事を示すものであつた。其のみならず、王は臣下に青年達をゆだね、厚遇すべしと命じて放任したのではなく、王自ら彼等の食物や飲料まで選定して萬遺漏なからしめたからであつた。實際王は之等の食物が、彼等のために最善のものであると信じて選定したのである。又之等の理由により、寺人の長は、青年達が王の選定した食物を廢するならば、其を常用した人々よりも肉は瘦せ、顔色は悪くなり、従つてその爲に彼等を冷遇した事があらはれて、遂には己が首を失ふに至るとまで考へたのであつた。然し一方には、彼等の肉體を健全に維持する事さへ出来れば、必ずしも王の命令に従はなくとも、他の方法をとつて差支へないと考へてゐたのである。要するに王の希望は、方法の如何を問はず、彼等に最高の智的及び體格的の發達を遂げさせんとしたるのである。實に之は頑迷にして壓制的な一般の權力者の態度とは雲泥の相違である。我等はネブカデネザル王の性格の中に我等の最高の嘆稱に價する多くの美點を見出すのである。

ダニエルは自分と三人の友の爲に菜蔬と水とを求めた。かくして十日間を経過するに彼等の營養状態は衰へざるのみか、却つて良好なりしを以て、彼等は王に仕へる爲に教育をうける全期間に亘り、その食物を攝取する事を許され

た。然し此の十日間に起つた彼等の體量の増加と血色の優越とは、全然その食物の自然的結果に歸することは出来ない。如何となれば、短時日にかゝる著しい効果を現はすとはさうしても信する事が出来ないからである。故にこの結果は、神が彼等のとつた方針を是認し給ひし徴として、特別に彼等を祝福し、若し彼等が其を繼續するならば、時の経過と共に自然の結果として現はれると同じ結果を、僅の間に現はし給うたものであると結論するのが最も至當であらう。

卒業試験とその結果

「この四人の少者には神知識を得させ、諸の文學と智慧に類からしめたまへり。ダニエルはまた能く各種の異象と夢兆を曉る。王かねて命を下し、少者等を召しいる、迄に經べき日を定めおきしが、その日數も過ぎたるに於て、寺人の長彼等を引きてネブカデネザルの前にいたりければ、王彼等と談り。彼等すべての中には、ダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤに比ぶ者あらざりければ、この四人は王の前に侍れり。王彼等に諸のこゝを詢ひたづね見るに、彼等は智慧の學においてその全國の博士と法術士に愈るこゝ十倍なり。ダニエルはクロス王の元年までありき。」

この記録によるダニエルに對してのみ異象と夢兆を曉る力が與へられた様に思はれる。然しダニエルが此點に特別の恩典を受けたからといつて、他の三人が神の前に受容られる事に於て、ダニエルよりも劣つてゐたといふ證

據にはならない。即ち彼等が燃ゆる火爐の中に於て（三章にて詳述）安全に守られた事は、彼等も均しく特別な神の恩恵に浴してゐたこゝを證するものである。恐らくダニエルはこの特異なる使命のために、彼に特別に適した或る天賦の性格を具有してゐたのであらう。王は曾てこの青年達に現はしたと同じ個人的興味を尙も持續してゐた。それ故に王は三年の終りに當り彼等を招じて面接した。即ち王は如何に彼等が待遇せられ、且如何に上達したかを親しく見たいと思つたからであつた。又この會見は、王が如何にカルデアの凡の藝術や科學に精通してゐたかを示してゐる。若し然らば王は其等のこゝに就て他人を試験する事は出来なかつたであらう。が其は兎に角として、試験の結果は、宗教や國籍に關せず、どの方面から見ても、王は彼等がバビロンの何人よりも十倍も優れてゐる事を認めたのである。而してダニエルはクロス王の元年まで續いた附記されてあるが、之はその年に彼が死んだといふ意味ではない。何故なればダニエルは其後も尙その職に在つて生存してゐたからである。然しこの年はユダヤの捕虜が解放せられた年であるから、記者はこの年に特別の注意を促したに過ぎないのである。

本章及び本章以後に錄されてゐるヘブルの四青年捕虜の驚くべき經驗は、「如何なる事業でも之に成功するのは決して幸運でもなく、偶然でもなく、又僥倖でもない。其は凡て神の攝理のみに、信仰と善行及び美德と忍耐の賜である」こゝを示してゐる。（The Story of Prophets and Kings 四八六頁）彼等のこの成功は、彼等が幼少の頃ユダヤの家庭に於てその基礎を築かれたのであつた。大バビロン帝國のあらゆる奢侈と偶像崇拜の烈しい誘惑に對して、彼等を盤石の如く堅く立たしめたものは、敬神の念篤かり、兩親の忠實なる薫陶の賜物である。

第二章 豫言と四大帝國の興亡

ネブカデネザル王の夢

「ネブカデネザルの治世の二年にネブカデネザル夢を見、其がために心に思ひなやみて、また睡るこゝ能はざりき。」
 ダニエルはネブカデネザルの治世の第一年に捕虜としてバビロンに連れて行かれた。そして彼は三年の間教育を受けたのであるから、無論その期間内にバビロンの智者の中に數へられる筈もなく、また公務に携はる筈もなかつた。然るにネブカデネザルの二年に本章に記録されてゐる事件が起つたのである。

茲において、然らばさうしてダニエルは王の治世の二年に、夢を解き明すため召し出されたのであらうかといふ疑問が生ずるが、是はネブカデネザルが彼の父ナボポラサー二年間共同統治をしてゐた事實によつて説明し得るのである。即ちユダヤ人はネブカデネザルが父王と共同統治を初めた時から起算し、カルデヤ人は、ナボポラサーの死後、彼が單獨で統治し初めた時から計算したのである。故に茲に記された年は、カルデヤ人の計算によれば王の治世の二年、ユダヤ人の計算によれば第四年であつた。要するに其は、ダニエルがカルデヤ帝國の國務に參與する準備を完成した翌年、神が靈理の下に彼を急に不思議な手段で全國に知らしめ給うたのであつた。

智者學者の召集

「是をもて王は命を下し、王のためにその夢を解せんして、博士と法術士と魔術士とカルデヤ人とを召しめられた。彼ら來りて王の前に立つ。」

邦譯の「博士」は英譯には「Magicians」、「魔術士」となつてゐる。即ち讀んで字の如く魔術を行ふ人であつて、凡ての迷信的儀式や占者の禮式を行ひ、誕生の時期や星の位置なきによつて人の運勢や未來の事柄を卜する者であつた。次に「法術士」は英譯には「Astrologers」となつてゐるが、之は諸星を研究する事によつて將來の出來事を先言するに稱する人々であつた。この星占の迷信は古代の東洋諸國民には廣く行はれたものである。又「魔術士」は「Sorcerers」と英譯されてゐる。之は死人と交通するに僞つた人々であつたが、聖書にはいつもこの意味に於て用られてゐるやうである。近世の降神術即ち我國に於ける巫子或は市子の如き不可思議なる交靈術は、單に古代異教の魔術の復活に過ぎないのである。茲に記されたカルデヤ人は魔術士及び星占者と同様な哲學者の一派であつて、彼等は神癒及び占筮を研究してゐた人々であつた。之等の門派又は職業はバビロンに多數在つたが、畢竟、銘々によつて目指された目的は同一のものであつた。即ち其は秘密を解明し、將來の出來事を先言する事であつて、彼等の間の主なる相違は其目的を達成する爲に選んだ方法にあつた。故に王は憂慮の餘り、秘密や將來の出來事を説明すべき職分にある彼等を全部召し寄せたのであつた。

玉の要求と學者の回答

「王即ち彼等にむかひ、われ夢を見、その夢の義を知らん心に思ひなやむ言ひければ、カルデヤ人等スリア語をもて王に申しけるは、願くは王長壽かれ、請ふ、僕等にその夢を語り給へ。我等その解明を進めたてまつらん。」

この古代の魔術士や星占者が如何なる技能を有してゐたにせよ、彼等は確に如才ない先言をするに必要な基礎となるべき充分な材料をひき出す術に達してゐた。のみならず彼等はその答を極めて曖昧なる様式に案出し、其事がさちらになつても同様に當嵌るやう答へる術に達してゐたらしい。故にこの場合に於ても彼等の狡猾な本性に違はず王に向つてその夢を告げ給へし要求した。即ち彼等にして、之に關する充分の材料を得さへすれば、容易に一致してその名聲を失墜しない處の解釋をなし得たに相違ない。そして此時彼等はスリア語で王に話しかけたが、之はその當時の教養あるカルデヤ人間に用ゐられた言葉であつた。因に本章の五節から七章の終までの記録はみなスリア語である。

報賞と刑罰

「王答へてカルデヤ人に言ひけるは、我すでに命を出せり。汝等もし其夢此が解明とを我に示さるに於ては

汝等の身は切裂れ、汝等の家は則にせられん。又汝等もし其夢此が解明を示さば、贖物、賞資、大なる尊榮を我より獲ん。然ば其夢之が解明を我に示せ。彼等また答へて言ひけるは、願くは、王僕等に其夢を語り給へ。然ば我等その解明を奏すべし。王答へて言ひけるは、我あきらかに知る、汝等は我命の下りしを見るが故に時を延さんことを望むなり。汝等もし其夢を我に示さば、汝等を處置するの法は只一つのみ、汝等は相語らひて虚言、妄誕なる詞を我前にのべて時の變るを待たんとするなり。汝等今先その夢を示せ、然すれば汝等がその解明をも我にしめし得る事を我知らん。カルデヤ人等答へて王の前に申しけるは、世の中には王の其事を示し得る人一箇もなし。是をもて王たる者、主たる者、君たる者等の中に、斯る事を博士または法術士またはカルデヤ人に問ひたづねし者絶えて非ざるなり。王の問ひ給ふその事は甚だ難し、肉身なる者共に居らざる神々を除きては、王の前にこれを示す事を得る者なかるべし。斯りしかば王怒を發し、大に憤り、バビロンの智者をこきよく殺せし命じたり。即ち此命下りければ、智者等は殺されんせり。又ダニエルもその同僚をも殺さん求めたり。

是等の數節は、智者達王との間になされた大論戰の記録である。即ち前者は己が常々なし得る言言してゐる事をなせし命ぜられたので逃れ途を探し、後者は彼等の職責上直ちに命令に應ずる事が當然であるをなし、否でも應でも夢の解明をなさしめんを試みたのである。茲において或者は、ネブカデネザルは無情で没分曉な暴君であるを評するけれども、しかし一方これ等の魔術士は、超自然的媒介者の助によつて秘密を啓示し、全然人間の洞察や豫想外

の神祕を告知し得るに公言してゐたのである。故に若し彼等の公言するにこの「靈界との交通」にして權威あるものであつたなら、彼等は王にその夢を知らしめ得た筈である。若し彼等の公言する如く夢を示される事により、信賴すべき解明を奏上し得るにすれば、假令王がその夢を忘れても彼等自身でそれを案出し得る筈である。それ故にネブカデネザルが彼等に夢を知らしめよと要求したのは決して無理ではなかつた。而して此時彼等が、王のその事は肉身なるもの之儘に居らざる神々を除きては、王の前に之を示す事を得る者なかるべし（一一節）に言明したのは、彼等が是等の神々何等の交渉をも有しない事、並びに人間の智慧を判断しが啓示し得る範圍外の何事をも知り得ないといふ事の承認であつた。この故にネブカデネザルは、自身に全國民が彼等の欺瞞の民にかゝつてゐたことを悟り、大いに怒つたのであつた。而して王は、「時の變る」まで、即ち己の心より此事が消去り、彼等が二枚舌を使つた事に對する怒りも歇み、その夢が知られやうに知られまいに、解明されやうに解明されまいに、自然にその事が忘れられるまで時を經過せしめんとしてゐる彼等の隠險なる精神を責めた。（九節参照）

原より我等は王のさらんした嚴罰、即ち彼等を死刑に處し、且その家を破壊せんとした事が、假令當時の習慣であつたに云へ賛成出来ないけれども、王が彼等欺瞞者に對して加へたる大膽にして果斷なる譴責の態度には、心から共鳴せざるを得ない。斯して王の怒を蒙つた者は随分大勢あつたが、彼等はみな勢力ある門閥であつた許りでなく學識あり教養ある階級であつた。然るに王は其等の凡ての勢力を向ふにまはして、偽の宗教を戦ふことを躊躇しなかつた。もしその宗教が欺瞞であるならば、如何に多數の信徒が有つても、或ひはその宗教に如何に高位高官の者が屬

してゐても、或ひは如何に多くの者を犠牲にしても、其を撲滅してしまはねばならなかつたのである。何故なら、王は不正と欺瞞には決して與する事が出来なかつたからである。

ダニエル天の神に祈る

「茲に王の侍衛の長アリオク、バビロンの智者等を殺さんとて出で来りければ、ダニエル遠慮し智慧をもて之に應答せり。すなはち王の高官アリオクに對へて言ひけるは、王にきて斯く速かにこの命を下したまひしや。アリオクその事をダニエルに告知せられたれば、ダニエルいりて王に乞求めて言ふ、暫くの時日を賜へ、然らばその解明を王に奏せん。斯てダニエルその家に歸り、その同僚ハナニヤ、ミシヤエル及びアザリヤにこの事を告知らせ、共にこの秘密につきて天の神の憐憫を乞ひ、ダニエルとその同僚等をして、その他のバビロンの智者に比し減じざらしめんことを求めたりしが、」

この物語の中に、我等は各方面に著しく働きて、ある神の攝理を見るのである。

一、王の夢が非常な不安を與へる程彼の心に強い印象を残した事と、王が其夢を想ひ出す事の出来なかつたのは攝理であつた。何故なら其は、魔術士や異教教師が夢の解明を求められた時、彼等が平常なし得ると公言してゐた事となし得なかつた事により、彼等の奉ずる宗教が偽宗教である事を曝露せしめたからである。

二、王から魔術士や星占者より十倍も優れてゐると云はれたダニエルと其同僚が、此事に關してもつて早く諸問

せられなかつた事、否彼等が全然諮問せられなかつた事は實に不思議である。然し其處に攝理があつたのである。恰も夢が王から取去られた如く、何故か王はダニエルに夢の解明を求める事を想ひ出せなかつたのである。若し王がダニエルを最初に召寄せ、彼によつて直ちにその夢を知らしめられたならば、魔術士等はあの試をうけずに済んだであらう。然し神は最初にカルデヤの偶像教徒にその機會を與へ給うたのであつた。そして先づ彼等にその解明を試みさせ、假令彼等が死刑の宣告をうけても如何にもするこゝの出來ぬのを告白せしめ給うた。斯して神は、最後に己が僕なる捕虜達及び聖名の榮のために聖手をくだし給ふ時に、彼等が神の聖業を瞭然と認め得るやう備へたまうたのであつた。

三、ダニエルが初めて此事件を知つたのは、死刑執行官が彼を捕縛せんがために來た時の様である。而して是は彼自身の生死に關する重大問題なりし故に、ダニエルは神が自分達を救ひ給ふまで眞心こめて熱心に神に祈り求めるやう、攝理の中に導かれたのであつた。そこでダニエルは此事件について考慮する時を與へ給へし王に求めて之を容れられた。蓋しこの特權は、虚偽の答をなすために「時を延さん」として王から譴責された魔術士達には、其が何人であらうと許容されぬものであつたらう。此時ダニエルは直に三人の同僚の處に往き、心を合せて祈り、この秘密に關して天の神の憐憫を乞うたのであつた。彼は單獨に祈るこゝも出來たらう。そして無論それに應へられたであらう。然しその當時も今と同じく神の民が心を合せて祈る時に偉大なる力が與へられたのである。即ちその求むる處をなすてふ聖約束は、心を合せて祈る二三人の者になされてゐるのである。(太一八ノ一九、二〇参照)

ダニエル夢の啓示を受く

「ダニエルつひに夜の異象の中にこの秘密を示されければ、ダニエル天の神を稱讚ふ。即ちダニエルこたへて言ひけるは、永遠より永遠にいたるまでこの神の御名は讚まつべきなり。智慧と權能はこれが有なればなり。彼は時と期とを變じ、王を廢し、王を立て、智者に智慧を與へ、賢者に知識を賜ふ。彼は深妙秘密の事を顯はし、幽暗にあるところの者を知り給ふ。また光明彼のうちにあり。わが先祖達の神よ、汝は我に智慧と權能を賜ひ、今我等が汝に乞求めたるこゝろの事を我にしめし給へば、われ感謝して汝を稱讚ふ。即ち汝は王のこの事を我等に示したまへり。」

應答の與へられたのは、ダニエルとその同僚が未だ祈をしてゐる間であつたか否かは我等に示されてゐない。もし祈禱最中にその答が與へられたとするならば、彼等が應驗の與へられるまで祈り續けてゐた事を示すものである。何故なれば、神が彼等のためにその事を示し給うたのは夜の異象を通してであつたから、彼等は祈禱を夜更まで續けて、應へられるまでやめなかつたと推量する事が出来るからである。然し若し彼等が祈願を終へたのちに應へられたのであるならば、祈禱は直に應へられない事が往々にしてあるといふ事を證するものである。そして或者はダニエルがネブカデネザルの見たと同じ夢をみる事によつて其を示されたのであるといふ。然しマタイ・ヘンリー氏は、「彼が醒めて熱誠に絶間なく祈禱してゐた時に、夢とその解明が彼の満足するまで充分に一天使の奉仕によつて傳

へられたものであるとする方が事實らしい」と言つてゐる。

そしてダニエルが直ちに神の彼等を祝し給ひしを感謝した事は、彼の祈願が記録されてゐないのに、彼の感謝の詞が明瞭に記されてゐる事によつても判るのである。神は彼が我等のためになし給うた事に對し、我等が神を稱讃ふること及び祈禱をもつて神の助の必要なことを承認する事によつて崇められ給ふのである。さればこの點についても、ダニエルの歩みし途を我等の模範としなければならぬ。神の聖手より來る恩恵の一つでも、其に對する感謝を忘れてはならぬ。十人の癩病人は悉く潔められた。然るにキリストは、「九人は何處に在るか」と遺徳に思つて問ひ給うたではないか。(路一七ノ一七参照)

ダニエルは彼に示された事に絶対の確信を有してゐた。故に彼は己に示されたのが實際王の見た夢であつたか否かを取調べる爲に王の處へゆかないで、直ちに祈禱の應へられたことに對し神を稱讃へた。そしてダニエルは、假令その事が彼に啓示せられたとはいへ、決して彼は自分一人の祈によつてこの事が啓示されたかのやうにその名譽を獨占しやうとはしなかつた。即ち彼は自分の祈ばかりでなく、同じく彼等の祈の應驗であることを承認し、これを三人の同僚に傳へた。そして彼は、「我等が汝に乞ふ所のところの事」にして、汝は其を「我等に示し給へり」と神に感謝した。

ダニエルの参内

「是に於てダニエルは、王がバビロンの智者等を殺すことを命じおけるアリオクの許にいたり、即ちいりてこれに言ひけるは、バビロンの智者等を殺すなかれ。我を王の前にひきいたれよ、我その解明を王に奏上ぐべしと。」

ダニエルの最初の歎願はバビロンの智者學者等のためにして、王の秘密は啓示せられたから彼等を滅す勿れといふ事であつた。この啓示の與へられたのは言ふ迄もなく、彼等又はその信する占卜の功績によつたのでないから、彼等は之まで通り譴責せらるべき筈であつた。けれどもダニエルは彼等をも自分に示された恩恵に與らしめやうとて、彼等を滅すことだけは止めて頂きたいと王に歎願したのであつた。かくしてバビロンの智者學者等は、彼等の中に神の僕ダニエルがゐるた爲にその生命を助けられたが、之は何れの時代でもさうである。例へばパウロミシラスの爲に彼等と共に居た凡ての囚人は解放された。(徒一六ノ二六参照)。又パウロの爲に彼と共に航海してゐた凡ての人々は救はれた。(徒二七ノ二四参照)。斯く悪人も義人と共に居ることによつて災禍から救はれるのである。故に悪人は義人に對して負ふ所多き事を記憶しなければならぬ。今世世界の保たれてゐるのは何の爲であるか? 誰の爲に世界は今尙存在してゐるのであらうか? それは今尙残存する少數の義人の爲である。義人が除かれた後、悪人は何時までも彼等のなすが儘に放任せられるのではない。ノアが方舟に入つた後、洪水前の人々がその存在を許されなかつた如く、或はロトがかの汚れたる市を出た後、ソドム人が許されなかつた如く、彼等は忽ち滅ぼされるであらう。若し唯十人の義人がソドムの中に居たならば、彼等の爲に多數の悪人は滅ぼされなかつた筈である。抑々悪人が其生命を凡ての祝福を樂しむ得るのは、義人の存在する爲であるにも拘らず、屢々前者は後者を輕蔑、嘲弄、且つ迫害する

のは實に遺憾の事である。

ダニエルの上奏

「アリオクすなはちダニエルを引きて急ぎ王の前にいたり、王にまうしけるは、我ユダの俘囚人の中に一箇の人を得たり、是者その解明を王に申しあげん。王こたへてベルテシヤザルミ名くるダニエルに言ひけるは、汝は我が見たる夢こそその解明を我に知らしめることを得るや。ダニエルすなはち應へて王の前に言ひけるは、王の間ひ給ふ秘密は、智者、法術士、博士、卜筮師など之を王に奏上ることを得ず。然るに一の神ありて秘密をあらはしたまふ。彼後の日に起らんころの事の如何なるかをネブカデネザル王に知らせたまふなり、汝の夢が汝が牀にありて想見たまひし汝の腦中の異象は是なり。」

ダニエルが王の前に入り來つた時に、王は、「汝はかの夢を解き明し得るや？」と疑をさして挨拶した。

王は以前からダニエルを知つてゐたにもか、はらず、老練にして平素尊敬してゐた魔術士や先言者さへ全然失敗した事件を、若輩にして無經驗なる彼がよく解き得るであらうか彼の力量を危んだのである。ダニエルは明かに、この秘密は、智者、學者、星占者、先言者及び魔術士等の決して解く事の出来ないものである事を宣言した。同時にそれは彼等の能力の企て及ばざる處であつたが故に、王は彼等に對して怒るべきでもなく、又無能なる迷信を信賴すべきものでもないと思つた。然る後彼は、天に在して統御し給ふ唯一人の啓示者なる眞の神を紹介した。而してダニエ

ルは、此神がネブカデネザル王に、後の日に起らんころの事の如何なるべきかを知らしめ給ふのであると曰つた。

「王よ、汝牀にいたりし時將來の事の如何を想ひまはしたまひしが、秘密を顯す者將來の事の如何を汝にしめしたまへり。我この示現を蒙れるは、凡の生る者にまさりて我に智慧あるに由るにあらず、唯その解明を王に知らしむる事ありて、王のつひにその心に想ひたまひし事を知るにいたりたまはんがためなり。」

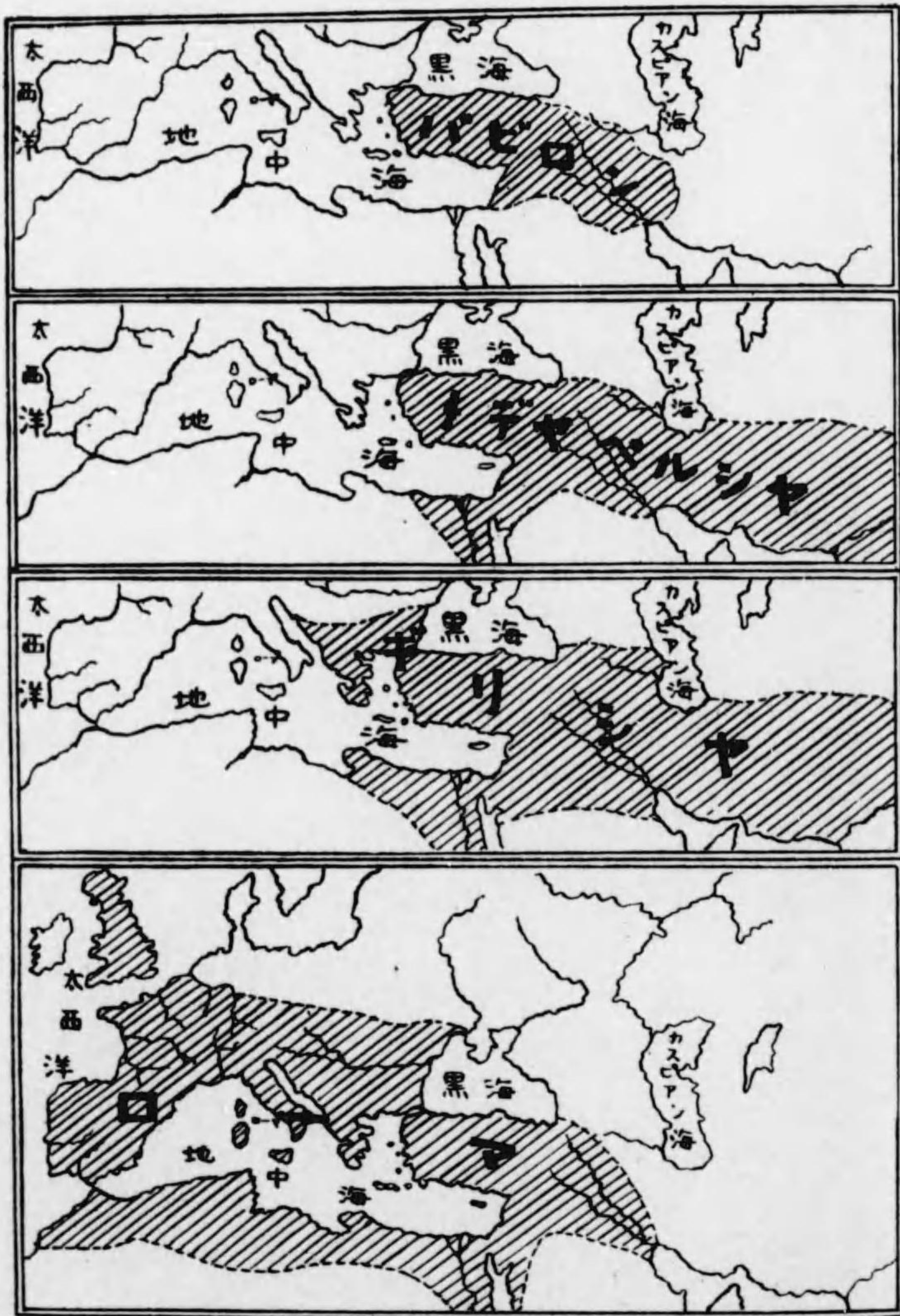
此處にネブカデネザルの性格中稱讚に價する特性が現はれてゐる。即ち彼は將來を顧みる事をせず痴行に放蕩を以て現在を充たすやうな主權者とは異なり、來るべき時代に如何なる事件が起るかを知らんとして、未來を想ひ廻らしたのである。而して其目的は、疑もなく現在を如何に改善すべきかを知らんが爲であつた。夫れ故に神は彼にこの夢を與へ給うたのである。即ち之は王に對する神の恩恵の印と見るべきである。何故ならばこの夢を通して示された眞理は、神の榮と、その當時及び各時代を通じて神の民の福利のためなる多くの啓示を含んで居つたからである。然し神は己が民を度外視して事をなし給はなかつた。故に神は王に夢を與へ給うたは云へ、その解明は神の承認し給へる僕の一人を通して之を與へ給うた。實に神はバビロンに少數の僕を有して居給うた。而して神は彼等の爲に働き給ひつゝあつたが、彼等は神の目には地の最大なる王や主權者よりも遙に尊かつたのである。彼等にして若しバビロンに居らざりしならば、王は決して自分の夢の解明どころか、恐らく夢すら與へられなかつたであらう。その如く凡の恩恵はその源に溯れば、それが誰に賦與せられたものであつても、神が其民に與へ給ふ眷慮に基くものである事を發見し得るのである。この事件に關する神の御業は實に宏大である。即ち王の夢をダニエルに示現する一

つの御業に由つて、神は次の諸目的を達成し給うた。(一)神は王にその望む所を知らしめ給うた。(二)神は御自身に信頼した僕等を救ひ給うた。(三)神は驚く可き方法を以て、カルデア國民の前に眞の神の智識を與へ給うた。(四)神は魔術士及び先言者の欺瞞を發き、之を辱しめ給うた。(五)而して神は御自身の御名を高め、且その僕等を彼等の目の前に上げ給うた。

王の見たる夢

「王よ、汝は一箇の巨なる像の汝の前に立てるを見たまへり。其像は大きくして、その光輝は常ならず、その形は畏ろしくあり、其像は頭は純金、胸と兩腕は銀、腹と腿は銅、脛は鐵、脚は一分は鐵、一分は泥土なり。汝見て居たまひしに、遂に一箇の石人手によらずして撃れて出て、その像の鐵と泥土との脚を撃てこれを碎けり。斯りしかば、その鐵と、泥土と、銅と、銀と、金とは、皆もに碎けて夏の禾場の糠のごとくに成り、風に吹き拂はれて止まるころなかりき。而してその像を撃たる石は大なる山となりて全地に充り。」

カルデアの宗教を奉じてゐたネブカデネザルは偶像崇拜者であつた。故に像は直ちに彼の注意を惹き、且尊敬の念を起さしめたのであつた。此外に神が斯く像を用ひ給うたについては、後に述ぶるが如くこの像が地上の國々を代表してゐるのであるから、王にまつては實に興味深いものであるといふ事を知つてゐる給うたからでもあつた。蓋し眞の神の智識に乏しかつた王は、如何なる方法にて地上の國々こそその富や榮を示されても、眞理の光に照して評價する準



國帝大四るたれはらあに上史界世

備が出来てなかつたから、神は偶像崇拜者なる王の尊敬し敬慕しさうな巨像を以て國々の將を指示し給うたのである。然し眞の神の禮拜者なるダニエルは、眞理の光によつてその心眼が開かれてゐた故に、彼の見解は王の其の非常に相違があつた。即ちダニエルは、神の恩恵を認むるをうけてゐない所謂榮光と偉大を眞理の光に照して看破し得たのである。故に神はダニエルには、この後（七章参照）之等の同じ地の諸國を残酷極まる掠奪的の野獸を以て指示給うてゐる。

然しながらこの表示は、ネブカデネザルの心に大にして必要な眞理を傳へる爲に實に相應しいものであつた。神はその民の爲に各時代に起るべき諸事件を詳細に描寫し給うたばかりでなく、ネブカデネザルに地的豪奢と榮光が全然無價値で空虚なる事を示し給うたのである。而して此事を印象深くする爲に一つの像——それは最も價貴き金屬を以て始まり、徐々に低下して遂に最も劣等な鐵と粘土との混合物となり、全體が微塵に碎かれ、恰も空な粉殻の如く遂に吹き飛ばされて跡かたもなくなり、而して後永續する價値ある天的のものがその場所を占めるに云ふ——に由る以上よい方法があるであらうか。かく神は人の子に、地上の國々は過ぎ去るべきものであり、また地的榮光と偉大も恰も婉麗やかな泡沫の如く消え去るものである事、並に神の國は地上の國々の後に建設せられ、その國は終る事なく、又其處に住む者は永遠に平和に充ちた翼の蔭に息ふべき事等を示し給うた。

間接に王に對つて、此場合は等の凡は天の神に捧ぐべきものなることを知らしめた。即ち王に國を與へて凡ての者を統治なましめ給ひつゝ、ある者は天の神である事を知らしめた。是は、王が己の能力と智慧とによつて現地位に達したのであると思惟して倨傲に陥る事を防ぎ、且彼をして眞の神に感謝なましむるに至つた。

遂に發達して此大なる豫言的像の金の頭となりたるバビロンは、紀元前二千餘年にノアの曾孫ニムロデに由つて創立された。創世記十章の八―十節に、「クシ、ニムロデを生めり。彼始めて世の權力ある者となり。彼はエホバの前にありて權力ある獵夫なりき。是故にエホバの前にあるかの權力ある獵夫ニムロデの如しといふ諺あり。彼の國の起初はシナルの地のバベル（英譯聖書傍註バビロン）、エレク、アツカデ及びカルネなりき」こある。又ニムロデは後年アツシリヤの首府となつたニネベの市を建設した。

過去七十五年間に考古學に由つて古代史上に多くの光が與へられた。宮殿、寺院、塔、城壁、石像、圖書館、記念碑及び陶器製の扁額、其他多の材料が數千年の間沙漠中に埋没して保存せられてゐたが、バビロン及びエジプトに於ては殊にさうである。是等の凡の紀念品は驚くべき古代文明の眞相を語り、且つ聖書記事の誤りなき事を益々力強く立證しつゝある。聖書は世界最初の強國が、このシナルの平原（バビロニヤ）地方に起るゝ紹介してゐる。「最近の發見に由ればバビロンが文明の搖籃地である事を認め得る」『Encyclopedia Americana, Article Babylonia.』

新バビロニア帝國の建設とその終焉

バビロンの最も古い王の一人はアガデのサルゴンであつたが、彼はその國境を地中海まで擴げて一大帝國を建設した。殊に聖書研究者に興味を興へるのはハムラビーである。彼はアブラハムに由つて征服せられたシナルの王アマラベルであるに信じられてゐる（創一四章参照）。彼は大遠征家であつたばかりでなく、大立法者の一人にして歴史に知られてゐるが、ハムラビーの法典は今も尙ほ巴里の博物館に陳列されてゐるのである。

紀元前千二百七十年頃アッシリアの王は、バビロンを首府とするカルデア即ちバビロニアの君主となつた。此國は其後バビロン市にあつて統治したアッシリア王朝に支配され、而して時にはアッシリア本國の君主に挑戦した事もあつた。又或時にはバビロンはアッシリアの屬國となつて居た事もある。斯くて數世紀は流る、如く過ぎ去つたが、其間のバビロンの歴史で記録に残つて居るものは極めて少いのである。紀元前七百四十七年、アッシリアのチグラテ・ピレーゼルの世に、ナボナツサーがバビロンの王位に即いた。かの有名なるナボナツサー紀元は彼の即位した年をもつて第一年としてゐるが其は紀元前七百四十七年に始まつてゐる。同じく七百二十一年メロダク・バラダンはバビロンの王となりユダの王ヒゼキヤに大使を遣はした（王下二〇章、賽三九章参照）。而して數年後アッシリア王サルゴンは、メロダク・バラダンを敗り彼を退位せしめた。セナクリブはバビロン征服を完成し、紀元前六百八十九年バビロンをアッシリア帝國に併合した。メデヤ人サイアクサリス（Caxares）は彼の盟主にしてアッシリアに叛逆した

バビロンの王ナボボラツサーは、紀元前六百二十五年頃ニベベを陥れてアッシリア帝國を征服した。斯してナボボラツサーは新バビロニア帝國を建設したが、其はユフラテ及びチグリス兩河の流域、スシアナ、エラム、シリヤ及びパレスチナを領してゐた。彼の治世は約二十一年間繼續した。而して紀元前六百五年に、彼の軍隊はシリヤに侵入したるエジプト王ニコを敗つた。石に彫られたる彼の碑文には、彼が大寺院を建築した事及び運河を設けて灌溉の便を計り、又城壁を建造した事等が録されてある。

やがて彼の後繼者となつた王はバビロンの諸王中最も名聲高き彼の子ネブカデネザル（紀元前六百四年）であつた。エルサレムは紀元前六百六年ネブカデネザルの治世の第一年、即ちユダの王エホヤキムの第三年にネブカデネザルに由つて占領せられた（但一ノ一参照）。ネブカデネザルはその父ナボボラツサーと共に二年間共同して統治したが、ユダヤ人は此時から彼の治世の計算し、カルデア人は前述の如く彼が單獨にて統治し始めた時、即ち紀元前六百四年から起算したのである。

彼は紀元前五百六十一年に薨去し、次に即位したのは其子エビル・メロダクで、その治世は僅に二年間であつた。紀元前五百五十五年に即位したナボナデイウスは、クレサスと同盟を締結してクロス大帝に對抗した。彼は其の子ベルシャザルと王權を分掌したやうに思はれる。因にベルシャザルの母はネブカデネザルの娘であつた。而してバビロン帝國は紀元前五百三十八年にクロスの攻撃に遇ふや、その戰略によつて陥落し、ベルシャザルがベルシャヤ人に殺害さるゝと共にその終焉を告げた。

世界統一といふ言葉の意義に就いて

ダニエル書第二章の像は豫言にして世界の四大帝國を表徴し、而してバビロンはその第一の帝國である。我等が云ふ時に、或者は、其等の中一として全世界を統御した國のないのにさうして其が眞理であらうかと云ふのである。即ちバビロンはギリシヤ及びローマを征服した事はない。のみならずローマはバビロンがその全盛を極める以前既に建國せられてゐたが、然しながらローマの地位と勢力とは當時全く未來のものであつたのである。故に神がその豫言を成就する爲、重立つた役目を勤める其等の國々をつつこ以前から準備なし給うたとて、決して豫言に反するものではない。我等は自らを豫言者の立場に置き、其處からは等の國々を観察しなければならぬ。然る時に我等は彼の居た場所、彼の書いた時期及び彼の周囲の事情を知悉して、彼の陳述を正當に考察する事が出来るのである。其國が神の民と密接なる關係を有するに至り、聖書歴史の記録を完成する爲に必要となる時に、初めて其國が豫言に現はれるものゝ期待する事は豫言解釋上明白なる法則である。而してバビロンが斯る状態になつた時、豫言者の目にはそれが國際間に於ける大立役者に見えたのである。そして凡のものは彼の目から遮られたのであるから、自然彼は全世界を支配する國としてバビロンを紹介したのである。我等の知る範圍内に於て、バビロンはその全盛時代に己に敵對した凡の國を降服せしめた。此の意味に於て凡の國は彼の勢力範圍内にあつたのであるから、此事實は三十八節の一見誇張を見ゆる語句をも解明するであらう。勿論その當時の文明圏外にあり、且歴史にも知られざる領土及び多數の種族が存

在してゐて、而かも發見せられず、征服もせられなかつたと云ふ事實は、此豫言者の表示を責め、或は此豫言を否認する理由とはならないのである。

バビロンは紀元前六百年にネブカデネザルがエルサレムを征服し、ユダヤ人を捕虜として連れ歸つた時、初めて神の民と接觸する事となつた。故にバビロンは此時から、即ちユダヤの神政々治が終つた時から、豫言の舞臺に登つたのである。この帝國の性質は、それが表徴された像——金の頭——を組成してゐる材料の性質によつて表示されてゐる如く、それは黄金時代に於ける黄金帝國であつて、その首府バビロンは、後世の何人によつても企及し得ない善美の頂點に達してゐた。

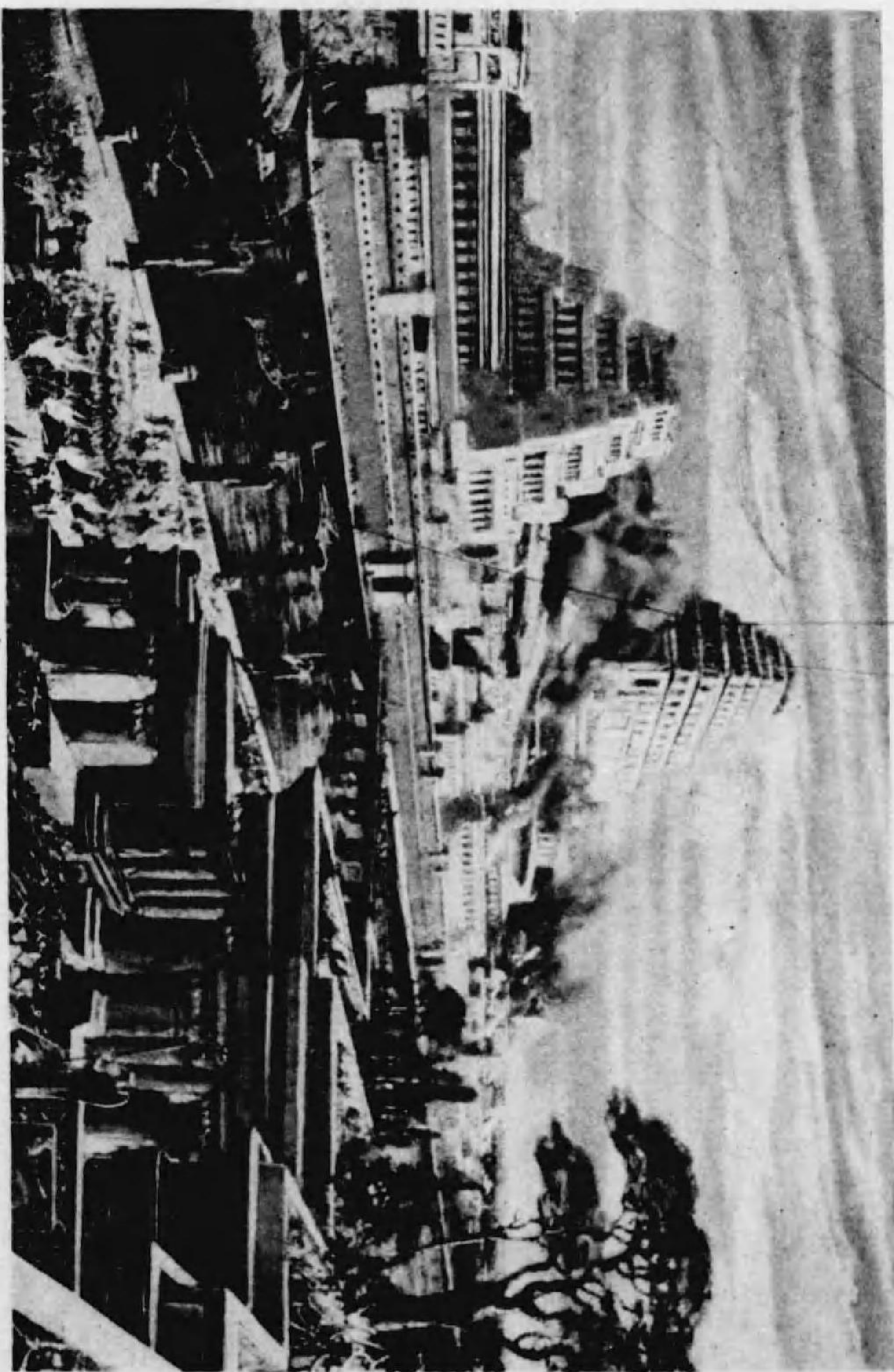
壯大無比なりしバビロンの都城

バビロンは東方の國を稱せらるゝ、美はしい地點に位し、約二百平方哩の面積を有し、その周圍及び縱横に大城壁を廻らし、其あるものは厚さ八十尺に及び、四頭立の軍車が自由に回轉する事が出来た。又外壁には數百の防禦用の高塔があり、又數百の門には大きな銅の扉があつた。ユフラテ川は市を貫流し、其兩岸は交通頻繁な渡船の岸壁をなしてゐた。又大きな開橋が兩岸の連絡を保ち、市街は巴里の廣小路の如く正方形に區劃せられ、贅を極めたる遊園地と庭園は宏莊なる邸宅の間に散在し、又純金の像と香壇及び贖罪所を有する大寺院ベルマーダク在り、半圓柱を支へられたる懸園は空中に宏大なる方形をなし、水力唧筒でユフラテ川の水を引き揚げ、以て各國より集められたる珍らし

き樹木及び美麗なる花卉に給水した。その他天文彙並に圖書館には、天文學、占星學及び宗教上の參考圖書が充滿してゐた。宮殿は二つあり、其一つは周圍が三哩半、他の一つは周圍が八哩もあつた。是等の二宮殿を連絡するユフラテ河の河底を貫く隧道あり、便利、裝飾及び防禦上より見て最も完全に配置されてゐた。その無盡蔵の富、宗教に流行の大都市に年々集り來る外國商人に旅客は實に多數であつた。バビロンの中には世界の不思議も云ふべきものが澤山あつたが、それは實に驚く可き大都會であつた。それ以前にもバビロンの如き都市はなかつたが、その後もそれに匹敵する都市はない。其處には全地を足下に蹂躪し、聖書記者が、「すべての國の中にてうるはしく、カルデヤ人がほこり飾りせるバビロン」の赫赫たる名稱を與へた程、類のない壯麗を裝うた女王が此都に坐してゐた事は、歴史的巨像の金の頭を表徴した大帝國の首府として實に相應はしかつた。

之はネブカデネザルが豪膽にして元氣瀟灑たる壯年時代に大業を完成して王位に即いた時代のバビロンの状態であつた。而してダニエルは丁度その當時莊嚴を極めたる宮中に於て、七十年の間捕囚として仕へる爲に、難攻不落の城中に入つたのである。ユダヤ人の捕虜はバビロンの壯麗と繁榮とを見て喜ぶよりも寧ろ鬱々として樂まず、彼等はシオンを回想する度毎に、涼々たるユフラテ河畔の楊柳に彼等の立琴を懸け、泣いて故國を偲んだのであつた。

廣い意味に於て此時から教會の俘囚の状態を開始したのである。何となれば其時以來神の民は地上の權力に服従し且つ多少の壓迫を受けて居るからである。而して神の民は地上の凡の權力が終に神の統治に移されるまではさうであらう。然しその救の日は近づきつゝある。其時はダニエルのみならず、凡の神の民が最小さき者より最大なる者に至



華繁の城都ソロバるげ於に昔在

るまで、最卑き者より最高き者に至るまで、先なる者より後なる者に至るまで、僅に周圍が六十哩位ではなく、千五百哩もある都に間もなく入る事が出来るのである。その都の石垣は煉瓦に滌青ではなく寶石や碧玉である。街はバビロンの如く敷石ではなく透徹る純金である。其河はユフラテの濁流ではなく生命の河の清流である。その音楽は落膽した俘囚の歎息と哀哭ではなく、曠はれたる者の大群が揚げられた死墓に對する勝利の凱歌である。其光は消ゆる光ではなく、不斷にして言語に絶する神の榮光である。即ち神の民は此都へ入るのである。それは異邦へ囚れ行く俘虜の如くならず、追放されし者の再び其父の家に歸へるが如く、又其處は「奴隸」「服役」「壓迫」等の冷やかなる言葉を以て心を傷められる處ではなく、其處は「家庭」「自由」「平和」「純潔」「言語に絶せる至福」及び「終りなき生命」の如き愉快なる言葉が、我等の心腹を永遠に喜悦を以て充たしめる處である。然り、王が再びシオンの俘囚を歸還せしめ給ふ時に、我等の口は歡呼の聲を放ち、我等の舌は歌を以て満たさるゝであらう。(詩一二六ノ一、二。默二一ノ一―二七参照)

ベビロンとヘルシヤの交戦

「汝の後に汝に劣る一の國おこらん。また第三に銅の國おこりて全世界を治めん。」

ネブカデネザルの在位は四十三年間にして、彼に繼いで即位した君主等は次の如くである。即ち其子エビル・メロダク在位二年、其養子ネリグリザルは在位四年、ネリグリザルの子ラボロソアルコットの在位は僅に九ヶ月に過ぎな

かつた。夫れ故に彼はトレミーの年代記中には記されてゐない。而して最後にナボナデウスと其子即ちネブカデネザルの孫ベルシヤザルが共同して王位を継いだ。此王の時にバビロン帝國はその終焉を告げた。

ネリグリザルの元年、即ちネブカデネザルの死後僅かに二年にして、バビロンにメデヤの間に勃發した戰に端を發し、後年遂にバビロンは全滅するに至つた。メデヤ王サイアクサリス (Cyaxares) はダニエル書五章三一節にダリヨスミ稱せられてゐるが、彼はその甥に當るベルシヤ系のクロスと共にバビロニヤを攻撃した。その戰争はメデヤミベルシヤ軍の連戰連勝となり、遂にナボナデウスの十八年(其子ベルシヤザルの三年)に、クロスは當時東方に於て彼に敵對せし唯一の都城バビロンを包圍した。古代の歴史家は、バビロン人がその難攻不落の城内に立籠り、二十年間の食糧を手許に集め、その廣大な都市の境界内には何時までも住民及び守備兵に食物を供給するに足る土地を有するを頼みとして、その高き城壁の上よりクロスを嘲けり、バビロン人を降服せしめんとする如き一見徒勞ししか想へぬ努力を笑つたを録してゐる。實際それは人間的の見地からすればバビロン人が斯く樂觀してゐたのは寧ろ當然の事であつた。どう考へて見ても、普通の戰術を以てしては、この都城が敵手に落ちようとは思ひもよらなかつた。であるから、彼等は敵軍の嚴重な包圍攻撃を受けてゐるにも拘らず、更に意に介せず、枕を高うして眠つて居た。然し神はこの倨傲にして罪多き都城がその榮光を失墜すべき事を宣し給うた。然り、神語り給へば何人かその聖言の實現を阻止し得よう。

クロス王のバビロン攻略

彼等がかく安全なり自ら恃んで居る處に彼等の危險が伏在して居た。クロスは武力を以て成し得ざる事を軍略を以て成就しよう決心した。彼はバビロンに於ける例年の祭典、即ち全市を擧げて歡樂と酒宴に耽溺するその祭典の間もない事を知り、此機に乗じて目的を遂行せん決心した。然るにバビロンに侵入せんとせば、ユフラテ河がその城壁の下より市街を貫流せる處よりするの外その途はなかつた。彼は此河を利用して敵の要害に肉迫する通路となさんと謀つたが、さうするには市を貫流する水路を他に轉せしめねばならなかつた。茲に於て、彼は前述の祭日の夕刻に當り、兵卒を三隊に分ち、その第一隊に命じて、豫め定めおける時に市より程近き所に設けたる人工的の一大湖水に河流を轉せしめ、第二隊には河が市中に入る地點に駐屯せしめ、第三隊には十五哩の下流、即ち河が市外に流出する地點を守らしめた。而して第二隊と第三隊は、河水が涸れて徒渉し得るに至るや否やその水路に入り、夜陰に乗じて城壁の下より通路を踏査しつゝ、王の宮殿に迫り、其處で兩隊は相合して不意に宮殿を襲ひ、守護兵を殺戮し、王を生擒にするか、然らずんば斬り棄つべき事を命じた。斯して河水が前述の湖水に流れ込んだ時、河は忽ちにして徒渉し得るに至つた。而して其目的の爲に配置してあつた兵卒はその水路を経てバビロン市の中心に侵入した。

然しもし全市が一大事變の起つたその夜、クロスの豫想に反し、斯くも甚しき不注意と油斷の状態に陥つて居なかつたならば、この作戰計畫は水泡に歸したであらう。と云ふのは、全市を通じて河の兩岸には甚だ高い城壁があつ

て、而かもそれは外壁と厚さを同じうして居た。又之等の城壁には堅固なる銅の門があつたから、それが閉鎖され守衛されて居たならば、河を横ぎる二十五街衢の何れへも河床より侵入する事は出来なかつた筈である。故にもし此時等の銅門がかく鎖されて居たとすれば、折角河床を傳つて城内に入り得たクロス部の部下も、何等施すべき術なく空しく退去するの外はなかつたのである。然るに致命的凶變の起つた其夜は、上下共に豪飲亂酔の極度を顧みず、此等の銅門は悉く開いた儘で、而かもベルシャヤ兵の侵入に氣付かなかつた。若し市民が河水の急に減少した事を認め、一大凶事の勃發を悟つたならば、顔色蒼然たらざる者果して幾人あつたであらうか。又彼等にして、密かに要害指して忍び足に進み來る武裝せる敵兵の薄黒い姿の蠢きを認め得たならば、全市は忽にして上を下への大混亂を生じ、口々に凶變の臨めるを叫んで馳廻つたであらう。然るに誰一人河の減水に氣付いた者もなく、ベルシャヤ兵の侵入を見た者もなく、又誰一人銅門を鎖さして之を守らねばならぬと意を配つた者もなく、唯譯もなく、飲めよ、歌へよの痴態に何事も忘れて居たのであつた。けに此夜に於ける彼等の所業は、己が國を自由を悉く犠牲に供して仕舞つた。彼等はバビロン王の臣下にして放吟亂舞の饗宴に酔つてゐたが、醒めたときには既にベルシャヤ王の奴隸となり果て、居たのであつた。

豫言と歴史との合致

クロスの兵士等が王宮の間近に襲ひ寄つたとき、バビロン兵等はベルシャヤ軍が己が都城に侵入せしこゝを始めて認

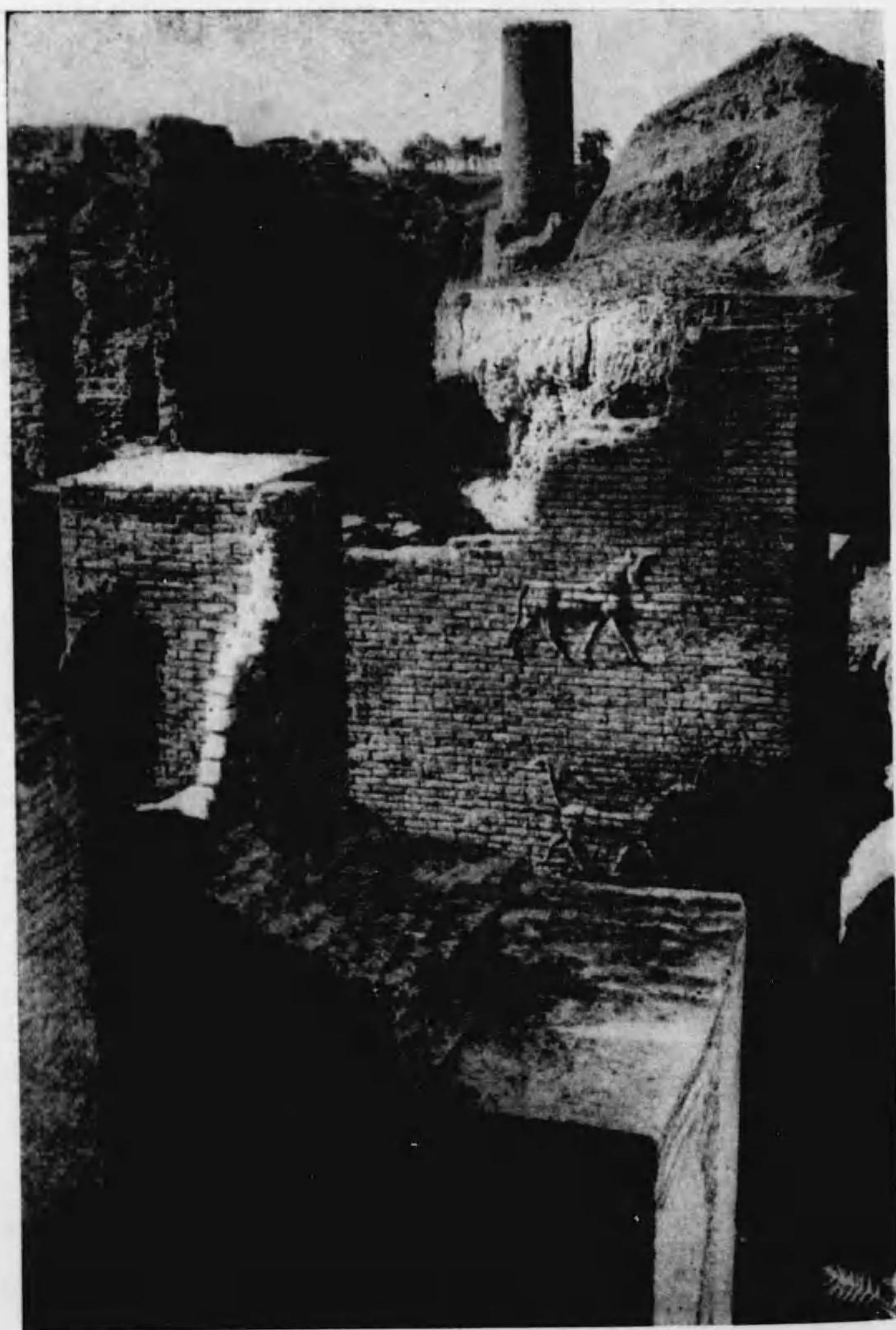
めた。ベルシャヤは直ちに擾亂の原因を感じし、彼は到底免かるべくもなき運命の爲に戦つて見たが、その甲斐なくむざむざ殺されて仕舞つた。ベルシャヤの此饗宴の光景はダニエル書第五章に記載され、而して其場面は左の如き簡單なる記録を以て結ばれてゐる。「カルデヤ人の王ベルシャヤは其夜の中に殺され、メデヤ人ダリヨス其國を獲たり、其時ダリヨスは六十二歳なりき」。

バビロン滅亡に關する以上の記録の外に、最近に至つてクロスの圓柱形土器（バビロニア又はアツシリアの寺院の下に埋められたる楔形文字を畫きある圓柱形土器）と、ナボナデウス王の碑文が發掘せられた。それには「タムーズの月（六月）にクロス軍は平野に於てナボナデウス王を破り、「戦はずして」バビロンに入つた」と録してある。そして都の内廓はその後に占領せられたもの、如く録してある。故に堅固な城壁を廻ぐらした内廓には大寺院や宮殿があつて、ナボナデウス王の子ベルシャヤが治めてゐたもの、やうである。最後に記念碑の一片には、「マーケスバシ（十月）の十一日の夜、大將は（以下文字不明）……に對して總攻撃を試みた。この文字不明の所は内廓であつたであらう。この總攻撃によつて、「彼（クロス軍の大將ゴブリヤス）は王の子（ナボナデウスの子ベルシャヤ）を殺した」と記されてある。即ち記念碑の破片は、其處にゐた豫言者の靈感の筆によつて昔から詳細に傳へられてゐるベルシャヤの酒宴の最後の夜の光景を斷片的に物語してゐる。（ダニエル書五章参照）

斯くして巨像の第一の區分は完結し、豫言者の言葉に違はず第二の王國が起り、茲に豫言的靈夢の最初の部分は成就したのである。

榮華の宮もあはれ禽獸の巢居

然し我等はバビロンに告別するに先立ち、其後のバビロンの陰慘な歴史の終局へ一瞥を與へよう。想ふに勝利者はかゝる高貴な且世界の凡のものに遙か優れたる都の所有者となつたミすれば、必ずや彼の帝國の首府をなし、其最初の壯麗を保存すべきが當然である。然るに神は、かの都市は廢墟となり、猛獸かしこに伏し、吼ゆるもの其家にみち豺狼その城のなになき、野犬榮華の宮に叫ばんミ仰せになつた。(イザヤ書一三ノ一九―二二参照)。故にバビロンはさうあつても廢棄されねばならなかつた。クロス王はバビロンの東方、チグリスの支流チヨアスピス河畔なるエラム州に於ける著名な都市スーサに遷都したが、史家ブリドーによれば、この遷都はクロス王の單獨治世の第一年に行はれたらしい。是が爲にバビロン人は大に激し、ダリヨス・ヒスタスベスの五年即ち紀元前五百十七年に叛亂を起した。爲にバビロンは再びベルシャ軍の總攻撃を受くるに至り、又もや戰略を以て陥れられた。而して其戰略は何か? 古代歴史家の記録によれば、ダリヨス麾下の一司令官ゾピラスは自ら己の耳鼻を切斷し、全身に鞭を以て目も當てられぬ程の傷を作り、句圍されたバビロン軍中にかゝる状態で逃げ入り、一見彼を斯く不具者としたダリヨスの不殘虐に對し復讐を熱望し居るかの如くに見せかけた。果して彼はバビロン人の信用を得、遂にバビロン軍の司令長官に任命さるゝに至つたが、ゾピラスはバビロン人の油斷を見すまして都をダリヨスの手に裏切つた。而してダリヨスはバビロン人が今後決して謀反し得ない様にと、叛逆に與かつて力ありし者三千人を屠り、市の銅門を撤去し



二千九百年間地下に埋没して最近發掘されたバビロンの

二百クビット（一クビットは約一尺五寸）の城壁を五十クビットに低めて仕舞つた。是れ實にバビロン市破壊の手段にして、この行爲は世バビロンに敵する凡の徒黨として思ふ存分蹂躪せしめ得る因となつたのである。ザークセスはギリシヤより歸來するや、ベル・マードク神殿の無限の富を奪ひ、その宏莊なる堂宇を毀つて仕舞つた。又アレキサンダー大王はバビロン再建を企圖し、一萬人を二ヶ月間使役して塵芥を片付けさせたが、彼は暴飲放恣の結り死せし爲其事業を中止せねばならなかつた。又紀元前二百九十四年セリウカス・ニカーターはその隣接地に新バビロン市を興し、舊都より多くの材料を住民に移して新都を建設して其處に植民せしめたが、今や誰一人そこに住む者なく、廢頽と荒跡とは深刻に古都の歴史を物語つて居る。因にバルテヤ人の君主等の暴力がその破滅を早めたのであつた。又四世紀の末葉にはベルシヤ王は猛獸を飼育する構欄として之れを用ゐた。又著名なる某旅行家の言によれば十二世紀の終頃には、ネブカデネザルの宮殿の僅か許りの遺跡に蛇類其他有毒の爬蟲類充滿し、大なる危険を冒さずしては精細に視察する事が出来なかつたこの事である。

また豫言者は、「バビロンは廢墟となり、梟の住所となるべし」と言つてゐる。以下は英國の考古學者レーヤード氏が千八百四十五年に臨檢して發見した状態である。

「多種多様ながらくたが山積して數十町歩に亘つてゐた。……硝子、大理石、陶器及び彫刻されたる煉瓦等の破片が所々に散在してゐた。……梟（灰色の大きな梟が百羽近くも群をなしてゐるのを屢々發見した）は叢から飛び出で、不潔な山犬が溝に逃げ隠れた。」(Discoveries Among the Ruins of Nineveh and Babylon, 二二章四一三頁參照)

「アラビヤ人もかしこに幕屋をはらす」預言百イザヤは二千六百年前に言つたが、アラビヤ人が彼處を避けるのは字義的に事實であつて、暫くても天幕を張る事をしないと旅行家は言つてゐる。彼等は其處が呪咀はれたものゝ信じてゐるのである。

現在の状況を示し得る者は、蓋し長年バビロンの遺跡發掘の事業を監督した獨逸の考古學者ロバート・コールドウエー教授の右に出づる者はあるまい。彼は千九百二十二年に左の如く録した。曰く、「我等が廣大なる廢墟を眺める時に、我等は無意識の裡に、「野の獸彼處に山犬三倍に居り、駝鳥も彼處に棲むべし。何時までも其地に住む人なく、世々こゝに住む人なかるべし。」(耶五〇ノ三九)このエレミヤの言を追想せざるを得ない。シ。(The Excavations at Babylon 三―四頁)。かくて大バビロンの廢墟は神の聖言の成就の正確さを吾人に示し、併せて懷疑者の不信をして故意的旨目の如く見えしめる。

第二王國メド・ペルシヤの國情

「汝の後に汝に劣る一の國おこらん」ミ、茲に「國」なる語が用ゐてあるが、其がこの巨像の異なる部分にて代表されてゐるのは、何某と云ふ王其人を指したものでなく、讀んで字の如く王國を意味する事を示してゐる。であるからネブカデネザルに對し、「汝はすなはち此金の頭なり」ミ二人稱代名詞を用ひてあるが、それは王其人を指さず、バビロン王國を指したものである。

次の王國メド・ペルシヤはこの巨像の銀の胸と兩腕とに相當する國である。それは前の王國より劣つた國であるべきであつた。如何なる點に於て劣る筈であつたか？ 力に於てはない。何故ならば後者は前者を征服したのであるからである。領土に於てはない。何故ならばクロスはエーゲアン海からインダス河に至る凡ての東方諸國を征服しその當時までに嘗て見なかつた大帝國を建設したからである。實にそれは富と豪華及び偉大なる點に於ては劣つて居つたのである。

聖書の立場より見れば、バビロニア帝國時代に於ける主要な出來事はイスラエル人の捕囚であつた。同様にメド・ペルシヤ王國の時代に於ける主要事件はイスラエル人の故國への歸還であつた。紀元前五百三十八年バビロンの陥落に當り、クロスは慇懃の行爲として伯父ダリヨスにかの王國の第一の地位を割當てた。しかし二年の後の紀元前五百三十六年にダリヨスは死し、同年又ペルシヤ王クロスの父カンバイシスが死んだ。これ等の出來事に由りクロスは全帝國の單獨君主となつた。イスラエルの七十年の捕囚期が終りし此の年に於て、クロスはかの有名なユダヤ人の歸還とその神殿の再建とに關する勅令を發布した。之はエルサレムの回復と再建とに關する大法令の一部分であつたが、後紀元前四百五十七年アルタスタタ王の治世の第七年迄に全部の發布を見た(喇書六ノ一四参照)。而して之は後に記す如く、ダニエル書第八章の二千三百日、即ち聖書に示された最長にして最も重大な豫言的時期の始起を劃したのである。(ダニエル書九ノ二五参照)

クロスは七年の治世の後に死しその息子カンバイシスがその後を繼いだが、彼は紀元前五百二十一年まで即ち七年

ミ五ヶ月間統治した。其後この國の滅亡する迄に十人の君主が起つたが、その統治期間は區々にして短きは四十五日長きは四十六年間、次の如く紀元前三百三十六年に至るまで順次に即位した。即ちゴマテス(スード(僞の意))・スマーデス)は紀元前五百二十二年に七ヶ月間、ダリヨス・ヒスタスベスは紀元前五百二十一年より四百八十五年迄、ザークセスは紀元前四百八十五年より四百六十四年迄、アルタシヤスタ・ロンギマヌスは紀元前四百六十四年より四百二十四年迄、ザークセス二世は四十五日間、ソグデアヌスは六ヶ月と十五日間、ダリヨス・ノサスは紀元前三百二十四年より四百五年迄、アルタシヤスタ・ムネモンは紀元前四百五年より三百五十九年迄、オークスは紀元前三百五十九年より三百三十八年迄、アルセスは紀元前三百三十八年より三百三十六年迄各々統治した。紀元前三百三十五年はベルシヤ王朝の最後なるダリヨス・コドマヌスの第一年を考へられてゐる。此人は風采が立派で絶大の勇氣を有し、而も柔和にして寛大な氣質の人であつた。若し彼が他の時代に生れたらすれば、疑もなく長く且光輝ある經歷が彼のものになつたであつたらう。然るに彼は不幸にして豫言を成就する器に選ばれた人、對抗しなければならなかつた。而して先天的にも後天的にも彼をして此不等の闘争に成功せしめる事は不可能であつた。「彼は王位に即くや否や彼の打ち勝ち難き強敵アレキサンダーが、ギリシヤ軍の先頭に立つて彼の王位を覆へさん」と準備しつゝ、あるのを發見した。ミ、前記の歴史家ブリドーは言つてゐる。

第三王國ギリシヤの擡頭

ギリシヤとベルシヤとの間の争鬭の原因及び詳細事に就ては、我等は特に斯る事件に献けられた歴史に譲る事として、此處ではその決勝戦は紀元前三百三十一年にアルペラに於て戦はれ、その時ギリシヤ軍はベルシヤ軍に比し數に於ては僅一對二十の少數であつたが、全然勝利を得たとの事實、而してアレキサンダーはベルシヤ王が嘗て所有した領土にも匹敵する大領土の皇帝となつた事を述べれば充分であらう。

「又第三に銅の國おこりて全世界を治めん」ミ豫言者は云つた。それは極めて簡潔なる言葉であるけれども、世界の主權者の變更を意味する。千變萬化の政治的舞臺に於て、ギリシヤは暫くの間第三世界的大帝國として靈夢中に擡頭して來た。

ベルシヤ帝國の運命を定めた大決戦の後に、ダリヨスは彼の軍隊の散亂した残存者を糾合して、彼の王國に彼の權力に對する地歩を作らうと努力した。然しながら彼は最近まで整頓してゐた大軍の中からしてさへも、勝誇れるギリシヤ軍と交戦を敢てするには尙不充分を免れ得なかつた。剩へアレキサンダーの追撃は急にして、ダリヨスは屢々敏活に追ひ來る敵の手を辛うじて逃れたのであつた。然し遂に二人の謀叛人ベツサスミナバルザネスは不運の王を捕へて馬車の中に閉ぢ込め、バクトリア指して逃走した。其は若しアレキサンダーが彼等を追撃すれば、先づ王を渡し、彼等自らは安全を得んとの目的からであつた。此時アレキサンダーはその事を知つて、直ちに自ら彼の軍の輕速な部下と共に強行追撃をなした。數日間の強行軍の後彼は謀叛人等に近付いた。その時謀叛人等はダリヨスに速に逃走する様騎馬を勧めたが、ダリヨスが之を拒んだので、謀叛人等はダリヨスに數箇所の致命傷を負はせ、馬車中に

瀕死の王を残し、己れ等は直ちに駿馬に鞭打つて疾驅し去つた。そしてアレキサンダーは其處に着した時、唯ベルシヤ王の生命なき遺骸のみを見た。確かに之は人間の繁榮が如何に無常なるかに就て有益な教訓を學ぶよい機會であつたが、彼はそれをなさなかつた。此處に僅數ヶ月前までは高貴にして寛大な性格を有し、世界的大帝國の王位を占めた人が横はつてゐるのである。災禍、破滅、横死が俄然彼の上に臨んだ。而して彼の王國は征服せられ、彼の財寶は掠奪せられ、彼の家族は捕虜とせられ、今や彼は叛逆者の手に由つて慘酷にも弑せられ、血にまみれた遺骸は粗末な馬車の中に横へられてゐるのである。この陰惨な光景を目撃しては、例アレキサンダーが凡の恐怖すべき有爲轉變の戦亂の血生臭い光景に慣れて居たは云へ、其の眼中涙なきを得なかつたであらう。そこで彼はその遺骸に彼の上衣を蒙ふせてスサの捕虜の女官達の所へつれ行く事を命じ、自らその王者らしき葬式に必要な費用を供給した。彼は終始一貫殺伐な英雄であつたが、之等の優しい行爲に對しては稱讚の聲を禁じ得ないのである。

アレキサンダー大王の業績

ダリヨスが倒れたので、アレキサンダーは最後の恐るべき敵がその戰場から一掃されたのを知つた。それ以後彼は思ふがまゝにその時を費した。即ち或時は休息と享樂の爲に、或時は弱國に對する征服慾の遂行の爲に其時を費したのである。古代歴史家の記録によれば、その後彼は印度征服の旗を揚げた。ギリシヤの傳説に由ればその理由は、ジュピター（古代羅馬の主神）の二子バツカスミヘルクルスが印度征服を企圖したと云ふのである。而してアレキサン



る耽に慨感てし撃目を路末るな惨無の王スヨリダ王大-ダンサキレア

ダリもジュピターの子である。自稱し、同じく印度の征服を試みた。云ふ事である。彼は賤しむべき傲慢のあまり、自らの爲に神の名譽を恣にした。彼は勝ち獲た都市を血に満いた放縱なる部下の爲すがまゝに任した。彼自ら屢々酔ひ狂うた狂暴の中に自分の友や寵臣を殺害した。彼は自らの肉慾を満足せしめんが爲に最も不徳なる人々を探し出した。ある時は放埒な泥酔した婦人の教唆に由つて、彼は廷臣の一隊——凡ては狂へる如く酩酊した——と共に手に炬火を持つて出立ち、當時世界最美の宮殿の一つであつたベルセボリの市に宮殿に火を放つた。彼はその從者の中にかゝる過度の飲酒を獎勵した爲に、或る場合の如き二十人の從者が共にその酒宴の結果として死亡した事があつた。彼は或る長い酒盛で飲み續けた後、又外の酒宴に直ぐ様招待せられた。そして史家の傳ふる處によれば、彼は二十人の來賓の銘々杯を取りかはした後、信じ難い事ではあるが、約三升七合八勺も容るヘルクアンの大杯にのみく黄金の水をついで二回も飲みほした。云ふ事である。その結果彼はそこで倒れて烈しく發熱した。そしてその後十一日目、即ち紀元前三百二十三年の五月若くは六月頃に遂に永眠した。時に彼はその年齢三十二歳、未だ壯年期の初期に達したばかりの働き盛りであつた。

ギリシヤ帝國の經過に就ては此處で詳述するに及ぶまい。何故ならばその著しい特長に就ては、他の豫言の下に更に特別な注意を拂はなければならぬからである。却説、ダニエルは次の如く巨像の解明を繼續してゐる。

第四の王國

「第四の國は堅きこゝ鐵のごまんならん。鐵は能く萬の物を毀ち砕くなり。鐵の是等をこまなく打砕くがごまなく其國は毀ちかつ砕くこゝをせん。」

この豫言の解釋中、此處までは一一般の註解者が一致してゐるのである。即ちバビロン、メド・ペルシヤ及びギリシヤが、各々金の頭、銀の胸、銅の腹部に由つて表示されてゐる云ふ事は、凡ての者が承認してゐる。然し意見の異なる論據は殆ど皆無であるにも拘らず、世には此巨像の第四の部分即ち鐵の兩脚に由つて表徴せられた國に就ては、不思議にも意見の相違がある。此點に就てはギリシヤに續いた世界的大帝國は何れの國であるかを調べればよいのである。何故なれば鐵の脚は第四の王國を表示してゐるからである。而して此事に就ては歴史が判然と證明してゐる如く、ギリシヤに續いた世界的大帝國は唯一つで、それは羅馬であつた。即ち羅馬はギリシヤを征服し、又凡てのものを従はせ、恰も鐵の如く毀ち且砕いた。聖書を餘り信じなかつた歴史家ギボンでさへ、ダニエルの表徴的巨像に則り、此の帝國を鐵の國ローマ（「The iron monarchy of Rome」）と記述してゐる。

西曆紀元頃の羅馬帝國は、南歐洲全部、佛國、英國、和蘭、白耳義の大部分、瑞西、獨逸の南部、匈牙利、土耳其、希臘、亞細亞並に阿弗利加の領土は云はずもがな、實に宏大なる版圖を有してゐた。故にギボンが羅馬に就て次の如く言つたのは當然である。

「ローマ大帝國の版圖は全世界的に波及して居た。若しそれ一人の統治者によつて支配されて居らんか、安全にして鞏固なる事無類であつて、若し之に反抗する事でもあれば、其はその國の滅亡であつて、決してその運命から逃れる事は出来なかつた。」

此の國は最初は鐵の如く絶對に鞏固であるに録されてゐる。而して是はその全盛時代であつた。其間羅馬は一大巨像に譬へられ、國々を敷し、且つ全世界に向つて法律を發布してゐた。然し是は何時までも繼續すべき筈のものではなかつた。（註、前述の一大巨像は古來強力優勢等の象徴として用ひられしものにして、ネ王の夢の像に非ず）

羅馬の分裂

「汝その足と足の趾を見たまひしに、一分は陶人の泥土一分は鐵なりければ、その國は分裂たる者ならん。又汝鐵と粘土との混和たるを見給ひたれば、その國は鐵のごまなく強からん。その足の趾の一分は鐵一分は泥土なりしごまなく、その國は強きごまなくあり脆きごまなく有ん。」

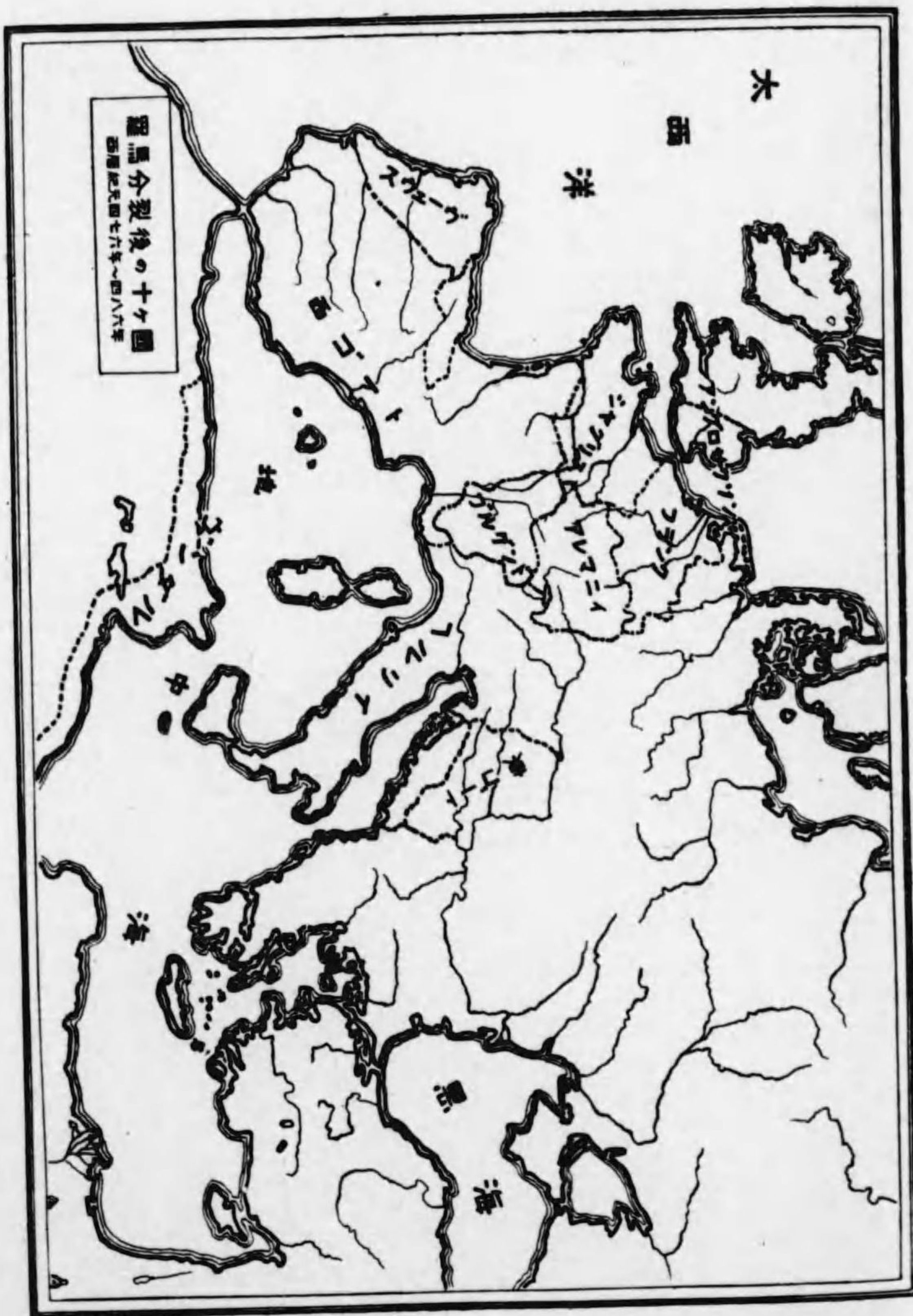
粘土に由つて表徴せられた脆弱の部分は、足の趾のみに止まらず、足他の部分にも及んでゐた。羅馬は十ヶ國に分裂する前に、それが建國後數世紀間持つてゐた鐵の強い硬着力を失ふに至つた。國家及び個人を破滅せしめる奢侈、それに伴ふ享樂、放縱の惡風が上下に張り、鐵の如き楔は腐蝕し且つ弱くなり始めた。斯くして羅馬は遂に分裂するに至つたのである。

此の分裂は紀元三百五十一年より四百七十六年の間に成就したのである。しかして時には十ヶ國以上になり、或はそれ以下になつたりしたのである。然し紀元四百七十六年以後十年間に於て左に列挙した十ヶ國が分離したる獨立國となつたのは、歴史上動かすべからざる明確なる事實である。アングロサクソン、フランク、アレマニー、スウェーヴ、西ゴート、東ゴート、ヴァンダル、ブルグンド、シヤグリズ、ヘルリイ、等である。以上の國々と近世に於ける歐洲諸國との關係は、その二三を擧ぐれば、アングロサクソンが英國、フランクが佛蘭西、西ゴートが西班牙等の如きそれである。歴史を按ずるに、國家の興亡、民族の盛衰は、一見人間の意志と力の強弱如何によつて別れるもの、やうであるが、それは淺見者流の見解に過ぎない。各時代を劃すべき幕は、唯一なる神の意志によつて、揚げ降けされる。人間の野心、慾望、軋轢、争闘、さう云ふもの、不斷の連續も云はる、歴史に於て、神の意志のみが何等の制縛を蒙るこゝもなくして、黙々の裡に、而も確實に成就されつゝあるのである。

分裂後の諸國

「汝が鐵ミ粘土ミの混りたるを見たまひし如く、其等は人草の種子と混らん。然ど鐵ミ泥土との相合せざるこゝも、彼と此と相合するこゝも有じ。」

この地上に於る世界的大帝國は羅馬の滅亡を以つて終りを告げた。此時までの世界は、勇敢にして戦術に長じ、隣邦よりも優越する國民が漸時隣邦をも併吞して一大帝國を建設し、一人の君主が之を統治し得る状態であつた。然る



に羅馬の滅亡と共に、其の可能性は永久に消滅した。廣大なる領土、人種、國語の相違は、分裂したるこの十ヶ國をして再び結合する事を許さなかつた。即ち國家存立の要素たる結合力を失ふに至つたのである。故に如何なる人も、或は如何に多數の人々も、再び之を結合せしめる事は不可能である。即ち其は鐵と泥土の混合によつて表徴された如く不可能事であるが、この事に關して巧みに解説せられたる一節を左に引照しよう。

「羅馬帝國が分裂して以來從前の勢力はなくなつてしまつた。然しそれはこれまでの國との如く他國の王が來つて之を顛覆するのではなかつた。この分裂したる羅馬は、石の國がその足を撃ちて之を微塵に碎き、恰も夏の禾場の糠の如く飛散せしめるまでは繼續し、その全期間を通じて一部分の勢力は保たれる筈である。即ち豫言者は曰く、「その足の趾の一分は鐵、一分は泥土なりし如く、その國は強きところもあり脆きところもあらん。」(四二節)ミ。他の如何なる方法を以てしても、此事實を斯くも顯著に表現する事が出來ようか? ……而して今迄に是等の分裂したる國々の領土を併呑して一大帝國を建設せんと夢想した者は大勢あつた。シャールマンは之を試み、チャールス五世も亦之を試みた。ルイ十四世も、ナポレオンも同じく之を試みた。然し何人も成功しなかつた。そののみか彼等の勢力は次第に衰退し、遂に破滅に陥つたのである。……「強きところもあり脆きところもあり」ミは豫言者の叙述する所で、それは歴史の證明する事實である。著者は讀者の前に歴史を繙き、「是、羅馬大帝國の末路を遺憾なく描寫したものである」ミ言ひたいのである。嘗て羅馬は無限の權力を以て支配してゐた。即ちそれは世界的大皇帝であつた。然るにその杖(王權)は折られ、その王座は覆へされ、その權力は褫ぎ去られた。……その分

裂した國々の名稱は變つてゐても、領土は今尚ほ鐵の國が天下を統治してゐた時と同じである。又それは「強きところもあり」で分裂後も鐵の力を保有し、一大帝國に併合せしめんとする凡の勢力によく抵抗し得た。聖書は「相合するこゝ有らじ」と言ひ、歴史は「相合しない」と應答してゐる。

然し人は猶他に方法があると云ふであらう。若し權力に由つて之を遂行する事が出来ないならば、外交的政策に由つて之をなし得ると云ふであらう。故に豫言は、「其等は人草の種子と混らん」と其事を暗示してゐる。即ち結婚政策に由つてその權力を結合し、遂には是等の分裂したる國々を一大帝國に統一せんと劃策すると云ふのである。

果してこの政策は成功するであらうか？ 否、成功しない。何故ならば豫言者は、「彼等は鐵と泥土との相合せざるこゝに、彼と此と相合すること有じ」と云つてゐるからである。而して歐洲諸國の歴史はこの豫言が正確に成就した事實の連續的註解書である。即ちそれはカヌートの時代から現時代に至るまで、歐洲各皇室の政策にして、彼等が大版圖を領せんが爲に取つた常道である。近世に於て歴史に記されたるその最も顯著なる例はナポレオンの場合である。彼は十ヶ國の中の一王國の主權者であつたが、權力を以てなし得ない事を結婚政策に由つてなして、一大帝國を建設せんとした。果して彼は成功したであらうか？ 否、成功しなかつた。彼は結婚政策によつて同盟した處のブルヘル軍の爲に、遂にウオーターローに於て敗れたのである。やはり鐵は泥土と相合しなかつた。

(Wm. Newton, Lectures on the First Two Visions of the Book of Daniel, 三四—三六頁)

歐洲各皇室間の姻戚關係

丁抹の故クリスチャン九世に、三王子三王女の六殿下があつた。第一王子は父王に代り丁抹王フレデリック八世として王位を繼承した。第一王女は英國のエドワード殿下に嫁し、今のアレキサンドラ太后となつてをられる。第二王子ウィリアム殿下は希臘のジョージ五世として即位し、最近のバルカン戦争の際暗殺された。第二王女は露西亞のアレキサンダー皇帝に嫁し、露西亞のドワガー・ダグマル皇后陛下になられた。故に露西亞の故ドワガー・ダグマル皇后は、英國のアレキサンドラ太后は御姉妹である。

丁抹のフレデリック八世に代つて丁抹王に即位したのは、フレデリック八世の第一王子で、今のクリスチャン十世である。又フレデリック八世の第二王子チャールス殿下は、オーカン七世として現在諸威の皇帝である故に、今の丁抹と諸威の皇帝は御兄弟である。

ドワガー・ダグマル皇后の王子は、露西亞の故ニコラス二世陛下で、アレキサンドラ太后の王子は、今の英國のジョージ五世陛下である。而して希臘のジョージ五世の王子は、今の希臘のコンスタンチン十世陛下である。故に露西亞、英國、希臘の各皇帝は、諸威及び丁抹の皇帝と御従兄弟の間柄であり、且つ五皇帝はみな丁抹のクリスチャン九世の皇孫殿下である。

獨逸と英國

英國の故ビクトリヤ女王の第一王子は英國のエドワード七世であつた。又ビクトリヤ女王の第一女王ビクトリヤ殿下は、獨逸のフレデリック陛下に嫁し、ウイリアム皇帝の御母君とならせられた。故に英國皇帝と獨逸皇帝は御從兄弟で、共にビクトリヤ女王の皇孫殿下である。

獨逸皇帝ウイリアム陛下の御姉君ソフィヤ殿下は、希臘のコンスタンチン十世に嫁された故に、希臘の皇后及び獨逸の皇帝は、英國の皇帝と御從兄弟の間柄である。

而して既に述べたやうに、希臘の皇帝及び皇后は、亦英國の皇帝と御從兄弟である。露西亞の故ニコラス二世陛下は、英國のビクトリヤ女王の皇孫殿下であり、且つ英國の皇帝及び獨逸のウイリアム皇帝と御從兄弟の間柄である英國のアリクス女王殿下と結婚された。諾威のホーカン七世は英國皇帝の御姉君であるモード殿下と結婚された。故に物故された露西亞の皇后と、諾威の皇后と、希臘の皇后とは御從姉妹にして、ビクトリヤ女王の皇孫殿下である。而して諾威の皇后は英國皇帝とは御姉弟であり、獨逸皇帝は希臘の皇后も亦御姉弟である。この外西班牙皇帝の御母君は埃地利の皇后である。又西班牙皇帝アルファンソ十三世は、ビクトリヤ女王の皇孫エナ殿下と結婚された。故に英國の皇帝と獨逸の皇帝、希臘の皇后、露西亞の皇后、西班牙の皇后、諾威の皇后は、悉くビクトリヤ女王の皇孫殿下で、互に御從兄弟の間柄で、中二人づゝは御姉弟である。

神の言は永遠にたゝん

此の如く歐洲各國の皇室は親戚の間柄であるけれども、各國民をより親善に導き、列國をして結合せしめるセメントとしての役目を果たすことは出来なかつた。獨逸の英國に對する憎惡の念は、その皇帝がウイリアム陛下の御從兄弟である事には全然無關心で、兩皇室に何等の關係がないのと同じやうに猛烈に相戦つた。「彼ら此と相合するこゝ有らじ」此の神の言は永遠にたつのである。

第五の王國

「この王等の日に天の神一の國を建て給はん。是は何時まで滅ぶることなからん。此國は他の民に歸せず、却てこの諸の國を打破りてこれを滅せん、是は立ちて永遠にいたらん。かの石の人手によらずして山より鑿れて出で、鐵と、銅と、泥土と、銀と、金とを打碎きしを汝が見たまひしは即ちこの事なり。大御神この後に起らんこころの事を王に知らせたまへるなり。その夢は眞にして、この解明は確なり。」

茲に於てこの大豫言は頂點に達してゐる。局面が展開して此處に豫言された崇高なる光景に到達する時に、人類歴史は終焉を告げ、嚴肅にして榮光ある神の國となるのである。この時神の民は墮落した悲しむべき現世界の狀態が一變するのを見て感謝するであらう。即ち凡の義人は悲哀より榮光に、争闘より平和へ、罪の世より聖き世界に、死

より生命に、暴虐に壓制より幸福なる自由と天國の祝福された特權に移されるのである。又弱きより力へ、變化に衰退より不變にして永遠なるものに變るのである。

然れども此國は何時建設せられるのであらうか？ 我等は斯る重大なる問題を容易に解決する事が出来るであらうか？ 神の言は我等の爲にこの問題を解決せずには置かない。而してそこに天的恩恵の眞價があるのである。我等は此の豫言にも或は他の豫言にも正確な時日が啓示せられてゐることは云はない。寧ろ我等はそれが啓示せられてゐない事を力説するものである。然れどもそれが極めて近くに接近した事は示されてゐるが故に、此國の建設せられるのを見る時代の人々は、間違ひなくその接近を認める事が出来、且つその凡の榮光に與り得る爲に必要なる準備をなす事が出来るのである。

時はこの巨像の各部分を進展せしめた。それは實に巧妙に重大なる事件を描寫してゐる。それは直立してゐた如く千四百年以上も直立して、人手によらず山から墜り出された石、即ち基督の王國に由つて一撃の與へられるのを待つてゐる。これは主が火焰の中に顯れ、神を知らざる者及び我等の主イエスキリストの福音に従はざる者に報を與へ給ふ時になされるのである。(詩二ノ八、九參照)。「是等の王の日に」天の神は一つの國を建て給ふのである。

『是等の王』の時代になつて既に十四世紀は経過したのである。この豫言に由れば次に起るべき事件は永遠に續く神の國の建設である。他の豫言に無數の兆きは、疑ふ餘地のないまでに其日の切迫した事を示してゐる。

來るべき神の國に現代人の何物を措いても熱中すべき話題でなければならぬ。讀者よ、これを迎ふる爲の準備は如

何？ 此國に入る者は單に現世に於けるが如き人間の一生を送る爲ではない。又その國が墮落したり、或は他の強國に由つて顛覆せられたりする事もないのである。故に彼は永遠にその特權と祝福とに與り、その榮光を永久に享受する爲に入るのである。何故なれば「此國は他の民に歸せず」と録されてあるからである。讀者よ、敢て問ふ、準備は如何？ 嗣子となる條件は極めて寛大である。「若し汝等キリストに屬する者ならば、汝等はアブラハムの裔即ち約束に循ひて嗣子たるなり」(ガラテヤ書三ノ二九)。諸君は來るべき王キリストと友誼を有せらるゝや？ 又諸君は彼の人格を愛さるゝや？ 諸君は謙遜に彼の足跡を歩み、且つ彼の教訓に服従しようとなつて努力しつゝありや？ 若し然らば、次の比喩に於ける是等の人々に當て嵌めて、諸君の運命を讀まれん事を望む。曰く、「わが敵すなはち我支配を欲ざる者を此に曳來りて我前に誅せ」と(ルカ傳一九ノ二七)。若し諸君がキリストに敵するならば、諸君の避難すべき國はないのである。何故ならばキリストの王國は、過去及び現在の世界全ての國が所有せし處の全ての領土を占有すべきであるからである。それは全世界に滿つる筈である。此の正統の君主、常勝の王より、「我父に恵まるゝ者よ、來りて創世より以來なんぢらの爲に備へられたる國を嗣け」(太二五ノ三四)よとの招待を受くるものは實に此上ない幸福である。

ネブカデネザル王の感激

「是においてネブカデネザル王は俯伏してダニエルを拜し、禮物と香をこれに獻ることを命じたり。而して王」

たへてダニエルに言けるは、汝がこの秘密を明かに示すことを得たるを見れば、誠に汝らの神は神等の神、王等の主にして、能く秘密を示す者なりき。かくて王はダニエルに高位を授け、種々の大なる賜物を與へてこれをバビロン全州の總督となし、又バビロンの智者等を統る者の首長となせり。王またダニエルの願によりてシヤドラクとメシヤクミアベネゴを擧げて、バビロン州の事務をつかさどらしめたり。ダニエルは王の宮に在る。筆者はこれまでにダニエルがバビロン王に知らしめた夢の解明に就て、詳細に亘り之を叙述して來た。今より思をネブカデネザル王の宮殿に馳せ、ダニエルが王の前に立つて夢をその解明を奏上したまひの光景を追想したのである。その周圍に在る廷臣及び魔術士は占星者は恐懼し驚異の裡に固唾を呑んで傾聴した事であらう。そして又連戦連勝向ふ處敵なく、遂に地上に於る高の王座に上りし野心満々たる君主にしては、彼の國が永遠に續かん事を無論希望したであらう。然るに己の國が他國に由つて顛覆せられる事を豫告せられた時には、彼は殆ど忍び得なかつたに相違ない。而もダニエルは此の事實を明白に且つ大膽に王に知らしめた。而して王も立腹するどころか、神の豫言者の前に俯伏して彼を拜した。ダニエルは直ちに彼を神として尊敬せよとの勅令を撤回するやうに申し出でたに相違ない。それは此處には記録されてゐないが、ダニエルが王と何か會話した事は、四十七節の「王答へてダニエルに言ひけるは」云々に由つても明白である。又ダニエルが王の尊敬の念を彼自身から天の神に轉せしめんと努力した事は、王が、「誠に汝らの神は神等の神、王等の主なり」と言つた事に由つて察する事が出来る。斯くして王はダニエルに高き位を授け、バビロン全州の總督となし、又バビロンの智者等を統る者の首長となした。

斯くダニエルは彼の良心に神の要求に對して誠實であつた爲に、迅速且多分に酬いられた。嘗てバラムは神意に反し、異邦の君主の贈物を得んとして非常な失敗をした事がある。然しダニエルは是等の贈物を得ようとしたのではなかつたが、神に對して誠實であつた爲に豊に與へられたのである。彼が富み且榮えた事は、決して輕視すべき事ではなかつた。何故ならば長き期間に亘り、捕囚の境遇にある不幸な同胞を援助し得たからである。ダニエルは己の著しき勝利に驚くべき昇進に由つて當惑し或は狂喜するが如き事はなかつた。先づ彼は王の夢に關して共に憂慮した三人の伴侶の事を思ひ出した。而して彼等も祈禱に於て彼を援けたのであるから、彼の受けた名譽をも分配し度いと思つた。即ちダニエルは彼等も推薦してバビロンの國務に與らしめ、自らは王の宮に坐した。王の宮には會議の開かれる所て、重大な事件が其處で評議せられたのである。要するにダニエルは王の輔弼者の首長となつたのである。

第三章 國家と宗教

金像の建立

「茲にネブカデネザル王一箇の金の像を造れり。その高は六十キユビト、その横の廣は六キユビトなりき。即ちこれをバビロン州のドラの平野に立てたり。」

此像は前章に録されたる王の夢と何等かの關係があるに相違ない。アツシアアの年代表に由れば、此像は前章の事件より二十三年後に建立せられたものである。前章の巨像は頭が純金でバビロン帝國を表徴して居り、其次に順次劣りたる銀、銅、鐵の國々が起る筈であつた。ネブカデネザル王はバビロンが金に由つて表徴せられた事に就ては、無論異議はなかつた筈である。然し他の國によつて顛覆せられると云ふ事は、餘り愉快な事ではなかつたであらう。故に只像の頭を純金にするばかりでなく、全身純金の像を造つたのであつた。是は頭の金が全身に及び、換言すれば彼の國は他の國に由つて顛覆せられる事なく永遠に至らん事を希望したものであつた。そして最低に見積つても九十呎と云ふ高さは、多分像丈の高さではなく、臺も加つてゐたのであらう。又像そのものも内部まで純金で充實して居つた譯ではなく、比較的薄い金の板金ではつてあつたのかも知れない。さうすれば外觀の美を傷ける事なしに無駄の費用を節する事が出来る譯なのである。



年青三るとし絶拒を拜禮が之と立建の像金

金像の除幕式

「而してネブカデネザル王は、州牧、將軍、方伯、刑官、庫官、法官、士師および州郡の諸有司を召集め、そのネブカデネザル王の立てたる像の告成禮に臨ましめんせり。是においてその州牧、將軍、方伯、刑官、庫官、法官、士師および州郡の諸有司等は、ネブカデネザル王の立たる像の告成禮に臨み、そのネブカデネザル王の立たる像の前に立てり。時に傳令者大聲に呼はりて言ふ。諸民、諸族、諸音よ、汝らは斯く命ぜらる。汝ら、喇叭、簫、琵琶、琴、瑟、箏、篳篥などの諸の樂器の音を聞く時は俯伏し、ネブカデネザル王の立て給へる金像を拜すべし。凡て俯伏して拜せざる者は、即時に火の燃ゆる爐の中に投込まるべし。是をもて諸民ら、喇叭、簫、琵琶、琴、瑟などの諸の樂器の音を聞かや、直に、諸民、諸族、諸音みな俯伏し、ネブカデネザル王の立てたる金像を拜したり。」

此の像の告成禮は實に盛大に舉行せられ、バビロン全州の長官は悉く臨席してゐた。「この多事なる日に暗黒の權力は著しき勝利を得てゐるやうに思はれた。金像の禮拜は、バビロンの國教として認められてゐる。既に偶像教と永遠に關係を保つ可能性があつた。斯くして惡魔はイスラエル人がバビロンに捕囚となつて居る事に由り、凡ての異教國民をも祝福せんとする神の計畫を敗らんを希望した。」(The Story of Prophets and Kings 五〇六頁) やがて禮拜は樂器の合圖でなされた。然るに是に與らない者は何人でも火の燃ゆる爐の中に投げ込まれる筈であつた。

カデネザルよ、この事においては我ら汝に答ふるに及ばず。もし善らんには、王よ、我らの事ふる我らの神我らに救ふの能あり、彼その火の燃ゆる爐の中ミ汝の手の中より我らを救ひいださん。假令しからざるも王よ知り給へ、我らは汝の神々に事へず、また汝の立てたる金像を拜せじ。

王の寛大な處置は、シヤデラク、メシヤク、及びアベデネゴに今一度金像を拜する機會を與へた事に由つて示されてゐる。勿論彼等は命令を充分了解してゐたのであるから知らなかつたとは言ひ得ないのである。彼等は王の意志をよく知つてゐたのであるから、彼等が服従しなかつたのは故意に服従しなかつたので、充分考慮した結果王命に服する事を拒否したのである。故に大抵の王ならばそれ丈で彼等の運命を定めるのであるが、然しネアカデネザルは、若し彼等が二回目に王命に服するならば、最初の罪を默許すると言つた。然るにヘアルの三青年は王にその必要な事を説き、「この事に於ては我ら汝に答ふるに及ばず」と言つた。即ち再び金像を拜する機會が與へられても、我等の決心はついてゐるのであるから、猶豫をして頂かなくても、今直ちにお答へする事が出来る。而して我等の答へは、我らは汝の神々に事へず、また汝の立てたる金像を拜せじ、若し我らの神我らを救ひ給へばよし、若し然ざるも可なり、我らは神意を知るが故に絶対にそれに服従するのであると言つた。實に彼等の回答は正直で斷定的のものであつた。けれどもその態度は謙遜で言葉も懇懇であつた。

奇蹟的救護

「是においてネアカデネザル怒氣を充し、シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴにむかひてその面の容を變へ即ち爐中常に熱くするよりも七倍熱くせよと命じ、またその軍勢の中の力強き人々を喚び、シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを縛りてこれを火の燃ゆる爐の中に投込めと命じたり。是をもて此人々は、その袴、羽織、外におよびその他の服装を着たるまゝ、にて縛られて、火の燃ゆる爐の中に投込まれたりしが、王の命甚だ急にして爐は甚だしく熱しむれば、彼のシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴを引抱へゆる者等は、その火焰に焼き殺されたり。また此シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの三人は縛られたるまゝ、にて燃ゆる爐の中に落ちいりぬ。時にネアカデネザル王驚きて急忙たちあがり大臣等に言ふ、我等は三人を縛りて火の中に投入れざりしや、彼ら王にこたへて言ふ、王よ然りと。王また應へて言ふ、今我見るに四人の者縲紳解て火の中に歩みをり、凡て何の害をも受ず、またその第四の者の容は神の子のごとしと。」

ネアカデネザル王は専制君主として陥り易い缺點或は過誤が一つもなかつた譯ではない。彼は絶大な權力に陶醉して、王命に違反する者を許す事が出来なかつたのである。如何なる理由にもあれ、彼の命令に背く者があつた場合には、彼は墮落したる我々人間が同じやうな場合に陥り勝ちな弱點を暴露して非常に立腹した。彼は世界の支配者であつたけれども、其心を治める事はより困難であつたと見え、その顔の容を變へて怒つた。即ち彼は泰然として威嚴を備へた君主でなければならなかつたにも拘らず、怒氣を制し能はざる奴隸の如く行動した。そこで間もなく爐は常よりも七倍熱くせられた。換言すれば熱くなし得る丈熱くしたのである。然し王の此行爲は

餘りに餘計な心配であつた。何故ならば、爐の中に投ぜられた者は普通の火でも死ぬるので、只熱ければ熱い丈けそれだけ早く死ぬのみで、王にとつては何等の利益にもならなかつたのである。が然しヘブルの三青年がそれから救はれた事は、神とその眞理にまつては非常な大勝利であつた。何故ならば熱が熱ければ熱い丈け、それ丈けその中から救はれた事は大なる奇蹟であるからである。凡ての出来事は直接神の能力を示す爲であつたやうに思はれる。彼等は衣服を着たま、縛られて火の燃ゆる爐の眞中に投ぜられたけれども、何等の危害を蒙らず、火の臭氣すら付かないで出て来たのである。然し一方、彼等を爐に投ずる爲に軍勢の中の力強い人々が選ばれたが、其人達は火に近づくや否や焼き殺された。此故に火が超自然的の力によつて支配せられてゐた事は、彼等の縛られた網に焼け落ちても彼等は自由に火中を歩み、その衣服は少しも焦けなかつた云ふのみでも明白である。彼等は自由になると同時に火の中から出て来ないでその中に留つてゐた。何故ならば第一に、王が其處に投げこんだのであるから、王が彼等呼び出す迄は其處に止まつてゐる事が當然である事考へたのである。第二に、「第四の者」即ち救主自らが彼等と共に在し給つたからである。而して救主と共にある時に、彼等は火の中であつても、贅を極めた宮殿に居るのと同じく歡喜に満ちてゐる事が出来たのである。されば吾人も如何なる試練、如何なる迫害、如何なる困難の時にも「第四の者」と共にゐるものである。斯くする時に凡てのものに勝ち得て餘りがあるのである。王曰く、「第四の者の容は神の子のごとし」也。此處に最も注意すべき事實がある。それは異教國の王が、約六世紀の後に現れる彼を、世界の贖主イエス・キリストとして、忽ち爐の火焰の中に認めたと云ふ事實である。ネブカデネザルが王等の中の最も大なる



む歩な中のそてしと若自容従年青三るたれらぞ投に中の爐

王の前に立ち、且その前には彼の威光はなきに均しい事を知るに至つたのは、ヘブルの三青年の正しき歩の證に、彼等の忠實なる宣傳によつたものに相違ない。

是等ヘブルの三青年が火爐より救ひ出された事は王の傲慢なる行爲に狂怒に對する何たる嚴しい譴責であらう。地上に於ける何者よりも高き權威が、偶像禮拜を斷乎して拒否した者を擁護し、王の嚴命したる禮拜を侮辱したのである。如何なる神も未だ嘗て斯る驚くべき救助をなした神はない。否、彼等はそれをなし得ないのである。

服従の勝利

「ネブカデネザルすなはちその火の燃ゆる爐の口に進みよりて呼びて言ふ、至高神の僕シヤデラク、メシヤク、アベデネゴよ、汝ら出で來れ。是に於てシヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴその火の中より出で來りしかば、州牧、將軍、方伯および王の大臣ら集りて此人々を見たり、此人々の身は火もこれを害する力なかりき。またその頭の髪は燥ず、その衣裳は傷ねず、火の臭氣もこれに付さりき。ネブカデネザルすなはち宣て曰く、シヤデラク、メシヤク、アベデネゴの神は讃むべき哉、彼その使者を遣りて己を頼む僕を救へり。また彼らは自己の神の外には何の神にも事へず、また拜せざらんして王の命をも用ひず、自己の身をも捨てんさせり。然ば我命を下す、諸民、諸族、諸音の中凡て、シヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴの神を罵る者あらば、その身は切裂かれ、その家は厠にせられん。其は是のごとくに救を施す神他にあらざればなり。かくて王またシヤ

ヤデラク、メシヤクおよびアベデネゴの位をすゝめてバビロン州にをらしむ。

王の招聲に應じて三人は爐の中から出で來つた。而して州牧、將軍、方伯及び大臣等、即ちヘブルの青年を論奏した高官達、又はその譚奏に賛意を表した人々は、彼等の故により燃ゆる火爐の中に投ぜられた三青年の此驚くべき救助の確實な證據を見る爲に集り寄つて來た。そして今や巨像の禮拜は忘れられ、全會衆の興味はこの不思議なる三人の上に集中せられた。そして彼等の心思想は此驚くべき出來事を以て満されてしまつたのである。ゆるに彼等が各々その故郷に歸つた時に、此出來事は全バビロンに普く傳へられた事であらう。之は神が人の怒を代へて自己を崇めしめ給うた著しき一例である。

斯る大事件を経てのちネブカデネザル王は、シヤデラク、メシヤク及びアベデネゴの神を崇め、彼等の神を語るべからずと嚴命した。カルデヤ人は多分ユダヤ人の神を嘗つてゐたものであらう。其時代には、各國も各々の神或は神々があつた。即ち聖書に「多くの神おほくの主あるが如し」を録されてゐる。また或國が他の國を敗つた場合、敗北した國の神は弱くて戰勝國の手から其國を救ひ得ないものと思はれてゐた。つまりユダヤ人はバビロン人によつて征服された故に、後者はユダヤ人の神を侮蔑したに相違ない。然し王は今や之を嚴禁した。何故なれば彼がユダヤを征服し得たのはユダヤ人の罪の爲であつて、神の力の足らなかつた爲でない事を知つたからである。之は各國の神々に比較して、ユダヤ人の神が如何に卓越してゐるかを顯著にしたものである。神は人間が正義の高き標準に従ふ事を豫期し、之に反する者を決して不問に附し給はない事を證するものである。即ち神は之を犯したる者を罰し、それに

従つた者に祝福を與へ給うたのである。蓋し是等のユダヤ人が主義に固く立たなかつたならば、眞の神の名は斯くバビロンに於て崇められなかつたであらう。彼に忠實に仕ふる者に神の與へ給ふ名譽は實に大なるものである。

王が天の眞の神が凡の神々に優る神である事を公然承認した事は正しい事であつた。然し彼は神の政府の建てられてゐる根本的原則は殆ど之を知らなかつた。神は決して強制的に人を神に従はしめ給はない。故にバビロンの王は斯る命令を布告する權利はないのである。彼が死の宣告を以て眞の神を拜せしめんとした事は、金の像の禮拜を人々に強要したのと同様に神の聖旨に背く事である。政府は國民の安寧の爲に神の制定なし給ひしもので、宗教的奉仕を強制する爲のものではない。(羅一三ノ一七参照)

第四章 ネブカデネザル王の改宗

ネブカデネザル王の詔勅

「ネブカデネザル王全世界に住める諸民、諸族、諸音に諭す。願くは大なる平安汝らにあれ。至高神我にむかひて徴證ミ奇蹟を行へり。我これを知らしむることを善ミ思ふ。嗚呼大なるかなその徴證、嗚呼盛なるかなその奇蹟、その國は永遠の國、その權は世々限りなし。」

本章は『記録に残れる最も古い正規の詔勅で始つてゐる』ミクラーク博士は曰つてゐる。之はネブカデネザル王の筆になれるものにして、正規の形式で發布せられたものである。彼は只に少数の人々でなく、全世界に住む諸民、諸族、諸音に、神が彼になし給へる驚くべき事件を知らしめ度イミ思つた。人は神が與へ給うた恩恵ミ祝福ミは何時でもこれを喜んで發表するものであるが、我等は又神が懲めの爲に與へ給うた懲罰をも、これを喜んで語らなければならぬ。此點に於てネブカデネザルは我等に好範例を残してゐる。以下本章の記録に由つてそれを學ぶ事が出来る。彼は己の傲慢なりし事を正直に告白し、神が彼を懲懲する爲に取り給うた方法をも發表してゐる。彼は眞の悔改めミ謙遜な精神より自ら進んで神の權威を讚美し、且つその名を尊ぶ事を示すは善事であると思つた。又國に關しては、最早やバビロンが永久不滅であることは主張せず、絶對的に神に服従し、神の國のみが永遠の國でその權は世々限りなく續く事を承認したのであつた。

く續く事を承認したのであつた。

ネブカデネザル王の第二の夢

「我ネブカデネザルわが家に安然に居り、わが宮に榮え居れり。我一の夢を見てこれがために懼れ、即ち床にありてその事を想ひめぐらし、その我腦中の異象のために心をなやませり。是において我命を下し、バビロン智者をこゝろく我前に召よせしめて、その夢の解明を我にしめさせんミ爲たれば、すなはち博士、法術士カルデヤ人、卜筮師等きたりしに因て、我その夢を彼らに語りけるに、彼らはその解明を我にしめすことを得ざりき。かくて後ダニエルわが前に來れり。彼の名は吾神の名にしたがひてベルテシヤザルミ稱へられ、その衷には聖神の靈やされり。我その夢を彼の前に語りて曰ひけらく、博士の長ベルテシヤザルよ、我しる、汝の衷には聖神の靈やされば、如何なる秘密も汝には難き事なし。我が夢に見たるところの事等を聞き、その解明を我に告げよ。我が床にありて見たるわが腦中の異象は是の如し、我觀しに地の當中に一の樹ありてその丈高かりしが、その樹長じて強くなり、天に達するほどの高きなりて地の極までも見えたり、その葉は美しく、その果は饒にして一切の者その中より食を得、また野の獸その蔭に臥し、空の鳥その枝に棲み、凡て血氣ある者みな是によりて身を養ふ。我床にありて得たる腦中の異象の中に、一箇の警寤者、一箇の聖者の天よりくだるを見たりしが、彼聲高く呼はりて斯くいへり。此樹を伐たふし、その枝を斫はなし、その葉を搖おこし、その果

を打散らし、獸をしてその下より逃げ走らせ、鳥をしてその枝を飛びさらしめよ。但しその根の上の斬株を地に遺しおき、鐵ミ銅の索をかけて之を野の草の中にあらしめよ。是は天よりくだる露に濡れ、また地の草の中にて獸ミその分を同じうせん。又その心は變りて人間の心のごましくならず、獸の心を棄けて七の時を經ん。この事は警寤者等の命により、この事は聖者等の言による、これ至高者人間の國を治めて自己の意のまゝにこれを人に與へ、また人の中の最も賤しき者をその上に立て給ふといふ事を一切の者に知らしめんがためなり。我ネブカデネザル王この夢を見たり、ベルテシヤザルよ、汝その解明を我に述べよ。我國の智者は孰も皆その解明を我に示すこを得ざりしが、汝は之を能せん。其は汝の衷には聖神の靈やさればなりと。

此處に叙述せられてゐる事件の中重要な部分にのみ注意を促す事としよう。

第一、ネブカデネザルはその宮殿に於て安然であつた。彼は凡ての事業に成功して、シリヤ、フェニキヤ、ユダヤエジプト及びアラビヤを征服した。彼をして斯く傲慢ならしめたものは恐らく是等の大征服であつたであらう。而して彼が最も平和であると思惟した時、即ちそんな事件の起ると思はれない彼の得意の頂上に達した此時に當つて、神は彼に恐怖の念を與へ給うた。

第二、ネブカデネザルの如き王が何うして恐怖の念に襲はれたのであらうか？ 彼は青年時代から軍人であつて、屢々屍山血河を越え、強敵ミ相對峙した時でも、決して顔色を蒼白にしたり或は戰慄した事はなかつた。然るに今や何が彼を恐れしめたのであらうか？ 敵の包圍攻撃を受けてゐるのでもない。戰雲が漲つてゐる譯でもない。即ち彼

が恐怖の念に襲はれる何等の理由のない時であるが故に、神はそれをなす爲に思ひもよらない夢を選び給うたのである。彼の思想、彼の腦中の異象は、如何なるものも教へる事の出来ない處の信賴と謙遜の善き教訓を與へたのである。他人を恐怖せしめ、何人に由つても恐怖を感じなかつた彼は、自ら恐怖を抱くに至つた。これ神の選り給うた方法である。

第三、魔術士等が彼等の假面を剥がれた事は既に第二章に記録されてあるが、此處に彼等がより以上の僞瞞を暴露した事が録されてある。即ち彼等は夢さへ示されるならば、その解明を申し上げんと豪語した。幸ひ第二章に記録されてある事件の時には、ネブカデネザル王は夢を憶えて居らなかつたからよかつたが、今度は明かに王の記憶に存して居たので、彼等は解明が出来る筈であるにも拘らずそれが出来ないで、再び神の豫言者を煩はした。

第四、ネブカデネザルの治世の驚く可き状態が地の當中にある一本の樹によつて表徴せられてゐる。即ちネブカデネザルの統治したバビロンは、殆どその當時知られたる世界の中心であつた。樹は天にまで達し、且その葉は美しくその外觀の榮光は實に偉大なるものであつた。然れども多の國々の如くに其が全部ではなかつた。その内部にも亦多くの美點があつた。即ちその果は饒にして、一切の者がその中より食を得、又野の獸はその蔭に臥し、空の鳥はその枝に棲み、凡て肉なる者は之によつてその身を養つた。ネブカデネザルの政治の許に國民が完全に保護せられ、且バビロンが非常に繁榮した事實をこれ以上明瞭に力強く表徴する事は出来ないであらう。

第五、神は刑罰に矜恤を雜へ給ふ。此樹を伐り倒せとの命令が出た時に根の上の斬株は地に遺し置き、之に鐵と

銅の索をかけて保護せよと命ぜられた。之は腐朽して仕舞はないで、再び發芽して大なる樹となり得る根元を残さんが爲であつた。然し將に來らんとする悪人の伐り倒される日には斯る望は一つも残されないのである。彼等の刑罰には少しの矜恤も雜へられないので、根も枝も悉く滅されるのである。

第六、第十六節に、「七の時を經ん」と録してある。而して之は事實の陳述である事が明かであるから、此時は實際の時である。この期間は幾年間であつたらうか。之はネブカデネザルが逐はれて野の獸と共に居た期間が幾年であつたかを確める事によつて知る事が出来るが、それに就いて史家ジョセフスは七年間であつたと云つてゐる。故に「一時」は一年を意味するのである。

第七、聖者即ち天使等は人間の事に深い興味を持つてゐる事が判る。即ち彼等はネブカデネザルに對するこの處置を請求した者として現はされてゐる。彼等は人間の見る事の出来ない人の心にある傲慢心が如何に醜いものであるかを見る事が出来たのである。故に彼等は神が攝理によつてその缺陷を矯正せんとし給ふ此命令に對して賛意を表したのであつた。人間は自己の運命を開拓する設計技師でない事を知らなければならぬと共に、人間の國を治め給ふ者に絶対の信頼を置かなければならぬ。王として如何に大手腕を振つてゐても、彼はそれが爲に傲慢になつてはならなかつた。何故なれば若し神が彼をその位に置き給はなかつたならば、彼はこの名譽ある地位に達する事が出来ないからである。

第八、ネブカデネザルは眞の神の默示が、異教の神々の宣託に比して天地の相違である事を認めてゐた。故に彼は



ネブカデネザル野に逐はれて野獸と共に居す

ダニエルにその秘密を解かん事を求めて、「汝は之を能せん、其は汝の衷には聖神の靈やさればなり、」と曰つた。

王に對する警告の使命

「その時ダニエル又の名はベルテシャザルといふ者暫時の間驚き居り、心に深く懼れたれば、王これに告げて言へり、ベルテシャザルよ、汝この夢こそその解明のために懼るゝに及ばず。ベルテシャザル即ち答へて言ひけらく、我主よ、願くはこの夢汝を惡む者の上にかゝらん事を、願くはこの解明汝の敵にのぞまんことを。汝が見たまひし樹、すなはちその長じて強くなり、天に達するほどの高きなりて、地の極までも見えたり、その葉は美しく、その果は饒にして、一切の者その中より食を得、またその下に野の獸臥し、その枝に空の鳥棲みたる者、王よ、是はすなはち汝なり、汝は長じて強くなり、汝の勢は盛にして天に及び、汝の權は地の極にまでおよべり。王また一箇の警寤者、一箇の聖者の天より下りて斯く言ふを見たまへり。曰く、この樹を伐たふして之をそこなへ、但しその根の上の斬株を地に遺しおき、鐵と銅の索をかけて之を野の草の中にあらしめよ。是は天よりくだる露に濡れ、野の獸と其の分を同うして七の時を経ん。王よ、その解明は是のごとし。是すなはち至高者の命にして、王我主に臨まんとする者なり。即ち汝は逐はれて世の人と離れ、野の獸と、もに居り、牛のごとくに草を食ひ、天よりくだる露に濡れん。是のごとくにして七の時を経て汝つひに知らん。至高者人間の國を治めて自己の意のまゝに之を人に與へたまふと。又彼らその樹の根の上に斬株を遺しおけと言

ひたれば、汝の國は汝が天は主たりと知るにいたる時まで汝を離れん。然らば王よ、吾諫を容れ、義をおこなひて罪を離れ、貧者を憐れみて惡を離れよ、然らば汝の平安あるひは長く續かん」と。

ダニエルが暫時の間驚き躊躇してゐたのは、夢を解明す事が出来なかつたからではなく、其は王に語り難い事であつたからである。ダニエルは王の恩寵を蒙つてゐたし、我等の知り得る範圍に於て彼は王より厚遇のみを受けてゐた。故に此夢に示されたやうな刑罰が彼に來る事を知らしめるのは情に於て忍びなかつたのである。彼は何んと云つて知らしめたが一番よいか判断に苦しんでゐたのである。茲に於て王は何か凶事のある事を豫想したもの、如く、「汝この夢とその解明のために懼るゝにおよばず」と、恰も自分に對して何んな關係があつても躊躇する勿れと曰つたやうである。斯る保證を與へられた時、初めてダニエルは口を開いた。斯の如き用意周到な言が又とあらうか？曰く、「我主よ、願くはこの夢汝を惡む者の上にかゝらん事を、願くはこの解明汝の敵にのぞまんことを」と、結局この夢に示されてゐる不幸が王に來ないで、王の敵に來らん事を望む云つたのである。

ダニエルがその夢の王に關してゐる事を傳へるや否や、王は曩にその夢を仔細に陳述した事が自身の運命を宣告して居つたのである事を明かに知つた。茲に錄してある解明は明瞭であるから説明を要しないと思ふ。この刑罰は一定の條件の許に避け得る筈のもので、其等は王に、天が治めてゐる事を教へた。即ち此處の天は天を掌る神を意味するのである。故にダニエルは此機會を利用して來らんとする刑罰を逃れしめん爲に王を諫めた。尤も彼は荒々しく罪を責めて王を罵倒しなかつた。彼は、「然らば王よ、吾諫を容れ……云々」と懇懇に勸めた。その如く使徒保羅

も人々に、我が勸の言を容んことを請ふと曰つてゐる。(ヘブライ書一三ノ二二)。若し王が義をおこなひて罪を離れ、貧者を憐れみて惡を離れるならば、汝の平安あるひは長、續かん、英譯聖書傍註によれば、「汝の過醫されん」と言はれてゐる。彼が之等の諫に服するならば、この時に於てさへ來らんとする神の刑罰を避け得たのである。

使 命 の 拒 否

「この事みなネブカデネザル王に臨めり。十二箇月を経て後、王バビロンの王宮の上に歩みをり、王すなはち語りて言ふ。この大なるバビロンは我が大なる力をもて建て京城ミなし、之をもてわが威光を輝かす者ならずや。その言なほ王の口にある中に天より聲降りて言ふ、ネブカデネザル王よ、汝に告ぐ、汝は國の位を失はん。汝は逐はれて世の人を離れ、野の獸と共に居り、牛のごみに草を食はん。斯のごとくにして七の時を経て汝つひに知らん。至高者人間の國を治めて、己れの意のままにこれを人に與へたまふと。その時直にこの事ネブカデネザルに臨み、彼は逐はれて世の人に離れ、牛のごみに草を食ひてその身は天よりくだる露に濡れ、終にその髪の毛は鷲の羽のごとくになり、その爪は鳥の爪のごとくになりぬ。」

ネブカデネザルは神の與へ給うた警告を省みなかつた。が、神は十二ヶ月の間これを忍び給うた。彼は益々傲慢心を高め、次に起るべき國に對して嫉妬心を懷き、今まで彼の政治は比較的正しく且つ矜恤あるものであつたが、壓制政治に變り、遂に其は神の敵し能はざる處にまで達した。

或る日ネブカデネザルは王宮の上を歩み、世界の不思議中の不思議であるカルチャ人の誇なる大なるバビロンを眺めた。その時彼は、彼のカミ権威の源を忘れ、「此大なるバビロンは我が大なる力を以て建て、京城をなし、之をもてわが威光を輝かす者ならずや、」と大言壯語した。現代に至りてバビロンの荒廢中より發掘したるネブカデネザルの碑文は、この事實を裏書きし、聖書記事の眞實なる事を確證してゐる。「バビロンの發掘されたる遺跡は、到處にネブカデネザルの偉大なりし事を表象してゐる。」(Wonders of the Past 第一卷三七七頁)

一つの碑文に、「我は民衆が美觀に驚愕する程美しく門を裝飾した」とある。又其他の者には、「斯我はバビロンの防備を強固に完成した。望むらくは永遠に持續せん事を」とある。(Rawlinson, "Fourth Monarchy," Appendix A.) 斯の如く王は自己の偉大なる事を自慢した。然れども遂に彼の天刑の時は來つた。而して天よりの聲は刑罰の豫報をなし、天の攝理は直ちにそれを實行に附し、彼の理性を奪ひ去つた。斯の如く、一度神がその手を觸れて理性を奪ひ給うた時に、榮光燦爛たる大都市も最早や彼の心を樂ましめなかつたのであつた。而して彼は人の住家を離れ、野の獸に寢食を共にするに至つたのである。

感 謝 の 歌

「斯てその日の満ちたる後、我ネブカデネザル目をあけて天を望みしにわが分別性我に歸りたれば、われ至高者に感謝し、その永遠に生る者を讃めかつ崇めたり、彼の御宇は永遠の御宇、彼の國は世々かぎりなし。地上の

居民は凡て無き者のごとし、天の衆群にも地の居民にも彼はその意のまゝに事をなしたまふ。誰も彼の手をおさへて、汝なんぞ然するやと言ふこゝを得る者なし。この時わが分別性かく我に歸りたりしが、わが國の榮光につきては、また私の尊嚴を光耀我にかへり、且また大臣、牧伯等我に請求めて我ふた、び國の祚を踐み、前よりも著しく威光を増したり。是において我ネブカデネザル、今は天の王を讃頌へかつ崇む。彼の作爲は凡て眞實彼の道は正義、自ら高ぶる者は彼能くこれを卑くしたまふ。

七年の後に神は膺懲の鞭をゆるめ給うたので、王の理性は再び元へ還つた。而して彼は先づ第一に至高者に感謝した。彼の名譽を聰明は再び彼に歸り、更に王位に即き、大臣及び牧伯等は彼に従つた。第二十六節の約束は、彼は必ず復辟するに云ふのであつた。彼が狂つてゐた間は、其子エビル・メロダクが彼に代つて統治したに云はれてゐる。ダニエルの夢の解明は無論宮中によく知れ渡つてゐたであらう。従つてその事は屢々彼等の話題に上つた事であらう。故にネブカデネザルの復辟は彼等の豫期した事で、興味を以て之を眺めてゐたであらう。彼が王宮に於て行届いた看護を受けず、野原に於て孤獨な生活をするに至つた顛末については録されてゐないが、其は多分彼は巧みに宮殿より逃走し、遂に發見せられなかつたものであらう。

膺懲は其目的を果し、彼は謙遜と矜恤の教訓を學んだ。君の君、主の主なる者の譴責によつて、遂にネブカデネザルは凡ての君主が學ばなければならぬ教訓、即ち眞に偉大なる事は眞の善行を積む事である事を學んだ。而して彼は復辟後もそれを忘れなかつた。即ち彼は、「至高者人間の國を治めて己れの意のまゝにこれを人に與へたまふ」事

を認め、己れの高慢なりし事、天の神に對する感謝と讚美の詔勅をバビロン全州に布告した。
 之はネブカデネザル王に關する最後の聖書記事である。此勅詔の布告せられたのは英語欽定譯聖書傍註によれば、
 ネブカデネザルの死ぬ一年前、即ち紀元前五百六十三年である。彼は再び偶像教に墮落するこゝなく、イスラエルの
 神を信じて死んだもの、やうである。

斯くしてこの偉人の歴史は終つた。尊い王位にあつた彼は多くの弱點をもつてゐたものにも拘らず、神は彼の心の裡
 に潜在した僅の純潔と誠實にして正直なる性質を認めて、神の名の榮の爲に用ゐ給うたものであらう。故に神が彼に
 なし給うた驚く可き事は、凡て彼が偶像教より離れしめ、且つ眞の神の奉仕に與らしめんとの御計畫であつたもの、
 如く思はれる。我等は最初に各時代の人々に有益なる教訓を有する巨像の夢を學んだ。第二にシヤデラク、メシヤク
 及びアベデネゴ等の金像禮拜に關する事件により、彼は再び眞の神の至上權を認むるに至つた。最後に本章に録され
 たる驚く可き事件により、神がネブカデネザル王に己を全的に承認せしめんとした絶えざる神の努力を學ぶ事が出来
 る。筆者は、豫言に現はれたる第一王國、即ち金の頭の最も著名なる王が、榮光の永遠に消えざる國に入らん事を切
 に望むものである。

第五章 バビロンの滅亡

滅亡前夜の美酒宴

「ベルシャザル王その大臣一千人のために酒宴を設け、その一千人の者の前に酒を飲みたりしが、」
 本章に於て最も興味ある主題は、バビロン帝國終焉の光景、即ち第二章に於ける巨像の金より銀に、第七章のダニ
 エルの異象に於ける獅子より熊に變遷した事實の記録である。この酒宴は或偶像の爲に毎年行はれた定期の祭典であ
 つたに一般に信じられてゐる。夫れ故に當時バビロンを包圍攻撃してゐたクロスは、その祭典の接近した事を探知し
 バビロン總攻撃の日を何時に定めてよいかを知つたのである。聖書には、ベルシャザル王その大臣一千人のために酒
 宴を設け、その一千人の者の前に酒を飲んだと録してある。然しある譯には、「一千人の中彼が一番多く酒を飲ん
 だ」と録してある。是は彼に如何なる特長があつたにもせよ、兎に角彼が美酒豪であつた事を證するものである。
 古代の歴史にベルシャザルの名が出てゐないに云ふ理由を以て、高等批評家はダニエルの記録が事實でないに主
 張してゐる。然し第二章に録されたるクロスの圓柱形土器以外に、ナボナデウスの碑文には、彼がその長男ベルシ
 ヤザルのためシンミいふ月の神に祈つた祈禱文が録してある。又此外にもベルシャザルの事に關して録された碑文が
 残つてゐる。斯の如く他の多くの場合と等しく、近世に於ける考古學の發見は、聖書に對する高等批評家の攻撃を力

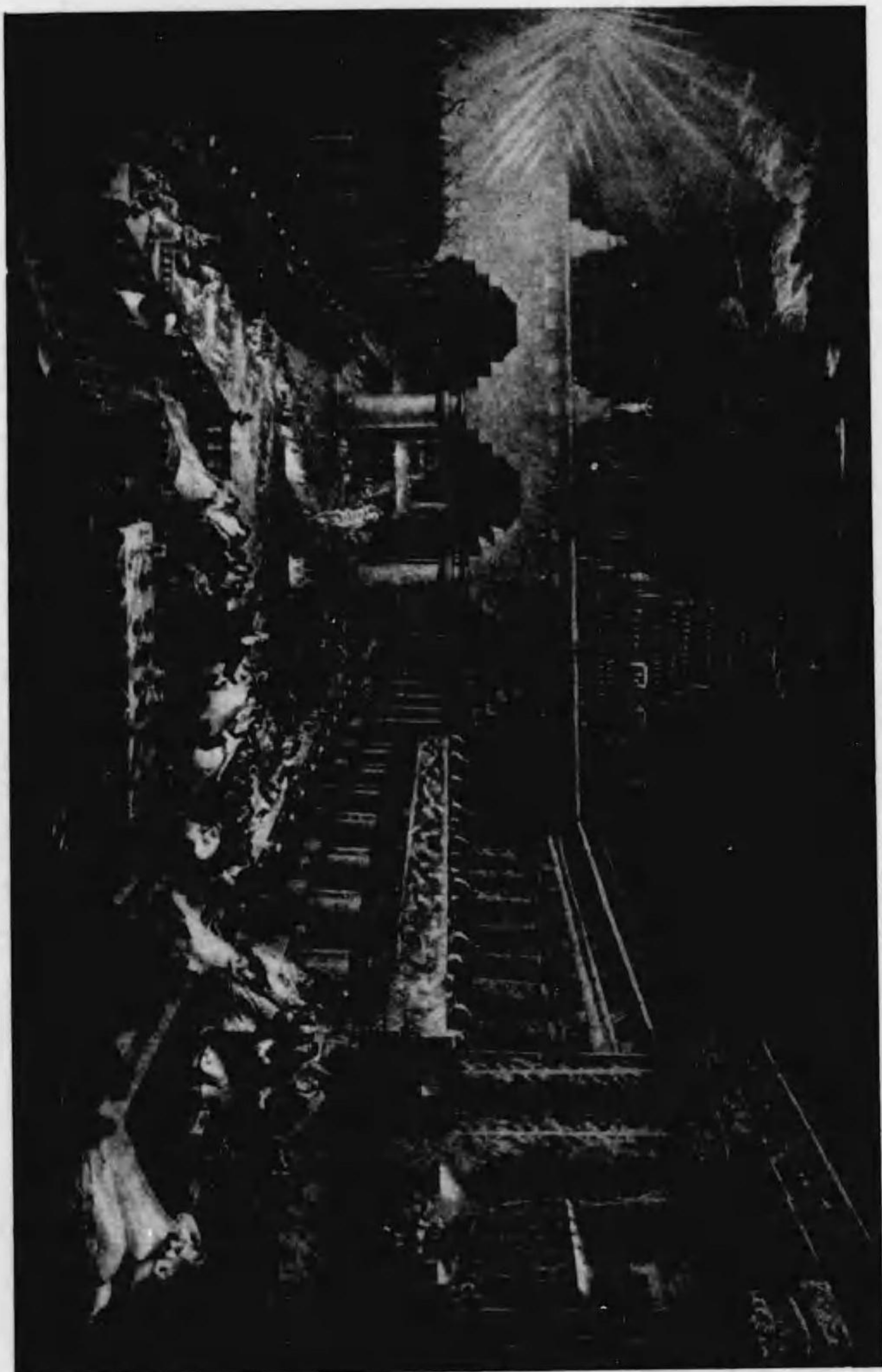
強く反駁してゐる。即ち聖書は歴史的に眞實であるばかりでなく、救ひ永生に關する誤なき案内書である。

「酒の進むにいたりてベルシヤザルは、その父ネブカデネザルがエルサレムの宮より取り來りし金銀の器を携へいたれ命ぜり。是王ミその大臣および王の妻妾等みな之をもて酒を飲まんてなりき。是をもてそのエルサレムなる神の宮の内院より取りたりし金の器を携へたりければ、王ミその大臣および王の妻妾等これをもて飲めり。すなはち彼らは酒をのみて、金、銀、銅、鐵、木石などの神を讚た、へたりしが、」

此祭典がユダヤに對する過去の戰勝ニ何等かの關係があつた事は、酒宴酣なりし時王がエルサレムより奪ひ來りし聖器を携へ來れ命じた事によつて推測することが出来る。それにもミく、聖き事に對する正しい觀念を持つて居なかつた爲に、戰利品（聖器）を以てその戰捷を記念したものらしい。然し如何なる王も彼の如き不敬虔なる行爲を敢てしたものはないであらう。而して彼等は眞の神の爲に聖別せられたる器を以て酒を飲みながら、金、銀、銅、鐵、木石などの神を讚た、へた。第三章二十九節に於て説明した如く、彼等の神々がユダヤ人の神に優つてゐる事を祝しユダヤ人の神の器を以て彼等の偶像の爲に祝盃を上げたのであらう。

壁 上 の 文 字

「その時に人の手の指あらはれて、燭臺ニ相對する王の宮の粉壁に物書けり、王その物書ける手の末を見たり。是において王の愉快なる顔色は變り、その心は思ひなやみて安からず、腿の關節はゆるみ、膝はあひ撃てり。」



これに注意に字文の間壁部上方左つ向 聖書大のルザヤル

王すなはち大聲に呼はりて、法術士、カルデヤ人、卜筮師等を召きたらしめ、而して王バビロンの智者等に告て言ふ、この文字を読み、その解明を我に示す者には、紫の衣を衣せ、頸に金の鏈をかけさせて之を國の第三の牧伯みなさんご。王の智者等は皆きたりしかども、その文字を読む事能はず、またその解明を王にしめすと能はざりければ、ベルジャザル王おほいに思ひなやみて其顔色を失へり。その大臣等もまた驚き懼れたり。神は神等の不敬なる行爲を責むるに當り、超自然的な電光や耳を聳せんばかりの霹靂を用給はなかつた。然し人の手が靜かに現はれて、燭臺と相對する壁に不思議な文字を書き録した。茲に於て王は良心の苛責を受け、大に恐れられた。王はその文字を読む事が出来なかつたけれども、宮殿の壁に輝いてゐる文字は、平和と祝福の使命でない事は悟つた、而して王の恐怖に關する豫言者の陳述は、一つとして過言ではない。即ち王の顔色は變り、心は思ひなやみて安からず、又彼は痛を感じ、膝は相撃つ程ひどく戰慄へた。而して彼は倨傲と酒宴とを忘れ、又その威嚴をも省みず、大聲に法術士と卜筮師を呼び、壁に録された不思議な文字を解かん事を求めた。

豫言者ダニエル召出さる

「時に大后王と大臣等の言を聞きてその酒宴の室にいりきたり、大后すなはち陳て言ふ。願くは王長壽かれ、汝心に思ひなやむ勿れ、また顔色を失ふにおよばず、汝の國に聖神の靈のやされる一箇の人あり。汝の父の代に彼聰明了知および神の智慧のごとき智慧あるこゝを顯はせり。汝の父ネブカデネザル王すなはち汝の父の王、彼

を立て、博士、法術士、カルデヤ人、卜筮師等の長とせり。彼はダニエルといへる者なるが、王これにベルテシヤザルといふ名を與へたり。彼は心の殊勝たる者にて了知あり、知識ありて能く夢を解き、隠語を解き、難問を解くなり。然ばダニエルを召されよ、彼の解明を示さん。是においてダニエル召されて王の前に至りければ、王ダニエルに語りて言ふ、汝は吾父の王がユダより曳來りしユダの俘囚人なるそのダニエルなるか。我聞く、なんぢの衷には神の靈やこゝろをりて、汝は聰明了知および非凡の智慧ありと云ふ。われ智者、法術士等を吾前に召よせてこの文字を讀ましめ、その解明を我にしめさんと爲たれども、彼らはこの事の解明を我にしめすことを得ず、我聞に汝は能く物事の解明をなし、かつ難問を解くと云ふ、然ば汝もし能くこの文字を讀みその解明を我に示さば、汝に紫の衣を衣せ、金の索を汝の頸にかけさせて汝を此國の第三の牧伯となさん。茲に録された事實から綜合すれば、ダニエルが神の豫言者である事は何うした譯か宮中に於て忘れられてゐたやうである。多分は八章の一、二、及び二十七節に録されてゐる如く、國務の爲にエラム州のシュシヤンに出張してゐたが、此時にはベルシヤ軍に追撃せられて止むを得ずバビロンに歸つてゐたものであらう。超自然的の事柄に對して解明しを命じ得る人のある事を王に知らしめたのは、其父の治世にダニエルのなした驚く可き働をよく知つてゐたネブカデネザルの娘、即ち王の母君であつたもの之信じられてゐる。此處にネブカデネザルがベルシヤザルの父と呼ばれてゐるのは、その當時父の先祖を父と呼び、男子の子孫を子と呼んでゐた習慣に從つたもので、實の處ネブカデネザルは彼の祖父であつたのである。ダニエルが入り來つた時、王は彼に汝はユダヤ人の捕虜であるかと質した。

斯の如くして神は攝理の下に彼等が偶像の爲に祝盆を上げ、不敬虔なる行爲をなすつ、ありし時に、彼等の捕虜であつたダニエルを召し、彼等の罪惡に對する天刑を布告せしめ給ひしもの、如くである。そしてこの時ベルシヤザルがダニエルにバビロンに於て第三の位を與へん約束したが、それはさう云ふ譯であつたか云ふは彼の父ナボナデウスが第一で、自分が第二の位にあつたからである。

ダニエル壁上の文字を解明す

「ダニエル答へて王に言ひけるは、汝の賜物は汝みづからこれを取り、汝の饑物はこれを他の人に與へたまへ。然ながら我は王のためにその文字を讀み、その解明をこれに知らせ奉らん。王よ、至高神汝の父ネブカデネザルに、國運、權勢と、榮光と、尊貴を賜へり。彼に權勢を賜ひしによりて、諸民、諸族、諸音みな彼の前に慄き畏れたり。彼はその欲する者を殺し、その欲する者を活し、その欲する者を上げ、その欲する者を下し、なり。而して彼心に高ぶり、氣を剛愎にして驕りしかば、その國の位をすべりてその尊貴を失ひ、逐はれて世の人を離れ、その心は獸のごとくに成り、その住所は野馬の中にあり、牛のごとくに草を食ひてその身は天よりの露に濡れたり、是のごとくにして終に彼は、至高神の人間の國を治めてその意のまゝに人を立て給ふといふことをしるにいたれり。ベルシヤザルよ、汝は彼の子にしてこの事を盡く知るまいへども、猶その心を卑くせず、却て天の主にむかひて自ら高ぶり、その家の器皿を汝の前に持ち來らしめて、汝に汝の大臣、汝の妻妾等

それをもて酒を飲み、而して汝は見るこも、聞くこも、知るこもあらぬ金、銀、銅、鐵、木石の神を讚頌ふるこも爲し、汝の生命をその手に握り、汝の一切の道を主どりたまふ神を崇むるこもせず、是をもて彼の前よりこの手の末いできたりて、この文字を書けるなり。

ダニエルは先づ第一に法術士や卜筮師等と同じ動機に支配せられてゐるのでない事を發表し、「汝の餽物はこれを他の人に與へたまへ」言つた。即ち彼はこの文字を解明すのは、賜物や餽物を得んが爲でない事を充分了解してもらひ度く思つたのである。而して前章に録されたる王の祖父ネブカデネザルの經驗を語り、王が其願末を悉知してゐたにも拘らず尙ほ其心を卑くせず、却つて天の神に對して傲慢無禮を極め、遂には聖き器を潰すまでに活ける神を蔑視し、人の造りたる、見る事も、聞く事も、何事も知る事の出来ない偶像を讚頌して、王の生命及び一切を主宰り給ふ神を畏敬しなかつたので、是をもつて彼等の大膽なる冒瀆に對し、神はこの手の末を現し、恐る可き而も重大なる意義を有する文字を書き録したのである言つた。而して尙進んで次の如くその文字を説明した。

「その書ける文字は是のごとし、メネ、メネ、テケル、ウバルシン、その言の解明は是のごとし、メネ（數へたり）は神汝の治世を數へてこれをその終に至らしめ謂なり。テケル（秤れり）は汝が權衡にて秤られて、汝の重の足ざることの顯れたるを謂なり。ペレス（分たれたり）は汝の國の分たれてメディアミベルシヤに與へらる、を謂なり。是においてベルシヤザル命を降して、ダニエルに紫の衣を着せしめ、金の鍊をこれに頸にかけさせて、彼は國の第三の牧伯なりと布告せり。」

この文字が何處の國語であつたかは知られてゐない。然し若しそれがカルデア語であつたならば、王の智者學者等はその讀み得る筈である。故にクラーク博士は、ユダヤ人がバビロンに捕虜となる前に使用し、ダニエルのよく通じてゐるサマリヤ語、即ち純粹なヘブライ語であつたらうと推測してゐる。然しその文字は全會衆の知らない文字で特に主の靈によりてダニエルに示されたものに相違ないと思ふ。

この文字は一語が簡短な一句であつた。之はヘブルに直すに、メネ「數へたり」、テケル「秤れり」、ウバルシンはペレスといふ語根より來れるものにして「分たれたり」の意味である。即ち汝の潰したる神は、汝の國を聖手の中に支配し、汝が繁榮の頂點に達したと思惟した時、既に其の日を數へて終りに至らしめたのである。地上に於て最大なる者の如くその心に高ぶりたる汝は、秤られて重量の皆無なりし事を發見せられたのである。汝が永遠に續くであらうと夢想した大帝國は、既に門前に肉迫せる敵軍の爲に分たれるのである。ダニエルは王に告げた。此戰慄すべき宣言にも拘らず、ベルシヤザルはその約束を忘れなかつた。而して直にダニエルに紫の衣を着せしめ、金の鍊をこれが頸にかけさせて、彼は國の第三の牧伯なりと布告した。ダニエルがこの任命を承諾したのは、蓋しベルシヤ帝國になつた時に、ユダヤ人の保護をよりよくなし得ると思つたからであらう。

ベルシヤザル王の死

「カルデア人の王ベルシヤザルはその夜の中に殺され、メディア人ダリヨスその國を獲たり。此時ダリヨスは六

十二歳なりき。

茲に簡短に叙述せられた光景は第二章三十九節の註に詳述してある。ベルシャザルが不敬虔極まる行爲を敢てなしつゝ、ありし時、即ちダニエルが天使の手によりて録されたるバビロン帝國の恐るべき運命を物語る文字を解明してゐた時に、ベルシャの精銳は都城の中心指して突進せんと急いでゐた。之等の事は王にこつて意外の事ではなかつた。何故なれば、神は今し方彼の運命に就て警告なし給うたばかりであつたからである。やがて王宮に闖入したベルシャ軍は、王を捕へて刺殺した。そして茲にバビロン帝國は遂に終を告げたのである。

世界の歴史は今なほ吾人に教訓を與へつゝある。神は凡ての國及び凡ての人をその大經綸の中に活躍せしめ給ひつゝある。今日も國家及び人類は誤り給ふ事なき神の聖手の中にある定木によつて試みられつゝある。彼等は凡て自己の撰擇によつて自己の運命を定めつゝある。而して神はその目的を完成せんが爲に、昔バビロンに爲し給ひし如く、現代に於ても尙凡ての者を支配なし給ひつゝあるのである。

第六章 ダニエル獅子の穴に投ぜらる

忠臣ダニエル

「ダリヨスはその國に百二十人の牧伯を立てることを善しし、即ちこれを立て、全國を治理しめ、また彼らの上に監督三人を立てたり、ダニエルはその一人なりき。是はその州牧をして此三人の前にその職を述しめて、王に損失の及ぶことなからしめんためなりき。ダニエルは心の殊勝たる者にして、その他の監督および州牧等に勝りたれば、王かれを立て、全國を治めしめんせり。是においてその監督と州牧等國事につきてダニエルを諷ふる隙を得んとしたりしが、何の隙をも何の咎をも見いだすことを得ざりき。其は彼は忠義なる者にて、その身に何の咎もなく、何の過失もなかりければなり。是においてその人々言ひけるは、このダニエルはその神の例典について之が隙を獲るにあらざれば遂にこれを訟ふるに由なしき。」

バビロンはメデヤミベルシャの聯合軍に占領せられ、メデヤの王ダリヨスは紀元前五百三十八年王位に即いた。それより二年後即ち紀元前五百三十六年、ダリヨス王歿し、クロス王が之に代りて王位に即いた。故に本章に録された事件は、紀元前五百三十八年より同五百三十六年の間に起つたのである。

ダニエルはバビロンの全盛時代に於てその主要人物であつた。而して其時よりメド・ベルシャが世界的大帝國を建

設するまで、彼はバビロンに定住してゐたものであらう。故に彼はバビロン帝國に關する凡ての事件によく通じてゐた筈である。然るに彼は、バビロン及びベルシヤ兩帝國に仕へてゐた長年月の間に起つた種々なる事件は、之を記録してゐない。只彼は各時代の神の民に信仰と望と勇氣を與へ、以て彼等を正義に堅く立たしめ得るを考へた二三の事件を摘録してゐるに過ぎない。

使徒パウロはヘブライ書第十一章に於て、本章に録された事件を暗に指して云つてゐるやうである。即ち彼は、信仰に由り或者は「獅子の口を箱」ましたと云つてゐる。ダリヨスは當時全國が百二十州に分たれ居りしを以て、各州に一名づゝの知事を任命した。因に其後カンバイシス及びダリヨス・ヒスタスプスの勝利に由つて百二十七州になつた。(エステル書一ノ一)。そして是等の百二十人の地方長官を管理するに、三人の監督が任命せられたが、ダニエルはその首班であつた。ダニエルが監督に任命せられたのは彼の高潔なる人格によつたものである。即ちその時迄バビロン帝國の總理大臣であつたダニエルは、ダリヨスから敵を看做され、流刑或は其他の方法で嚴罰に處せらるゝ、か若しくはその當時亡國の捕虜であつた彼は罵詈訾の的になつたであらう。然るに斯の如き取扱を受けず、却つて他の人々よりも優遇せられたのは、慧眼なるダリヨス王がダニエルの高潔なる人格を認めたからである。然るに茲に於て他の監督及び地方官等はダニエルを嫉み、如何にもして彼をなきものにせん企圖したが、ダニエルの行動には何等の過失もなく、公人としての彼は實に潔白で且つその職務に忠實であつた。故にさすがの彼等も讒訴すべき廉を發見し得なかつたので、ダニエルの信する神の律法を除いては彼を譴責する根據がないと語り合つた。之はダニエ

ルに對する何たる讒辭であらう。

政治家としてバビロン及びメド・ベルシヤに仕へたダニエルの經驗は、如何なる職務に従事しても不正直であつたり或は偽を語る必要のない事を證明してゐる。それと同時に、飽くまで廉潔にして神の聖き律法に即従する事は、唯に靈的祝福のみならず、此世の事に於ても祝福を受け得る事を證するものである。ダニエルの高潔なる人格に對しては、ネブカデネザル及びバビロンの征服者なるダリヨスが之を認めたばかりでなく、彼の敵すら彼に何等の過失なき事を認むるに至つた。而して神は聖言の裡に、我等と等き情を持つて神の人ダニエルに過失のなかつた事を記録してゐる。即ち彼は初より終までおべつかを云つたり、贈賄したり、或はゆすつたりして自己の利を求めんとする凡ての誘惑に首尾よく打ち勝つた。

ダリヨス王新しき禁令を出す

『すなはちその監督ミ州牧等王の許に集り來りて、斯王に言ひ。ダリヨス王よ、願くは長壽かれ。國王、將軍、州牧、牧伯、方伯等みな相議りて王に一の律法を立て、一の禁令を定めたまはんことを求めん。王よ、その事は是のごとし、即ち今より三十日の内は唯汝にのみ願事をなさしめ、若汝をおきて神または人にこれなす者あらば、凡て獅子の穴に投いれんといふ是なり。然ば王よ、願はくはその禁令を立て、その詔書を認め、メデヤとベルシヤの廢るごみなき律法のごとくに之をして變らざらしめたまへ。王すなはち詔書をした、め

て、その禁令を出せり。茲にダニエルはその詔書を認めたることを知りて、家にかへりけるが、その二階の窓のエルサレムにむかひて開ける處にて一日に三度つゝ、膝をかゞめて禱り、その神に向ひて感謝せり。是はその時の前よりして斯なし居たればなり。

然るに一方是等の人々が兇悪なる目的を果す爲に取つた方法を見よ。英語欽定譯傍註によれば、彼等は騒々しく王の許に集り來つたに於ては凡ての者が同意してゐるのであるに主張した。然しそれは偽りであつた。何故なれば、彼等の監督なるダニエルには無論相談すらしなかつたに相違ないからである。彼等の定めた禁令は、王の虚榮心をそゝるものであつたので、比較的容易に王の裁可を得る事の出来るものであつた。三十日の間人間が神への願事を禁ずるに云ふ事は、未だ嘗て聞いた事のない法令である。故に王は彼等の謀略を看破する事能はず、遂にその法令に署名調印した。斯くして其は如何なる事があつても變更する事の出来ないメデヤ・ペルシヤの國法の一つとなつた。

是等の人々が如何に狡猾なりしかを見よ。善人を滅ぼさんがために何處まで策略をめぐらすのであらう。若し此法令にユダヤ人の神に祈願する事を禁ずる書くならば、實際一は其が眞の目的であつたけれども直ちに王に看破されて裁可されなかつたであらう。故に彼等はそれを一般の神々となし、自分等の憎むダニエルを亡ぼさん爲に、その全宗教を神々を敢て侮辱した。

ダニエルはそれが自己に對する陰謀である事を感じしたが、然しそれを妨げようもしなかつた。只彼は自らを神

に委ね、攝理の導きに一任してゐた。即ち彼は用件を設けて他に出張する事もしなかつた。或はその禱拜を今までよりも秘密にする事もしなかつた。而してダニエルはその禁令が發布せられてからも、従前通り一日に三回部屋に跪き、愛するエルサレムに向つて神に祈禱を捧げた。

ダニエル獅子の穴に投ぜらる

「新りしかばその人々馳よりて、ダニエルがその神にむかひて禱りかつ求めをるを見あらはせり。而して彼ら進みきたり、王の禁令の事につきて王に奏上して言ひけるは、王よ、汝は禁令をした、め出し、今より三十日の内には只なんぢにのみ願事をなさしめ、若し汝をおきて神または人にこれをなす者あらば、凡てその者を獅子の穴に投入れん。定めたまへるならずや、王よ、王よ、王よ、其事は眞實にしてメデアミベルシヤの律法のごとく廢べからざる者なり。彼らまた對へて王の前に言ひけるは、王よ、ユダの俘擄人なるダニエルは、汝をも汝の認め出したまひし禁令をも願みずして、一日に三度つゝ、祈禱をなすなり。王よ、この事を聞きてこれがために大に愁へ、ダニエルを救はん。心を用ひ、即ちこれを拯けん。力をつくして日の入る頃におよびければ、その人々また王の許に集ひたりて王に言ひけるは、王よ、知り給へ、メデアミベルシヤの律法によれば、王の立てたる禁令又は汝は汝を救ふべからざる者なり。是において王命を下しければ、ダニエルを曳來りて獅子の穴に投入れたり、王ダニエルに語りて言ふ、願くは汝が恒に事ふる神、汝を救はん。こゝを。時に石を持ち來りてその

穴の口を塞ぎければ、王おのれの印ミ大臣等の印をもてこれに封印をなせり。是ダニエルの處置をして變ること
なからしめんためなりき。

民をかけて是等の人々はダニエルが、犠牲になつてそれにかゝらん事を待ち設けてゐた。故に彼等は再び一同で騒々しく今度はダニエルの邸宅に、何か監督ミ相談しなければならぬ重大事件でも勃發したかの如く装うてやつて來た。丁度其時ダニエルは、彼等の目論み且つ希望した通り神に祈願してゐた。此處までは彼等の策略は見事に成功した。そこで彼等は直ちに王の許に至り、彼の禁令の實施せられてゐるか否かを確かめ、然る後ダニエルを訴へた。そして「ユダの俘擄人なるダニエルは」ミ王に僻見を懐かしめんとした。惡辣な手段に注意せよ。即ち陛下から特別の恩典を受けてゐるあの賤しい捕虜は、陛下に對して一つも感謝してゐないのみならず、陛下の禁令を無視して一向顧みないと訴へた、是に於て王は自分ミダニエルがうまく民にかゝつた事を悟り、ダニエルを救はんとして日の入る頃まで盡力した。即ち王は共謀者の心を和げやうしたり、或は禁令を取消さしめやうとして議論した事であらう。然るに彼等は頑として之を聞き入れず、飽くまで禁令の適用せられん事を求め、遂に尊敬すべき眞面目にして過失のない正しき神の僕ダニエルを、恰も極惡非道の罪人の如く獅子の餌食とせん爲に獅子の穴に投じたのである。

獅子ダニエルを害せず

「斯て後王はその宮にかへりけるが、その夜は食をなさず、また嬪等を召寄せずして全く寢るこゝをせざりき。」



獅子を害せしめられし穴の子獅子エニダ

而して王は朝まだきに起き出でて、その獅子の穴に急ぎいたりしが、穴にいたりける時、哀げなる聲をあげて丹ニエルを呼べり。すなはち王丹ニエルに言ひけるは、活神の僕丹ニエルよ、汝が恒に事ふる神汝を救うて獅子の害を免かれしむることを得しや。丹ニエル王にいひけるは、願くは王長壽かれ、吾神その使をおくりて獅子の口を閉ぢさせ給ひたれば、獅子は我を害せざりき、其は我の辜なき事かれの前に明かなればなり。王よ、我は汝にも悪き事をなさざりしなり。是において王おほいに喜び、丹ニエルを穴の中より出させ命じければ丹ニエルは穴の中より出されけるが、その身に何の害をも受けをらざりき。是は彼おのれの神を頼みたるによりてなり。かくて王また命を下し、かの丹ニエルを譴奏せし者等を曳き來らせて、之をその妻子にも獅子の穴に投入しめたるに、その穴の底につかざる内に獅子はやくも彼らを攫みてその骨までも盡く咬碎けり。

丹ニエルが獅子の穴に投げ込まれてから後に王の取つた態度は、彼の丹ニエルに對する同情が真心からであつた事、此事件に關し自己の取つた行動の爲に嚴しく良心の苛責を受けてゐた事を證するものである。黎明を待つて王は總理大臣が飢ゑたる猛獸と共に一夜をあかした獅子の穴に急いだ。王の挨拶に對する丹ニエルの應答は、王が迫害者に對して許可を與へた事を非難する聲ではなかつた。却つて、「願くは王長壽かれ」この尊敬と祝福の語であつた。然し其後に至つて丹ニエルは、王が刺されるやうに感じてその感情を害しないやうに、「我は汝にも悪き事をなさざりしなり」王の注意を促した。斯く丹ニエルに辜がなかつた爲に、彼が恒に（時々思ひ出したやうに事へるのではなく）忠實に事ふる處の神が、その使を遣して獅子の口を閉ぢ給うたのである。

此處にダニエルが地上の如何なる權力よりも高き權力によつて保護せられた事が記録してある。彼の行爲は擁護せられ、彼の辜なき事は證明せられた。而して彼は神を信じたるため害を受けなかつた。即ちそれは信仰の故に奇蹟が行はれたのである。然らば何故にダニエルを譴責した者が獅子の穴に投ぜられたか云ふに、其は彼等がダニエルの保護せられたのは奇蹟ではなく、丁度その時獅子が満腹であつたからである云つた爲であらうに推察されてゐる。そこで王は、然らば獅子は汝等をもダニエルの如く害しないであらうと、試みに彼等を投じたのである。罪深き彼等の爲には、獅子は大に飢ゑてゐて、彼等は投ぜられるや否やことごとく咬碎かれて仕舞つた。斯くしてダニエルは重ねて擁護せられた。而してソロモンの、「義者は艱難より救はれ、悪者はこれに代る」(箴一一ノ八)の言が字義的に成就したのである。

ダリヨス王の詔勅

「是においてダリヨス王、全世界に住る諸民、諸族、諸音に詔書を頒てり。曰く、願くは大なる平安なんぢらにあれ。今我詔命を出す、我國の各州の人みな、ダニエルの神を畏れ敬ふべし。是は活神にして、永遠に立つ者またその國は亡びず、その權は終極まで續くなり。是は救を施し、拯をなし、天においても地においても休徵をほごし、奇蹟をおこなふ者にて、すなはちダニエルを救ひて獅子の力を免れしめたりと。このダニエルはダリヨスの世ニペルシャ人クロスの世においてその身榮えたり。」

ダニエルが獅子の穴から救ひ出された結果、イスラエルの神が眞の神である事が全天下に布告せられた。凡ての人は眞の神を畏れ敬ふべきであつた。ダニエルの敵が彼を殺さんとした事が却つて彼の勝利となつた。此場合及び火爐の中に投ぜられたるヘブルの三青年の場合に於て、二大義務に忠實なる者が神が祝し給ふ事が明白に證明せられた。第一、火爐に投ぜられたヘブルの三青年の如く、罪を知りてこれを犯さざる事。第二、本章の場合の如く、義務を知りてはこれを斷行する事、是等の範例は各時代の神の民に對する大なる獎勵である。

ダリヨス王の詔勅は、眞の神の性質を遺憾なく云ひ現してゐる。(一)眞の神は活ける神であるが、他の神々は生命のない神である。(二)彼は永遠に立つ神である。他の神々は變る神である。(三)彼は萬物を創造したる者にして、之を己の國として掌り給ふ。(四)其國は亡びない、他の國々は滅ぶ。(五)其權は終ることなく、而して人の權は之に敵する事は出来ない。(六)彼は罪の束縛より救ひ出す。(七)彼はその僕が助を祈り求むる時、敵の手より救ひ出し給ふ。(八)彼は天に於ても地に於ても休徵を與へ給ふ。(九)ダニエルを獅子の力より救うて、神の恩恵に能力の明白なる證據を我等の眼前に與へ給うた神。

王は斯く結論した。以上は眞の神とその僕に對する何たる稱讚の辭であらう。

斯してダニエル書の歴史的部分は完結し、之より豫言的部分が開始されるのである。豫言は輝ける燈臺の如くその當時より今日に至る迄の各時代にその光をなげてゐる。否、尙進んで教會が永遠王國に至る迄の道筋を照してゐる。

第七章 四巨獸と歴史的大豫言

ダニエルの異象

「バビロンの王ベルシャザルの元年に、ダニエルその牀にありて夢を見、腦中に異象を得たりしが、即ちその夢を記してその事の大意を述べ。」

本章に記されたるベルシャザル王は第五章と同一の王である。故に年代順からいへば本章は第五章の前に起つた事件である。が、然し本書は歴史的事実と豫言的記録とを區別して年代には一切拘泥せずに記録したものである。而して今や我等は歴史的事実を了へ、愈々豫言の研究に這入るのである。

四巨獸海より上り來る

「ダニエル述べて曰く、われ夜の異象の中に見てありしに、四方の天風大海にむかひて烈しく吹き來り、四箇の大なる獸海より上り來れり。その形はおのゝ異なり。」

聖書の言葉はこれを比喩的に解釋すべき充分な理由のない限り文字通りに解釋すべきものである。然しこれに反して比喩的なるものは之を字義的なるものによつて解すべきである。

却説、茲に用ひられた言葉が象徴的であることは、十七節に「この四の大なる獸は地に興らんとする四人の王なり」とあるのをみても明かである。而して單に王等ばかりでなく國々をも象徴してゐる事は、「されき終には至高者の聖徒國をうけ……云々」と録してあるのをみても解る。又二十三節に天使が「第四の獸は地上の第四の國なり」と説明してゐるのをみても明瞭である。故に之等の獸は四大帝國を象徴してゐるのである。然らばこの豫言に於て獸が出で來つた周圍の状態及びその出現を可能ならしめた媒介物も共に表號でなければならぬ。而して茲に現はれてゐる表號は、四方の天風、大海、四箇の大なる獸、十の角、神聖徒に對して挑戰したる目ミ口ミを有する小き角ミである。今よりは等の表號が何を意味してゐるかを研究しよう。

聖書に於て風は、争闘、擾亂、戦争などを意味するのであるが、エレミヤ記に此事に關して新く曰はれてある。

「萬軍のエホバかく曰ひ給ふ。視よ、災いで、國より國に至らん。大なる暴風地の極よりおこるべし。その日

エホバの戮したまふ者は地のこの極より地の彼の極に及ばん。」(耶二五ノ三一—三三参照)

茲に豫言者は神が列國を争ひたまふことを録し、惡人は劍に付され、エホバの戮したまふ者は地のこの極より地の彼の極に及ばんと述べてゐる。而して斯る慘憺たる光景を呈せしむる争闘即ち戦争を「大なる暴風」に稱してゐるのである。風が争闘或は戦争を意味してゐる事は異象そのもの、中にも明かに現れてゐる。即ち四方の天風が烈しく吹いて、國は興り或は亡びたのである。何故なら國の存亡興廢は戦争の結果であるからである。

聖書に於て海或は水が表號に用ひられて居る場合、其は、庶民、群衆、諸國、諸音、等である。即ち黙示録十七章

十五節に次の如く録されてある。曰く、「汝が見し水は、庶民、群衆、諸國、諸音なり」と。
又四箇の獸についてはダニエル書七章十七節に、「この四の大なる獸は地に興らんとする四人の王なり」と説明されてある。故に今より我等は異象の意義を悟り得るであらう。

バビロン帝國（紀元前六百六年—五百三十八年）

「第一のは獅子の如くにして鷲の翼ありけるが、われ見てをりしに是はその翼を抜きみられ、また地より起され人の如く足にて立たせられ、且つ人の心を賜はれり。」

是等の獸が四人の王或は國を象徴してゐることをするならば、何れの四つであらうか。我等は何れの國から起算したらよからうか。是等の獸は全部一時に上つて來たのではない。順を逐うて上つて來たので、第一の獸、第二の獸といはれて居る。而して第四の獸は地上の光景が審判を以て悉く終を告げる時まで存在するのである。

却説、ダニエルの時代より世界歴史の終局に至るまでに四つの世界的大帝國が興るのみである事は、第二章のネブカデネザルの見たる巨像の夢によつて學んだところである。即ちダニエルは殆ど六十五年前にネブの夢を解明して、「汝はすなはち此の金の頭なり」と宣言したが、彼は當時その同じ國に生存してゐたのである。故にこの異象に於ける第一の獸は、第二章に於ける巨像の金の頭と同じ國即ちバビロンを象徴し、その他の獸は順次彼の巨像の同一帝國を代表してゐるに相違ない。然し若しこの異象が第二章の巨像の概略同一事件を豫言したものであるならば、この異



第一の獸（バビロン）

象は何のために與へられたのであらうか。其は第二章の巨像の異象で充分ではないか。質問する者もあるであらう。その質問に對して我等は、同じ事件が再三再四繰返してあるのは新なる特徴を示し又他の事實と性質とを紹介せんがためである。答へる者である。斯くして我等は「此處にすこし彼處にもすこし」つゝ、學ぶのである。而して本章には地上の大帝國が天の光に照して描寫されてゐるが、彼等の本性は猛猛なる野獸を以て象徴せられてゐるのである。最も著しい歴史上の事實が近々數十年の間に發見せられた。それはバビロン城趾の大々的發掘により發見された彫刻物の中、數個の翼ある獅子のあつた事である。その或ものは人の顔であつた。勿論ダニエルはかゝる彫刻を毎日見てゐたことであらうから、彼は異象中の第一の獸がいづれの國であるかを容易に悟つたに相違ない。即ち「この四つの大なる獸は地に興らんとする四人の王なり」この説明をきいた時に、ダニエルは翼のある獅子がバビロンである事を悟つたであらう。初に獅子は鷲の翼を持つてゐた。蓋しそれはバビロンがネブカデネザルの治世に、非常なる速力でその領土を擴張した事を示してゐるのであらう。然るにこの獸は中途にしてその翼を抜き取られた。即ち彼は、最早大鷲が餌食を捕へんとする時の如く迅速に飛翔し得なくなつた。つまり獅子の如き勇敢なる精神は消失し、その代り臆病にして虚弱なる人の心が與へられたのである。而して繁榮と奢侈により懦弱に流れたるバビロン帝國の末路は豫言そのまゝの状態である。

メド・ペルシヤ帝國 (紀元前五百三十八年—三百三十一年)

「第二の獸は熊のごとくなりき。是はその體の一方を擧げ、その口の齒の間に三の脇骨を啣へ居りけるが、之に向ひて言へる者あり。曰く、起ちあがりて許多の肉を食へ」と。

第二章の巨像とひそしく本章の表號に於ても、第二の國は第一の國よりも漸次劣つた獸を以て代表せられて居る。銀の胸と兩腕とは金の頭よりも劣つてゐた如く、熊は獅子よりも劣つてゐる。即ちメド・ペルシヤはその經歷に於て又その富と莊嚴なる點に於て到底バビロンを並べる事は出来なかつた。

次にこの國に關する新なる特徴が示されてゐる。即ち熊は體の一方を擧げてゐた。元來この國はメヂヤ人ミペルシヤ人との聯合軍であつたが、之と同じ事實は第八章の二本の角を有する牡羊によつても示されてゐるのである。この二本の角に就ては「その長者は後に長たるなり」と録されてゐるが、熊が體の一方を擧げて居たといふ事は、つまり後に來つたペルシヤ人の方が勢力を得て同國を支配するに至つた事によつて成就したのである。(第八章三節參照) 三つの脇骨はメド・ペルシヤが征服したる、バビロン、リヂイヤ、エヂプトの三ヶ國を象徴したものであらう。「起ちあがりて許多の肉を食へ」と命ぜられたのは、メド・ペルシヤが三ヶ國を併呑した事に刺戟せられて、更に遠き國々の遠征を劃策するに至る事をいつたものであらう。この國の性質は熊によつてよく代表せられてゐる。即ちメヂヤ人とペルシヤ人とは共に好惡にして掠奪を事とし、民を掠めた民族である。既に第二章において説明したる如く、メ



(ヤシルベ・ドメ) 獸 の 二 第

ド・ベルシヤはクロス王がバビロンを攻略した年、即ち紀元前五百三十八年よりアルベラの戦役のありし紀元前三百三十一年まで二百有七年間繼續したのである。

ギリシヤ帝國 (紀元前三百三十一—三十二年)

『その後に見しに豹のごとき獸いでたりしが、その背には鳥の翼四つあり、この獸はまた四つの頭ありて、統轄權をたまはれり。』

第三の國ギリシヤは豹を以て象徴せられてゐる。若し獅子の翼が征服の急なることを示すとしたならば、豹の翼も亦同じことを示してゐるに相違ない。豹は生來それ自身足の早い獸である。然るにこの國の歴史中その點を代表せしむるには、それだけでは物足りないで更に翼が必要であつたのである。獅子には二つの翼があつたが、然し豹にはそれだけでは足らず四つの翼が必要であつた。つまり之はその征服の急なりし事において比類のなかつたことを意味するものである。然り、ギリシヤの歴史は全く其の通りであつた。即ちアレキサンダー大帝の許になしたる遠征は、其の突然なりし事、その迅速なりし事において歴史に前例を見ないのである。

『マケドニヤよりガンヂス河即ちアレキサンダー大帝が殆ど到達した地點までは、少くも一千一百リグある。それに彼が途中立ち寄りたるギリシヤの境からイツススのあつた地點、及びリアヤのジュピター、アンモン寺院に至る距離、更に其處よりツロ(チルス)に歸りたる旅程を合計すれば、少くも三百リグである。而して彼は各遠征



(ヤシリギ) 獸 の 三 第

の途中少くもその位は何時も迂回してゐるから、アレキサンダー大帝は僅々八年足らずの間に、バビロンに還つた距離を加算しないで、其の軍隊をすくなくも一千七百里餘（約五千一百餘哩）進軍せしめたことを發見するであらう。（Rollin, Ancient History, Book 15, Sec. 2）

『この獸はまた四つの頭あり』。即ちギリシャ帝國が統一されてゐた期間は僅にアレキサンダー大帝一代餘りにして、彼がその赫々たる生涯を大酒のために熱を病みて終りたる後數年ならずして、其の國は彼の四將軍の間に分割せられてしまつた。即ち、カツサンドルは西方マケドニアとギリシャを領し、リシマックスはトラキヤとヘレスポントのアジャの一部及び北はボスボラスを領した。プトレメウス（トレミー）はエジプト、リヂイヤ、アラビヤ、パレスチナ、及び南方シリー・シリヤを受けた。又セレウクスはシリヤ及びアレキサンダーの東方の領土全部を受けた。即ち豹の四つの頭によつて表示されてゐるものは、紀元前三百一年になされた以上の分裂を指すものである。

斯の如く豫言者の言は正しく成就した。アレキサンダー大帝が後継者を定めておかなかつたのにも拘らず、ギリシャ帝國は何故に無数の小國に分裂しなかつたのであらうか。何故に丁度四ヶ國に分裂してそれ以上にならなかつたのであらうか。それは豫言に丁度四ヶ國に分裂するといはれてゐたからである。即ち豹には四つの頭があり、牡山羊の角は四つになつた其の如く、ギリシャ帝國は四ヶ國に分裂する筈であつた。而して正しく其の通りになつたのである。（此の事件については八章に於て詳述す）



第四の獸（マール）

ローマ帝國（紀元前三十一年—紀元四百七十六年）

「われ夜の異の中に見しに、その後第四の獸いでたりしが、是は畏しく猛く大に強くして鐵の齒あり、食ひ且つ咬碎きてその殘餘をば足にて踏みつけたり。是はその前に出でたる諸の獸は異りてまた十の角ありき。神は、次に示されたる國を代表せしむる基礎なる獸は自然界に之を見出し得たまはなかつたのである。自然界に棲息する獸に、頭、角、翼、鱗、蹄、齒、或は爪なきを幾ら加へても、其代表し得る者はなかつたのである。此の國は他の諸の國々異り、象徴として用ふべきものが全然なかつたのである。

茲に引照した第七章の中には一卷の書物なる程の材料が含まれて居るけれども、本書の如き簡單なる註解書に於てその歴史全部を引證する事は到底紙面の許さざる處であるから、不本意ながら簡潔にせざるを得ない。言ふ迄もなく此の獸は巨像の鐵の脛に相當なる第四の部分である。第二章四十節に此の國が羅馬であるに信すべき五六の理由を擧げておいたが、それと同じ理由はこの豫言にも適用する事が出来るであらう。羅馬は巨像の脛に實によく當嵌つてゐるが、今また羅馬は此の獸によく符合してゐるのである。豫言に示された如く畏しく猛く且つ強き點に於ては世界にその比を見ない。其は實に大なる鐵の齒を以て食ひ且つ咬碎き、その強き足を以て國々を蹂躪した。又其には十の角があつたが、第二十四節に其はこの國より起る十人の王或は國である言はれて居る。即ち羅馬は下記の十ヶ國に分裂したのである。アングロサクソン、フランク、アレマニイ、スウェーヴ、西ゴート、東ゴート、ヴァンダル、

ブルグンド、シャグリス、ヘルリイ、等である。挿繪『羅馬分裂後の十ヶ國』參照

小さい角の出現

『我その角を考へ觀つ、ありけるに、その中にまた一箇の小さい角いてきたりしが、この小さい角のために先の角三箇その根より抜け落ちたり。この小さい角には人の目の如き目あり、また大なる事を言ふ口あり』

ダニエルが角を考へ觀つ、ありしに不可思議なる變化が起つた。即ち小さい角（最初は小さかつたが後には他のものよりも大きくなつた）が出て來つたのである。其は只靜かに出で來るばかりでは満足せず、三本の角を抜き取つて其處を占領したが、其は即ち三ヶ國を倒す事をいつたものである。此の小さい角に就ては後に詳細に研究する筈であるが一言に要約して云へば羅馬法王權を象徴したものである。又根より抜かれたる三本の角は、ヘルリイ、東ゴート、ヴァンダルの三ヶ國を象徴してゐるのである。而して上記の三ヶ國が征服せられたる理由は、彼等が羅馬天主教の教理に反對したる爲、即ち羅馬の監督が教會の最高權威者である事を否認したが爲であつた。

『この小さい角には人の目の如き目あり、また大なる事を言ふ口あり』と。目は羅馬天主教の機敏、洞察力、奸智、及び先見の明を現はすに最も適應しい象徴である。又大なる事を言ふ口は、羅馬の監督の僭越なる宣言を示すに適應しい表號である。



（權王法馬羅）角 き 小

天に於ける審判の光景

「われ觀つ、ありしに遂に寶座を置列ぶるありて、日の老たる者座を占めたりしが、その衣は雪の如くに白く、その髮毛は漂し潔めたる羊の毛の如し。又その寶座は火の焔にしてその車輪は燃ゆる火なり。而して彼の前より一道の光の流湧きいづ。彼に仕ふる者は千々、彼の前に侍る者は萬々、審判すなはち始めて書を開けり。」

至高者の崇高なる光景は地上の言葉を以てこれを描寫する事は到底不可能である。さりて我等は此處に紹介されてゐる處の嚴肅にして赫々たる光景にのみ魅せられてはならない。事件其ものが我等の注意深い考慮を要するのである。即ち審判の光景が茲に示されてゐるのである。而して我等は、審判の問題が論議せられてゐる場合何時でも最も眞摯な態度で之を研究しなければならぬ。何故なら我々人類は一人残らず神の臺前に立たねばならぬからである。

「日の老たる者」即ち父なる神が審判の寶座に即き給ふのであるが、この説明により神は有形の實在である事が明かである。「彼に仕ふる者は千々、彼の前に侍る者は萬々」と、之等は審判を受けるために寶座の前に立つてゐる罪人ではない。神命の降るのを待つてゐる聖天使等である。然し之等の聖句を正しく理解するためには「聖所問題」を研究する必要があるが、此の問題は後に譲り、茲に紹介せられてある審判とは、我等の祭司長なるキリストが天の聖所に於てその奉仕を成し遂げ給ふ謂なる事を附言しておく。而してそれは調査審判である。書は開かれて凡の人の記録が大審判官の前で調査せられ、キリストの再臨に際して永生をうくべき者を豫め定めるのである。ヨハネは黙示

録第五章に記録してゐる如く、是と同じ聖所の光景を示され、キリストに偲に調査審判に與つてゐる千々萬々の天使を見たのである。聖所を眺めながら（黙示録第四章により彼が眺めてゐた事を學ぶ）黙示録第五章十一節に、「我々が見しに寶座に活物および長老等の四周に衆の天の使の聲あるを聞けり。その数は千々萬々」と言つてゐる。

我等は尙ダニエル書第八章十四節の證によつて、この嚴肅なる審判は現在天において行はれつゝある事を學び得るのである。

第四の獸の運命

「その角の大なる事をいふ聲によりてわれ觀つゝありけるが、我が見る間にその獸は終に殺され、體は壞なはれて燃ゆる火に投げ入れられたり。またその餘の獸はその權威を奪はれたりしが、その生命は時二期の至るまで延ばされたり。」

基督再臨前に福音が全世界に普及して、一千年の間正義が世界を支配するに至ると所謂千年説を信じてゐる者がある。また或者は恩恵時代は基督再臨後まで繼續し、永生を受けたる義人は死ぬべき惡人に福音を傳へ、惡人を救の途に導きつゝあるといふ、即ち義人と惡人の共存する千年期を信じてゐる者がある。併しながら是等は孰れも本節の聖句によつて其の誤謬なる事を暴露されてゐるのである。

第一、第四の長ろしき獸の本性には何等の變化も來らない。又小き角も不相變遷す言を出し、獸が火の中に投ぜら

れるまで無数の信者達を迷信の中に閉ぢ込めてゐるのである。而して是は彼等の改宗の爲ではなく、滅亡のためである。（撒後二ノ八參照）

第二、第四の獸の生命は前の獸の生命の如くその領土を奪はれてからは繼續しなかつた。前の獸はその領土を奪はれてからもその生命は少の間は許されたのである。即ちバビロンの領土と國民とはベルシヤに征服せられたけれども尙存在してゐた。又ベルシヤがギリシヤに顛覆せられた時にも、或はギリシヤがローマに征服せられた時にも同様であつた。然し第四の國の次には何が起るのであらうか。其は死ぬべき人間の關與すべき國ではない。それは火の池で終末を告げるのである。而して其の後は絶対に存在しないのである。獅子は熊に吞まれ、熊は豹に、豹は第四の獸に吞まれた。そして第四の國は何に吞まれたのであらうか。其は他の獸に吞まれたのではない。火の池に投入されたのである。而して其の刑罰として第二の死の苦を受けるのである。故に基督再臨後に恩恵期間があるとか、或は善人と惡人と偲に存在する千年期があるといふやうな事はあり得べからざる處である。

「その時角の大なる事を言ふ聲によりて我れ觀つゝありけるが」（英譯聖書による）この句は、一定の時を指してゐるやうに思はれる。即ち調査審判は前節に説明せられてゐるが故に、本節は調査審判が行はれてゐる最中に、且つこの獸が殺されて火の池に投ぜられる一寸前に、小き角が至高者に對して大なる言を出すと言はれてゐるやうに思はれる。我等は既に其を聞いたではないか。千八百七十年の法王廳會議の宣言を見よ。死ぬべき人間を無謬に見做すより以上に露す事が何處にあらうか。然るにその年に萬國の天主教徒は法王廳に集つて、罪の人法王が教理又は倫理道

徳の法則を定めたる時は、決して誤る事なしと宣言して、神の大權を汚辱したのである。是れ以上大にして不敬なる冒瀆があるだらうか。是こそ角の語りたる大なる言ではあるまいか。而して此の權力は終に近づき、火の池に投ぜられる時期に到達してゐるのではないか。

基督の戴冠式

「我また夜の異象の中に觀てありけるに、人の子のごとき者雲に乗りて來り、日の老たる者の許に到りたれば、すなはちその前に導きけるに、之に權榮國を賜ひて、諸民、諸族、諸音をしてこれに事へしむ。その權は永遠の權にして移りさらず、又その國はじぶることなし。」

茲に説明せられたる光景は、日の老たる者が地上に在し給ふのでなければ、基督再臨の光景ではない。何故ならば彼は日の老たる者の許に行くのであるからである。而して彼は日の老たる者の前にて權榮國を受け、また人の子は再臨に先だちその國を受けるのである。(路一九ノ一二参照)。故にこれは天の殿にて行はれる戴冠式的光景にして、九、十兩節に示されたる事件と密接なる關係を有してゐるのである。即ち基督は聖所に於ける祭司職の奉仕を終へた時にその國を與へられるのである。而して彼に事へる國民は主に救はれたる者達であつて(黙二ノ二四参照)地上の惡き國民ではない。何故ならば地上の民は基督の再臨によつて滅ぼされて仕舞つてゐるからである。全世界の諸族、諸音、諸民の中より若干かの人達が遂に神の民となり、永遠に喜悅を以て主に事へるのである。

異象の解明

「こゝにおいて我ダニエル、その體の内、魂を憂へしめ、わが腦中の異象のために思ひなやみたれば、すなはち其處にたてる者の一箇に就て、この一切の事の眞意を問ひけるに、その者わにこの事の解明を告げ知らせて曰く、この四の大なる獸は地に興らんとする四人の王なり、然る終には至高者の聖徒國を受け、長久にその國を保ちて世々限りなからん。」

ダニエルが以上の凡の眞理を示されん事を心から願つた如く我等も同様でなければならぬ。而して熱心に眞理の示されん事を祈り求むるならば、ダニエルに重大なる眞理の智識を與へ給うた神は、今尙ほ我等にも同じ智識を與へ給ふであらう。獸の表象した國に就ては既にこれを學んだ。即ち我等は豫言に示されたる事件を順次研究して、第四即ち最後の獸が滅ぼされて地上に神の國の建設される時迄の事を學んだのである。その次には如何なる事件が起るのであらうか。第十八節に「至高者の聖徒國を受け」とある如く、この世に於ては、凡の人々より卑められ、輕んぜられ嘲笑せられ、迫害せられ、指彈せられ、その希望は恰も畫餅視せられ、凡の人の中で最も小さき者と思はれて居る聖徒が國を與へられ、永遠にそれを統治するのである。茲に惡人の横暴なる惡政は終焉を告げ、壓迫されてゐた神の民は解放せられ、全地に平和は克復し、義人は新世界の美はしき全領土を統治するのである。

再び小き角に就て

「是において我また第四の獸の眞意を知らん欲せり、この獸は他の獸と異なりて至畏ろしく、其齒は鐵、その爪は銅にして、食ひかつ咬碎きて、その殘餘を足にて踏みつけたり。この獸の頭には十の角ありしが、その他にまた一の角いできたりしかば、之がために三の角抜けおちたり。この角には目あり。また大なる事を言ふ口ありて、その狀はその同類よりも強く見えたり。我またこの事を知らん欲せり。」

最初の三つの獸に就てはダニエルは何等の困難をも感ぜずしてこれを了解したのである。然るに彼は第四の獸に就ては、他に類例なく且つ餘りの畏しさに驚愕したのである。何故ならば時を経るにつれて、地上の墮落したる國を正確に代表する象徴が自然界から愈々遠ざかつたからである。獅子は自然界に存在する獸である。然しバビロンを代表せしむる爲には不自然なる二の翼を加へなければならなかつた。熊も自然界に棲息してゐるが、羴猛なるメド・ペルシヤを代表せしめる爲には不自然なる脇骨をその口に啣へしめなければならなかつた。同じく豹は自然界に居る獸であるが、然しギリシヤを正しく代表せしむる爲には、翼や多數の頭を加へて自然界の實際から遠ざからしめなければならなかつたのである。然るに第四の國羅馬に至つては、これを代表せしむるに適應はしいものが自然界の何處にもなかつたのである。而してその國は、未だ曾て見た事のない銅の爪と鐵の齒をもつた實に畏ろしい猛獸によつて象徴せられた。それは頗る殘忍にして羴猛且つ心から壓迫を愛し、食ひかつ咬碎いて犠牲者を足下に蹂躪した。

豫言者によつて之は實に奇觀であつた。然しそれより以上の奇觀が出現した。即ち小き角が現れた事である。而してその角は出で來つた獸の性質に似て他の三つの角を抜き取つた。又その角には教養のない獸の如き目ではなく、人の如き鋭く且つ機敏にして聰明なる目があつた。そればかりでなくもつゞ不思議な事には、その角には大なる事を言ふ口があつた。而してその口で傲慢なる事を語り、且つ非常に残酷極まる暴言を吐いた。故に豫言者が、惡魔に非ざれば案出する事の出來ない働をなしたるこの怪物に對して特別の注意を拂つたのも無理はない。次の節に小き角に關する筋書がある。これによつて豫言研究者は誤る事なく此の象徴を當て嵌る事が出來るのである。

聖徒國を受く

「われ觀つ、ありけるに、この角聖徒と戰ひてこれに勝ちたりしが、終に日の老たる者來りて至高者の聖徒のために公義を行へり。而してその時いたりて聖徒國を獲たり。」

二十一節の小き角の働は二十三節より二十六節の間に於て詳細に亘り説明する筈であるから此處ではこれを省略する。二十二節には三つの連續せる事件が紹介せられてゐるやうに思はれる。即ちダニエルは小き角の全盛時代から長期間に亘つて聖徒と惡魔及びその代表者との間に戰はれたる争鬭の終結を眺めて、道しるべきもなるべき三大事件を示されたのである。(第一)「日の老たる者來りて」ミ。即ち之は九、十の兩節に説明せられたる審判の開始に當り、神が寶座に着き給ふ事を云つたものである。(第二)「至高者の聖徒のために公義をおこなへり」之は第一の魁

生の（黙二〇ノ一―四参照）後に、一千年間聖徒が基督と共に罪人を審き、彼等の罪に對して受くべき刑罰を定める事を云つたものである。その時殉教者等は、恰も野の獸の如く聖徒を逐ひ、大根の葉でも切り落すやうにその首を刎ねた基督教大反對の迫害者を審くのである。（第三）「而してその時いたりて聖徒國を獲たり」と。之は聖徒が愈々新天地の所有權を得てそれに入る事である。その時罪人罪人の呪咀の最後の痕跡、即ち根も枝も悉く取り去られて神の敵なる悪者によつて亂されてゐた領土は義人に與へられ、彼等は永久に之を統治するのである。（哥前六ノ二、三、太二五ノ三四参照）

至高者の聖徒を惱まさん

「彼かく言へり、第四の獸は地上の第四の國なり。これは一切の國と異なり、全世界を併呑し、これを踏つけかつ打破らん。その十の角はこの國に興らんとする十人の王なり。之が後にまた一人興るべし。これは先の者も異なり、且その王三人を倒すべし。かれ至高者に敵して言を出し、かつ至高者の聖徒を惱まさん。彼また時と法を變へんことを望まん。聖徒は一時三時半時を経るまで彼の手に付されてあらん。斯て後審判はじまり、彼は其の權を奪はれて終極まで滅び亡せん。」

畏しく猛き獸の十の角は、既に學びたる如く羅馬より起る十ヶ國を代表してゐるのである。而して歴史は紀元三百五十一年より四百七十六年の間に、歐洲の北方及び東方の十の種族が、其時まで羅馬の支配してゐた領土内の各所に

政府を建てた事を記録してゐる。首都羅馬は紀元四百七十六年に陥落し、斯て羅馬は遂に分裂したのであるが、殆ど凡ての歴史家は羅馬分裂後の諸國とは、アングロサクソン、フランク、アレマニイ、スウェーヴ、西ゴート、東ゴート、ヴァンダル、ブルグンド、シヤグリス、及びヘルリイの十種族であるを云つてゐる。羅馬より分裂した凡ての國が、今日まで繼續してゐるのではない。それ等の國々の間には時々戦争があつて、或者は強く、或者は弱くなつた。又その領土にも幾多の變遷があつた。この中今日迄續いてゐるものを擧げて見れば、アレマニイが獨逸になつたその事は佛蘭西語では今尙アレマンデニ稱せられてゐるのでも判るのである。西ゴートは現代の西班牙の先祖であつた。ブルグンドの一部はシヤグリス及びフランクの全部が今の佛蘭西になつた。故に佛蘭西には今尙バーガンディーニ稱する大きな縣があるのである。而してブルグントの殘部は瑞西になり、アングロサクソンは英國を起した。又葡萄牙はスウェーヴの後裔である。故に我等は之を總括して云ふならば、十種族の中六つは今日の、英國、佛蘭西、西班牙、葡萄牙、瑞西及び獨逸であるを云ふ事が出来るのである。

他の三種族の運命に就ては、『我その角を考へ觀つ、ありけるに、その中にまた一箇の小さな角出てきたりしが、この小さな角のために先の角三箇その根より抜けおちたり、この小さな角には人の目の如き目あり、また大いなる事を言ふ口あり』（但七ノ八）と、ダニエルが異象の中に見聞した事に再び注意を促したいと思ふ。茲に十の角の中に小さな角が現れて、十の中三つを滅ぼす事、その新しき角は前者と全然異つてゐるを云ふ事が豫言せられてゐるのである。

歴史に徴すれば羅馬が十ヶ國に分裂して後、その中の三ヶ國を征服する新しい國は一つも起らなかつたのである。故にこの豫言を成就し得る唯一の權力は法王權であつた事が明かである。十ヶ國は凡て政權であつた。然し法王權は他のものと異つて宗教上の權力であつた。而して法王權が十ヶ國の中三つを倒した顛末は次の如くである。

基督教會は紀元第一世紀に於て羅馬帝國の各重要なる都市に設立せられた。そこで大都市にある教會の監督は漸次非常な權力を有するに至つた。而して羅馬は同帝國の首都であるが故に、羅馬府の教會監督は自然他の大都會の教會監督の首領となつたのである。故に時を経るにつれて、羅馬府の監督の地位は名譽の權力を愛する者の羨望の的となつた。而して斯る人々は常に其の地位の權力を増加しようと努めた。故に羅馬府の教會監督の地位は、遂に羅馬に於ては皇帝に次ぐ重要な地位となつた。のみならず彼の權力は全帝國の基督者の間に認められるに至つた。而して紀元四百七十六年に羅馬の最後の皇帝が廢せられて、愈々十ヶ國に分裂した時、羅馬には地位に於て教會監督の右に出づる者がなかつたのである。

然るにこの當時教會内に、基督の神性に關しての論争が起つて、エリヤン派ミアサナシヤン派の二派に分れたが羅馬府の監督は後者に屬してゐたのであつた。而して羅馬を亡ぼした十種族は凡て基督者であつたけれども、その中三つはエリヤン派に屬してゐた故に、羅馬府の教會監督の敵となつた譯であつた。剩へ是等エリヤン派の三ヶ國は今日の伊太利及びその附近の地方に領土を持つてゐた爲に、その領土が羅馬より遠距離の處にあるよりも、より以上羅馬府の監督の權力に對する威嚇であつた。故に羅馬府の監督は、初めに三ヶ國の内二ヶ國を煽動して兵火を交へし

める事に成功したが、その結果ヘルリイは亡びて仕舞つた。茲に於て監督は他の二ヶ國を撃つる爲に援助を求めたが、この求に應じたのはコンスタンチノーブルを首府とする勢力のあるヂヤスチニヤン帝であつた。而して紀元五百三十三年に、彼は、「羅馬府の監督が全教會の首長で、異端者の懲治者である」事を宣言し、ベリサリアスを將とする大軍をエリヤン派の國々に遣はして、羅馬府の監督に従へし迫らしめた。然るにヴァンダル及び東ゴートは大に抵抗したるため遂に滅亡するに至つたが、最後に東ゴートが致命的戦争をして敗れたのは紀元五百三十八年のことであつた。而して彼等の離散したる亡命者が全部捕へられるまでに其後十五年の歳月を要したけれども、その時以來彼等の國々は亡んでしまつたのであつた。斯の如くして僅々數ヶ年の間に即ち紀元五百三十八年までに、三ヶ國は羅馬の監督に服従しなかつた爲に亡ぼされたのであつた。最後に出て來た小き角は「狀はその同類よりも強く見えた」が、その如く彼は首尾よく他の三の角を根より抜き取つてしまつたのである。

法王權の發達

然し三の角を根から抜き取る事は小き角の種々なる働きの一端に過ぎない。ダニエルは人の目の如き目大なる事をいふ口のある小き角が「聖徒と戦ひて之に勝ちし」を見たに述べてゐるが、我等は此の小き角が宗教的權力である事は既に之を學んだのである。而してその宗教的權力が聖徒即ち神の民に挑戦するは實に不思議ではあるけれども少しく教會歴史を研究すれば容易にこの事實を了解し得るであらう。

羅馬府の監督が勢力を得るにつれて彼の主張は益々重んぜらるゝに至つた。そして遂には、監督の言、また教會の傳説、或は己が主義に一致する基督者の書翰は、基督御自身の御言葉或は使徒の書翰と同等の權威あるものゝ主張するに至つた。そののみならず全教會を彼等の思ふままに操縦せんが爲に、羅馬府の監督は、基督が人類の爲に開き給うた救の仲保者は教會で、つまり神父はその仲保者、又監督はその首長であるといふ教理を教へ始めた。次に彼は自分（羅馬の監督）に一致しない者はこれを免職し且つ除名した。そして遂には監督は各國の主権者に應援を求めて、その權力に従はない所謂異端者を捕へて之が撲滅を講じ始めたのであつた。斯して小き角は聖徒に戰を宣した。然し神の民は基督及び使徒の教へたる眞の教理を信受してゐた爲に、羅馬教會が神人間の仲保者であるこの事を認める事は出来なかつた。即ち彼等の良心は彼等をして羅馬の監督に反對せしめたのであつた。而して彼等は依然として神の民であつたのである。

至高者に敵して言を出し

小き角に就て尙他の豫言がなされてゐる。ダニエルは異象の中に左の如き言を聞いた。曰く、「かれ至高者に敵して言を出し且つ至高者の聖徒を惱ます。彼また時と法とを變へんことを望まん。聖徒は一時と二時と半時を経るまで彼の手に付されてあらん」（但七ノ二五）と。茲に四つの異りたる陳述があるが、順を逐うて其を研究しよう。

「かれ至高者に敵して言を出し」と。紀元四百五十年頃より一般に法王を稱せらるゝに至つた羅馬府の監督が、その地位を高めて、法王の言葉は神の聖言と同一であると主張したり、或は神の子にのみ屬する神人間の仲保の職が我等の手中にあると教へたり等した事は既に之を學んだ。以上の事實及び天主教會の書籍より二三の要點を摘載すれば至高者に敵する言の根源が何であるか、明瞭になるであらう。

天主教會の書籍中にはしばしば法王の事が、「神の子の代表者」、「我等の主なる神法王」、「地上の神」、「世界の王」、「王の王、主の主」等と録してある。ミカエル皇帝の陳述中に法王ニコラスの事を、「コンスタンチンより神を稱せられたる法王は、人によつて縛られ或は赦さるべきものでもない。如何にすれば神は人に審かるべきものではないからである」と記されてある。又左の如き意味において神父すら神の上にあるもの、如く教へて居る。即ち天主教會員は、神父が聖餐式のパンを祝する時に其は實際神の子の肉に變るに信じてゐるのである。故に神父は言葉によつて神を造る事が出来るといふのである。然し創造者は被造物よりも偉大なる事を否定する事は出来まい。聖書及びヘブライ語學の世界的碩學クラーク博士は、「かれ至高者に敵して言を出し」とは「彼は神であるかの如く語る」との意味であると云つてゐる。同博士は更に進んで、「羅馬法王以上にこの小き角にびつたり當嵌る者はない」と述べてゐる。法王は自ら神にのみ屬する「無謬」の詞を附し、又地上の王よりも尊貴なりと主張してゐる。

法王權の迫害

「至高者の聖徒を惱ます」と。我等は既に法王が彼に従はざる者を迫害した事及び其等の迫害を蒙つた者は大抵

基督及び使徒達の教に従つた者なる事を學んだ。然しその迫害が、邦譯には「聖徒を惱ます」、英譯には「聖徒を磨滅」せしむるに至るとまで記されてゐる程に厳しかつた事を立證する多少の説明が必要であらうと思ふ。スコット氏著教會歴史には次の如き一節がある。「佛蘭西に於ては百萬人のウォールデンセス（基督教徒の一派）が無残にも殺された。又ジェスイット派が創設されてから三十年以内の中に九十萬人の正統派の基督教徒が殺害せられた。西班牙大元帥アルバ公は、和蘭に於て僅々數年間に普通の死刑執行官の手により三萬六千人を殺した事を自慢した。又宗教裁判所は種々の酷刑を以て三十年以内に十五萬人を殺戮した」。

天主教會内には異端者を殺戮した事を否定して、其は單に異端者を裁判して、刑を執行する爲に官權に引渡したに過ぎないといふ者がある。然しながら人の罪を判定する裁判官の責任は、その人の罪に對して死刑を執行した人の責任よりも輕いといふ事が出来るであらうか。然し其のみではない。曾てマルテン・ルーテルが斯く曰つた事がある。

「眞の教會は未だ曾て異端者を焼き殺した事はない。教會に與へられたる唯一の武器は「聖靈の劍即ち神の道」である故に、基督の弟子は政府の應援を求めた事は更にないのである」。

こ。然るにルーテルの此の言葉に對して、天主教の有力なる大僧正ベラーミン氏は次の如く曰つてゐる。

「殆ど數へ盡すことの出来ない程多數の人々が、或は燒殺され、或は其他の方法で殺害された。然しルーテルは其等を全然知らなかつたかも知れない。若し彼が知つてゐたならば、彼は鐵面皮な虚偽であることを看破したであらう。何故なら、異端者がしばしば教會によつて燒殺された事は、多の實例の中からその二三を摘録すれば充分立證

する事が出来るのである。……教會はその左右の腕なる宗教上及び政治上の君主を有するが如く、其は亦精神的及物質的の二つの劍を握つてゐるのである、即ち右手が精神的の劍を以て異端者を教化し得ないならば、左手なる物質的の劍の應援を求めて異端者を強迫した。……が、使徒達は之をなさなかつた。何故なら彼等には援助を求むべき基督者の君主がなかつたからである。然るに其後コンスタンチン帝の頃……教會は官權の應援を求めようになつた」(Dowling's History of Romanism 五四七、五四八頁)

羅馬天主教會によつて直接間接に殺された所謂異端者の總數は歴史家によつて相違はあるけれども、多きは一億萬人といひ、少きも五千萬人を降らないといつてゐる。斯の如く小さき角は至高者の聖徒を迫害したのである。

時と法とを變へんことを望まん

「彼また時と法とを變へんことを望まん」こ。茲に問題とされてゐる時と法とは眞の神の制定し給ふ時彼の律法なる十誡の事である。神は日没を以て一日の始と終の境を定め給うた。然るに天主教では夜の十二時を以て一日の境となして神の制定し給ひし時を變更した。又天主教では十誡の中の第二條すなはち、「偶像を彫み……之を拜むべからず」てふ誡を抹殺し、而して誡の數を十にする爲に第十條の誡を二つに分つてゐる。更に第四條の誡は上の句一句を保存してゐるのみで、他は全部之を抹殺し、その日即ち安息日を土曜日より日曜日に變更してゐる。之は時と法とを同時に變更したものである。(一二四頁十誡對照表を参照されし)

天主教の十誡

I 我は主なる汝の神なり 我の外汝に神あるべからず

II 汝主なる汝の神の名を濫に呼ぶ勿れ

III 汝安息日を聖日とすべき事を記憶のべし

IV なんぢ父母を尊敬ふべし

V 汝殺すなかれ

VI 汝姦淫するなかれ

VII 汝盜むなかれ

VIII なんぢ偽證するなかれ

IX なんぢ人の妻を戀ふるなかれ

X なんぢ人の所有物を食するなかれ

—公教要理 46 頁—

異神の十誡

I 汝わが面の前に我のほか何物をも神とすべからず

II 汝自己の爲に何の偶像をも彫むべからず 又上は天にある者 下は地にある者 並びに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず 之を拜むべからず 之につかふべからず 我エキバ汝の神は嫉む神なれば我を憎む者に向ひては父の罪を子に報いて三四代に及ぼし 我を愛し わが誠命を守る者には恩恵を施して千代に至るなり

III 汝の神エキバの名を濫に口にあげべからず エキバは己れの名を濫に口にあげる者を罰せしめおさざるべし

IV 安息日を憶えて之をきよくすべし 六日の間働きて汝の一切の業を爲すべし 七日は汝の神エキバの安息日なれば何の業務をも爲すべからず 汝も 汝の子息 息女も 汝の僕 婢も 汝の家畜も 汝の門の中に居る他國の人も然り 其はエキバ六日の中に天と地と海と其等の中の一の物を作りて第七日に息みたればなり 是をもてエキバ安息日を祝ひて聖日とし給ふ

V 汝の父母を敬へ 是は汝の神エキバの汝に賜ふ所の地に汝の生命の長からん爲なり

VI 汝殺すなかれ

VII 汝姦淫するなかれ

VIII 汝盜むなかれ

IX 汝その隣人に對して虚妄の證據を立つる勿れ

X 汝その隣人の家を食べるなかれ また汝の隣人の妻及びその僕 婢 牛 驢 馬 ならびに凡て汝の隣人の所有を食する勿れ

—出埃及記 20: 3-17—

前述の安息日の變更は、天主教が基督教全体を支配する権力のある證據なりこの自證をしばしば天主教の圖書中に散見するのである。その一部を摘録すれば左の如くである。

【問】 教會が祭日及び聖日を制定し得る權威を有する事は如何にして證明し得るか。

【答】 一新教徒も承認する如く、安息日を日曜日に變更したる決議による。而して安息日は之を嚴守しても、同じ教會の制定したる他の祝祭日は殆ど之を犯す新教徒は實に矛盾も甚だしきを得ない。 ("Abridgement of Christian Doctrine" by Rev. Henry Tuberville, D. D., of Douay College, France (1649) 五八頁)

【問】 教會が祝祭日の細則を制定する權威ある事を證明する他の理由があるか。

【答】 『若し教會が斯る權威を持つてゐなかつたならば、教會は現代の凡ての宗教家が一致するやうな事をなし得なかつたであらう。即ち教會は第七日目安息日を遵守する代りに、聖書上全然根據のない一週の第一日なる日曜日を遵守せしめる事は出来なかつたであらう。 ("A Doctrinal Catechism" by Rev. Stephen Keenan 一七四頁)』

『凡ての基督者は日曜日に不必要なる勞働を避けて、其の日を聖別しなければならぬのではないか。之は我等の神聖なる義務の中最も重大なる律法を遵守する事ではないか。然し創世記より黙示録の終まで讀んでも日曜日を聖別したといふ聖句を發見しないであらう。聖書には我等の曾て聖別した事のない土曜日の嚴守を命じてゐる。 ("The Faith of Our Fathers" by James Cardinal Gibbons, Baltimore, John Murphy & Co., 111頁)』

【問】 天主は第三誡を以て何を命じ給ふや。

【答】天主は第三誡を以て主の日を守ることを命じ給ふなり。

【問】何故に一週間に一日を主日とするや。

【答】天地創造の後天主一週間に一日を安息日と定め、之を聖日とすべきことを命じ給ひしに因りたり。

【問】主日は一週間中何曜日に入るや。

【答】舊約時代には土曜日に當りたれども新約以來は日曜日に當るなり。

【問】何故に日曜日を主日と爲すや。

【答】イエズスキリストの御復活及び聖靈の降臨は日曜日に當りたれば、聖會に於て此の日を主日と定めし故なり。

【問】如何にして日曜日を守るべきや。

【答】第一労働を休み、第二ミサ聖祭を拜聴するを以て日曜日を守るべきなり。

【問】是の外には日曜日に心懸くべき事なきや。

【答】有り、平日よりは多分に祈禱をなし、説教を聴聞し、聖式に與り、又は慈善の事をなす等はなり。

(上記六問答は公教要理五二、五三頁天主の第三誡より拔萃)

一時と二時と半時

「聖徒は一時と二時と半時を経るまで彼の手に付されてあらん」云。之は法王權が神の民を迫害し得る期間を豫言

したものである。一時と二時と半時は合計三年半である。(第四章参照)。然し我等は之が字義的の三年半であると思惟する事は出来ない。何故なら法王權の迫害期間は其よりもすつと長期間に亘つてゐたからである。が、茲に三年半の意味を解く鍵が下記の如く與へられてゐる。「汝これを終へなばまた右を下にして臥し、四十日の間ユダの罪を負ふべし。我なんぢの爲に一日を一年と算ふ。(結四ノ六)」「汝らはかの地を窺ふに日數四十日を経たれば、其一日を一年として汝等四十年の間その罪を任ひ、わが汝らを離れたるを知るべし。(民一四ノ三四)。即ち神は己が民に對して時に關する豫言をなし給うた場合、一日を一年に算へる事に定め給うたのである。而して聖書が最初に與へられた時代に生存した人々は、一年を三百六十日と定めてゐたから(創七章参照)三年半とは即ち千二百六十年間の事である。

我等は既に紀元五百三十三年にジャスチニヤン帝が羅馬府の監督の爲に「監督が全教會の首領で且つ異端者の懲治者」であるとの詔勅を發布した事を學んだ。然し羅馬府の監督は彼に反對したエリヤン派を征服しなければ斯の權力を振ふ事は出来なかつた。何故ならば羅馬府の監督の怒に觸れた者もエリヤン派の國々を避難所とする事が出来たからである。が、紀元五百三十八年に東ゴートが滅亡した時より聖徒は全く彼の手中に付されてしまつたのである。そして此のときより羅馬法王として擡頭し來つた羅馬府の監督は、益々權力を振ひ、常に國家の權力を利用するに至つた。而して紀元八百年頃より法王を援けて熱心に所謂異端者を迫害した主權者は、佛蘭西皇帝の右に出る者はあらず。故に佛蘭西國民は自然に法王權を迫害及び壓迫の象徴と見るに至つた。その證據には、千七百九十三年に佛蘭西

國民が皇帝に叛旗を翻した時に、先づ第一に凡ての宗教を撲滅しようとしたのではないか。而して千七百九十三年に始つた佛蘭西革命は、管に佛蘭西を君主政體より共和政體にしたい許りではなかつた。佛蘭西の大將パーシーエーは千七百九十八年に羅馬に進軍し、法王を捕虜にして佛蘭西に連れ歸つたが、法王は其より二年後に死去したのである。然し法王權は今尙存在してゐる。けれども千七百九十八年以來彼は聖徒を迫害する事が出来なくなつてしまつたのである。然り、法王が紀元五百三十八年より振ひ來つた權力は、ダニエルの異象中に示されし豫言の如く、正しく千二百六十年後即ち紀元千七百九十八年に過ぎ去つたのである。

我等は小き角に關する凡の豫言が法王權の歴史によりて正確に成就してゐる事を學んだ。一方に我等はダニエルの異象が神より來つた事に心服せしめられたが、又一方には、羅馬天主教會員中には幾多の善人正直な人々があるであらうけれども、教會そのものは兇暴極る迫害をした教會で、その教ふるころの教理の多は誤謬であるこゝを示されたのである。今日法王權の勢力は全世界を通じて益々増加しつゝある。之は死ぬるばかりの傷を受けた獸(法王權)が癒ゆるといはれてある默示録第十三章の豫言の明かなる成就である。死ぬるばかりの傷は千七百九十八年に受けたのであるが、其の癒ゆるこの意味は、基督再臨の少し前に法王の迫害權は恢復し、再び凡ての人々をして強制的に彼の教に従はしむるに至るこゝ事である。故に我等各自は羅馬天主教會の如き偽の宗教に欺はされない様に神の眞理を深く會得する事が最も肝要である。之が我等にこゝつて唯一の安全である。古代の豫言者は「我が民は知識なきによりて亡はさる」と言つたが、此の原則は今日も尙適用し得るのである。

日本に於ける天主教會

日本に於ける羅馬天主教會歴史は、同教會が他の國々へ宣傳したのと同じく、基督及び彼の眞の弟子の宣教方法は大に異つてゐる事を示してゐる。基督の眞の使者は救の智識を廣めるに當つて親切に愛を以て靜かに勸めるであらう。福音は人々を強制的に悔改めさせようとはしないのである。然るに天主教は巧みに自家廣告をなし、又出來さへすれば權力を用ひて自己の宗教に改宗せしめんとするのである。彼等は常に主權者に媚び、之に容れらるれば、人々を壓制的に天主教信徒となさんとするのである。即ち多くの所謂基督者大名は斯して家臣を壓制的に天主教信徒となしたのである。法王と西班牙及び葡萄牙の二大天主教國とが宗教と國權とを結合して害毒を流したる爲に豊臣秀吉は天主教に反對したのである。爾來約三百年間わが國に於ては基督教は嚴禁せられ且つ迫害せらるゝに至つたのであつた。而して世は移り變つて現代に及んだとはいへ、「羅馬は決して變る事なし」とは法王權の誇とする處であることを記憶しなければならない。

然し乍ら、王冠を提せられたる時、「我が國は此世に非ず」と叫んで之を拒否した謙遜なイエスの傳道方法に彼等の其とは實に霄壤の相違ではないか。凡て宗教の宣傳に國權を利用せんとする者に對して、基督は、「カイザルの物はカイザルに歸し、また神の物は神に歸すべし」と語り給ふのである。つまり其は政教の絶對分離を意味し、各その定められたる圈内に活動する事を教へたものである。是こそ眞の意味に於ける政教の自由である。

天主教の教理

天主教の教理が眞の基督教の教理に悖つてゐる點を簡單に擧ぐれば左の如くである。我等の救主なる基督の恩恵により信仰によつて救はれるといふのではなく、行爲に依つて救はれると云ふ教理、改心によつて聖められるのでなく改心の印なるバプテスマに依つて聖められるとの教理、その結果嬰兒にバプテスマを施す事、如何に罪深き神父であつても、彌撒の時パンミ葡萄酒を實際に基督の肉ミ血に變へる力を有つミ冒瀆にも斷言してゐる。懺悔式即ち其は神父に對して罪を告白する事であるが、之は神人間の唯一の仲保者なる基督の代りに偽の仲保者を立てる事になる。神父及び尼の獨身生活、之は人類に對する神の御計畫に反するが故に男女關係を過る元となる。基督及び聖徒の像を拜する事、之は十誡の第二條に嚴禁せられたものである。又聖書の配布ミその研究を妨害する事、等である。

以上に掲ぐる如き殘忍なる宣傳方法ミ誤謬に充ちたる教理を教ふるが故に、天主教は自ら滅亡に歸するのみならず各時代を通じて同教會を助けて盛大ならしめた凡ての國々も滅亡するのである。ダニエルは異象に於て次の如く示されてゐる。『その角の大なる事を言ふ聲によりて我觀つ、ありけるが、我が見る間にその獸は終に殺され、體を壞はれて燃ゆる火に投入られたり。またその餘の獸はその權威を奪はれたりしが、その生命は時三期の至る迄延されたり』(但七ノ一、一二)ミ。最後に獸を滅亡せしむるものは法王權の大なる言である。その中には羅馬及び分裂後の羅馬また勿論法王權も加つてゐる。第四の獸に滅亡の來る時は他の三つの獸の最後ミは異り、其領土だけ移つて生

命は永へるのではない。バビロン、メド・ペルシヤ、ギリシヤはその領土を失つたけれども、その子孫は今日尙ほ存在してゐる。又その法律及び宗教の一部は今日も尙ほ存在してゐる。彼等の文學は全世界に研究せられてゐる。その言語は今日も尙ほ使用せられてゐる。その藝術品は今尙ほ各所の大博物館を飾つてゐる。彼等の科學は今日の科學の基礎をなしてゐる。然し乍ら羅馬の最期は、又ある意味に於て現代諸國の末路は前三者の其ミ同じではない。其は火を以て焼き滅はされるのである。何故ならば基督が臨る時代に地上に存在する最後の權力であるからである。ダニエルが小き角に就て最後に聞いた言葉は、彼が解明したネブカデネザル王の夢の最後の言葉を想起させるではないか。

聖徒の凱旋

「而して國々權と天下の國々の勢力ミはみな至高者の聖徒たる民に歸せん。至高者の國は永遠の國なり。諸國の者みな彼に事へ且つ順はんミ。その事ミ、にて終れり。我ダニエル之を思ひ廻して大に憂へ、顔色も變りぬ。我この事を心に藏む。」

神は、凡ての人、凡ての教會、凡ての國に正しき報酬を與へ給ふ。最後に至高者の聖徒は永遠の平和ミ祝福ミをうける事であらう。天主教徒であれ、新教徒であれ、或は基督を全然信じてゐない者にせよ、各人に最も肝要なる事は眞理を探究して天の主に會ふためにその心を備へる事である。唯、神の「永遠の聖國」の一員として數へられさへすれば、現世に於て我等の耐へ得ざる困難はないであらう。我等に拂ひ得ざる犠牲もない筈である。

第八章 牡羊と牡山羊及び小き角

何故の異象ぞ

讀者は、ダニエル書の中には何故夢や異象が斯く頻繁に記載されてゐるのであらうかと思はれるであらう。然しダニエル書に記録されたる夢や異象は決して普通一般の夢や異象ではない。其は活ける眞の神が夢や異象を用ひて將來起るべき事件を人類に啓示し、人類をして其事件に備へしめんが爲である。神は又是等の異象によりて豫言せられたる事件の大部分が成就してゐる現代に生存する我等に、歴史を研究せん事を望み給ふのである。何故なら歴史は神の聖言の正確なる事を保證してゐるからである。神は間もなく地上に起らんとする重大なる事件を豫言なし給うた。而して我等が若し未來を知り得るならば、その事件の爲に準備をなし得るのである。

實に現代は全世界が動搖しつゝある時代である。戦亂、飢饉、疫病、同盟罷工、又天災地變等は人心をして極度に不安ならしめつゝある。故に多數の人々は恐れつゝ來らんとする事を待ち悩んでゐる有様である。然るに神は是等の戦慄すべき状態が出現する事を豫言なし給ひしのみならず、如何にしてこの不安極まる人生を安全に通過し、且つ如何にして未來の平和と幸福とを獲得し得るかを教へ給うた。されば忠實に聖書を研究し、果して聖書が眞理であるか否かを探究しようではないか。斯くする者は必ずや神の建て給ふ永遠の王國に於てダニエルと相會するの光榮を擔ひ

彼によりて永遠の王國に到る道が闡明せられてゐた事を感謝するに到るであらう。

クラーク博士は本章について斯く曰はれた。「我等は茲にダニエル書中のアラム語の部分を終り、再びヘブライ語の部分に立ち戻つたのである。即ち第二章四節より第七章の終までは、歴史上からも豫言上からも共にカルデヤ人が中心となつてゐるから全部カルデヤ語即ちアラム語で記されたのである。然るに以下の豫言はカルデヤ帝國以後に關する豫言にして、且つ主として教會及び神民一般に關するものなるが故にヘブライ語で録されてゐる。即ちヘブライ語は、その當時神が新約時代に特に關係ある事件を神民に啓示する爲に用ひ給うた國語であつたのである」云々。

新たななる異象

「我ダニエル前に異象を得たりしが、後またベルシャザルの第三年にいたりて異象を得たり。」

聖書が作話でない事を確證する最も著しい特徴の一つは、聖書記者がその事件と關聯した出來事を腹藏なくありのまゝに記録して居る事である。即ち本節にはダニエルがこの異象を興へられた時を明記して居る。ベルシャザルの第一年は紀元前五百四十年であつた。而してこの異象がダニエルに興へられたのはベルシャザルの第三年であるが故に、其は紀元前五百三十八年であつたのである。若しダニエルが想像せられてゐる如く、彼がバビロンに捕へられたネブカデネザルの第一年即ち紀元前六百六年に約二十歳であつたとするならば、この時彼は約八十八歳の高齡であつたのである。「前に異象を得たりしが」云々は、彼がベルシャザルの第一年に興へられた第七章の異象を意味してゐる。

るのは明白の事である。

シユシヤンに於て與へらる

「われ異象を見たり。我これを見たる時に我が身はエラム州なるシユシヤンの城にあり、我が異象を見たるはウライ河の邊においてなりき。」

第一節にはこの異象の與へられた時が示してあつたが、第二節にはその場所が示してある。シユシヤンはエラム州の首府であつた。當時この地方はバビロンに屬し、其處にはバビロン王の離宮があつた。而してバビロンの大臣であつたダニエルは國務を見るため其處にゐたのである。然しシユシヤンの總督アラダテースはクロスミ共同してバビロンに向ひて弓を引くに至りし爲、イザヤ書二十一章二節の豫言に示されし如く、エラム州はメデヤ、ベルシヤ軍に加擔してバビロンを攻撃した。而してこの時エラム州は、エレミヤ記四十九章三十九節の豫言の示す如く、曩にバビロンの屬國たりし當時喪失して居た自由と獨立權を恢復し得たのであつた。

二つの角ある牡羊

「我目を舉げてみしに河の上に一匹の牡羊立ちをり、之に二つの角ありて、その角共に長かりしが、一つの角はその他の角よりも長かりき、その長き者は後にのびたるなり。我みしにその牡羊、西、北、南に向ひて抵觸り



(ナシルム・ドム) 羊牡るあ角のつ二

けるが、之に敵るこゝを得る獸一匹もなく、またその手より救ひ出す事を得る者絶えてあらざりき。是はその心にまかせて事をなし、その勢威甚だ盛なりき。

この象徴の解明は、二十節に「汝が見たるかの二つの角ある牡羊はメデヤとベルシヤの王なり」に極めて明白に示されてゐる。故に我等は、この象徴が如何によくメデヤとベルシヤによつて成就したかを考察すればよいのである。即ち、二つの角は同國が二人種によつて構成されてゐたこゝを意味するのである。而して「長者は後にのびたるなり」とはベルシヤの事で、彼等は最初は單にメデヤとの聯合軍であつたといふに過ぎなかつたけれども、遂に彼等はその覇權を握るに至つた事をいふのである。牡羊が抵觸つた方角は、メド・ベルシヤが征服した方向を示すものにして、神の攝理によつて同國が全盛時代に達した時には、向ふ處敵なく、彼に敵り得る國はなかつたのである。斯くメド・ベルシヤの遠征は効を奏し、アハシユエロス王（帖一ノ一）の時代には印度よりエテオピヤまで百二十七州を治め、その勢力は當時知られてゐた全世界に及んでゐたのであつた。故に、「是はその意にまかせて事をなし、その勢威はなはだ盛なりき」との豫言は、歴史の實際を的確に描寫してゐるのである。

牡山羊と牡羊との戦ひ

「我、これを考へ見つ、ありけるに、一匹の牡山羊全地の上を飛びわたりて西より來りしが、その足は土を履まざりき。この牡山羊は目の間に著明しき一つの角ありき。此者さきに我が河の上に立てるを見たる彼の二つの角

ある牡羊に向ひ來り、熾盛なる力をもて之の所に跑けいたりけるが、我觀てあるに牡羊に近づくに至りて、之に向ひて怒を發し、牡羊を撃ちてその二つの角を碎きたるに、牡羊には之に敵る力なかりければ、之を地に打倒して踏みつけたり。然るにその牡羊をこれが手より救ひ得る者あらざりき。

豫言者は「我これを考へ見つ、ありけるに」ミ、眞理を愛し神の國の事を尊重する凡の者に好範例を残してゐる。曾てモーセは燃ゆる棘を見た時「我ゆきてこの大なる觀を見」んといつた。然るに今や自己の享樂や業務を暫く措いて、神の恩寵と攝理の許に特に注意を促されつ、ある重大なる問題を探究する者の極めて少きは實に遺憾である。

第五節に示されたる象徴は、天使により次の如く解明されてゐる。即ち第二十一節に「又かの牡山羊はギリシヤの王（或は王國）……なり」と記されてゐる。是がギリシヤ人即ちマケドニア人の象徴として如何に相應しいかに就て監督ニユートン氏はマケドニア人の事を、「ダニエルの時代より約二百年前からイーギアデー（Aegadae）即ち山羊族と稱してゐた」と言つてゐる。更に同氏はその名の語源について偶像教の著書中より左の一節を引證してゐる。

「第一の王カラヌスはギリシヤ人の大群を率ゐてマケドニアに新領土を發見せんせし時、その案内者として山羊を連れ行けこの神託をうけた。而して後大暴風に逐はる、山羊の群を見、之に従つてエデサに行き、其處を帝國の首府となし、山羊を國族に畫き、町をイーギー（Aegae）即ち山羊の町と名づけ、其民をイーギアデー（Aegadae）即ち山羊族と呼んだ。『イーギー（Aegae）の町はマケドニア王朝の墳墓の地である。又アレキサンダー大帝の息子がロツクスアナ（Roxana）によつてアレキサンダー・イーグース（Alexander Aegus）即ち山羊の子と命名せられ



（ナシリギ） 羊山牡る角のつーきし著に問の日